



外国出身住民にとっての
東日本大震災・原発事故

FIA活動の記録

～FIAの取り組みと外国出身住民100人の証言～

(公財)福島県国際交流協会(FIA)

発行にあたって

平成23年3月11日(金) 14時46分に発生した東日本大震災から3年目を迎えました。千年に一度という大規模地震は、福島県をはじめとする多くの地域に未曾有の被害を及ぼしました。特に、福島県においては、東京電力福島第一原子力発電所の事故による避難が継続しており、さらには風評も今なお払拭されておられません。

一方、今回の震災においては、全国、そして海外の皆様から貴重なご支援と温かい応援の声を多くいただきました。インフラや流通等がストップし、情報も物資も人も十分でない厳しい状況の中、改めて人とのつながり、その温かさというものを痛感いたしました。ここに改めて厚く御礼を申し上げます。

さて、震災当時、福島県には、中国、フィリピン、韓国朝鮮をはじめとして、約1万人の外国人登録者がおりました。外国出身住民^{*}は、日本語の問題等から、災害時は災害弱者となるリスクが高いと言われていています。今回の災害時、当協会や市町村国際交流協会、日本語教室、大学等の関係機関は、彼らをどのようにサポートしたのでしょうか。また外国出身住民はどのような状況に置かれ、どのように行動したのでしょうか。これらのことについて、当時(平成23年3月11日～平成24年3月31日)の状況等を記録として残し、またその経験から得られた知見を、全国に、そして海外に発信していくことが、当協会に課せられた社会的使命であると考え、活動の記録を作成し、このたび発行することといたしました。

この報告書には、平成24年6月～12月にかけて実施した外国出身県民100人へのアンケート調査の結果も盛り込んでおります。調査対象者のうち70人には、聞き取り調査も行いましたが、書面ではわかり得ない様々な肉声が聞こえてきました。もちろんそれらが全ての外国出身住民の声を代表するものではありませんが、震災時における外国出身住民の思い・行動のドキュメントであり、その緊迫した声に是非耳を傾けていただきたいと思います。今回の調査に協力していただきました100人の外国出身住民の皆様はこの場を借りて御礼を申し上げます。

この記録が、今後の外国出身住民に対する災害対策の一助となり、震災時、全国のそして海外の皆様からいただいたご支援に対し、多少なりとも御恩返しとなることを祈念して発行の挨拶とさせていただきます。

平成25年7月

公益財団法人 福島県国際交流協会

^{*}「外国出身住民」：福島県内に暮らす外国出身、または外国籍の県民(帰化者及び日本生まれの外国籍者を含む)



飯坂けんか祭りに参加した外国出身住民
(H23.10.5)



東日本大震災応援チャリティ
国際理解講座で製作
(H23.7.9)



震災直後の当協会事務所内の様子
(H23.3.11 午後4時頃)

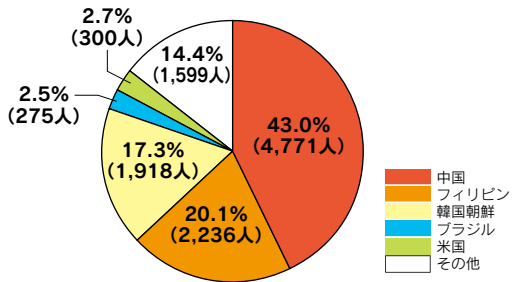


I 震災前の福島県の外国人登録者の状況と 東日本大震災及び東京電力福島第一原子力 発電所事故の状況

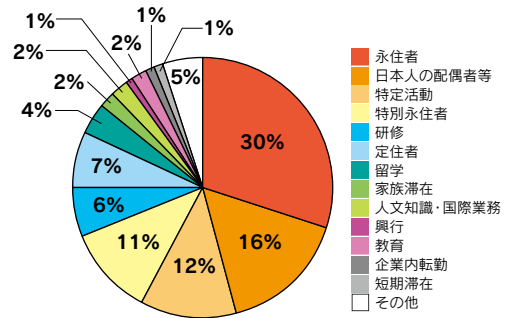
1 震災前の福島県の外国人登録者の状況(平成22年12月末現在)

外国人登録者数 11,099人(県人口に占める外国人登録者数の比率 約0.55%)

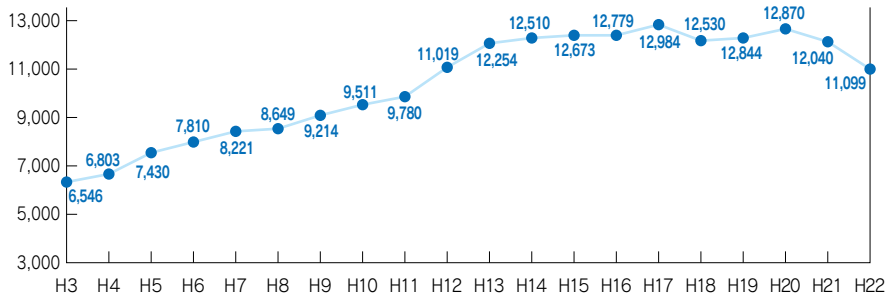
国籍別



在留資格別



外国人登録者数の推移



沿岸部及び東京電力福島第一原子力発電所から30km圏内の町村、一部が30km圏内に含まれた市町村等の主な国籍別外国人登録者数

	中 国	フィリピン	韓国朝鮮	アメリカタ	イブラジル	ベトナム	合 計	摘 要
いわき市	680	328	371	49	52	14	1,800	※2
相馬市	139	13	25	3	3		193	※5
田村市	227	38	29	19	3	30	361	※2
南相馬市	90	55	23	7	6		211	※2
川俣町	59	35	4				110	※4
広野町	22	3	13				44	※1
楢葉町	18	9	4		5		37	※1
富岡町	31	25	10	2		2	86	※1
川内村	21	12					35	※1
大熊町	40	14	14		2		75	※1
双葉町	4	13	3	2		3	29	※1
浪江町	47	31	12	4	4	9	111	※1
葛尾村		5					6	※1
新地町	12	5	11				33	※5
飯舘村	15	17	6				39	※3
合 計	1,405	603	525	86	75	47	3,170	

個人情報の保護の観点から、各国籍別人員欄において0又は1のものは空欄とした。

※1:第一原子力発電所から30km圏内 ※2:一部が30km圏内 ※3:計画的避難区域 ※4:一部が計画的避難区域 ※5:周辺区域

(出典:「福島県の国際化の現状 平成23年3月」福島県生活環境部国際課発行)

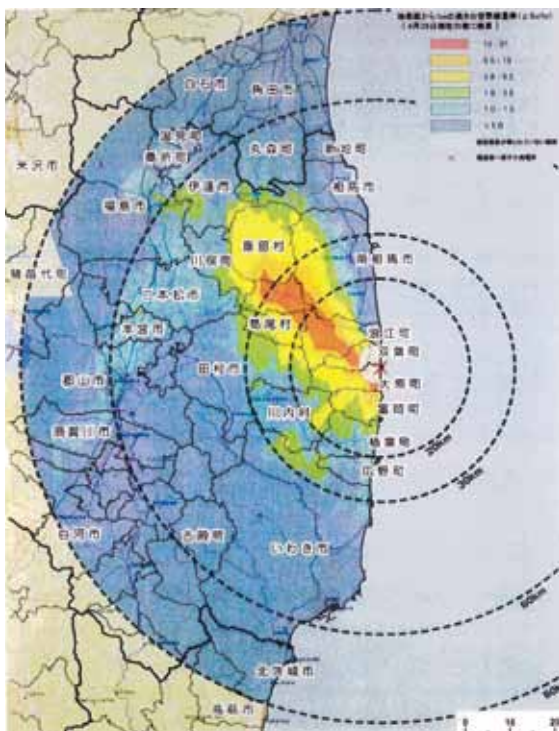
2 東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故の状況

●3月11日(金)

- ・14時46分、マグニチュード9.0の大地震発生
- ・14時49分、気象庁が東北から関東にかけての太平洋沿岸に大津波警報を発令
- ・20時50分、福島県が福島第一原発から半径2km以内の住民に避難指示
- ・21時23分、政府が福島第一原発から半径3km以内の住民に避難指示、半径3kmから10kmに屋内待避を指示



相馬市原釜地区の被災状況(H23.4.12撮影)



セシウム134,137の地表面の蓄積量
(H23.4.29現在の値に換算)(出典:文部科学省HP)

●3月12日(土)

- ・5時44分、政府が避難指示区域を福島第一原発から半径10kmに拡大
- ・15時36分、福島第一原発第1号機原子炉建屋で爆発発生
- ・18時25分、政府が避難指示区域を福島第一原発から半径20kmに拡大

●3月14日(月)

- ・11時01分、福島第一原発第3号機で水素爆発

●3月15日(火)

- ・6時10分、福島第一原発第2号機で爆発音
- ・9時38分、福島第一原発第4号機で火災発生
- ・11時00分、政府が福島第一原発の半径20～30kmの住民に屋内退避指示
- ・中国外交部が在留自国民に対し被災地域からの退避を勧告。併せて避難用バスを手配し自国民関係者の避難支援を開始(これまでの外国出身住民の話から、15日以降中国以外にも、アメリカ、インドネシア、ブラジル、フィリピンの大使館などが次々とバスを手配し、自国民関係者の避難を支援した模様)

●3月17日(木)

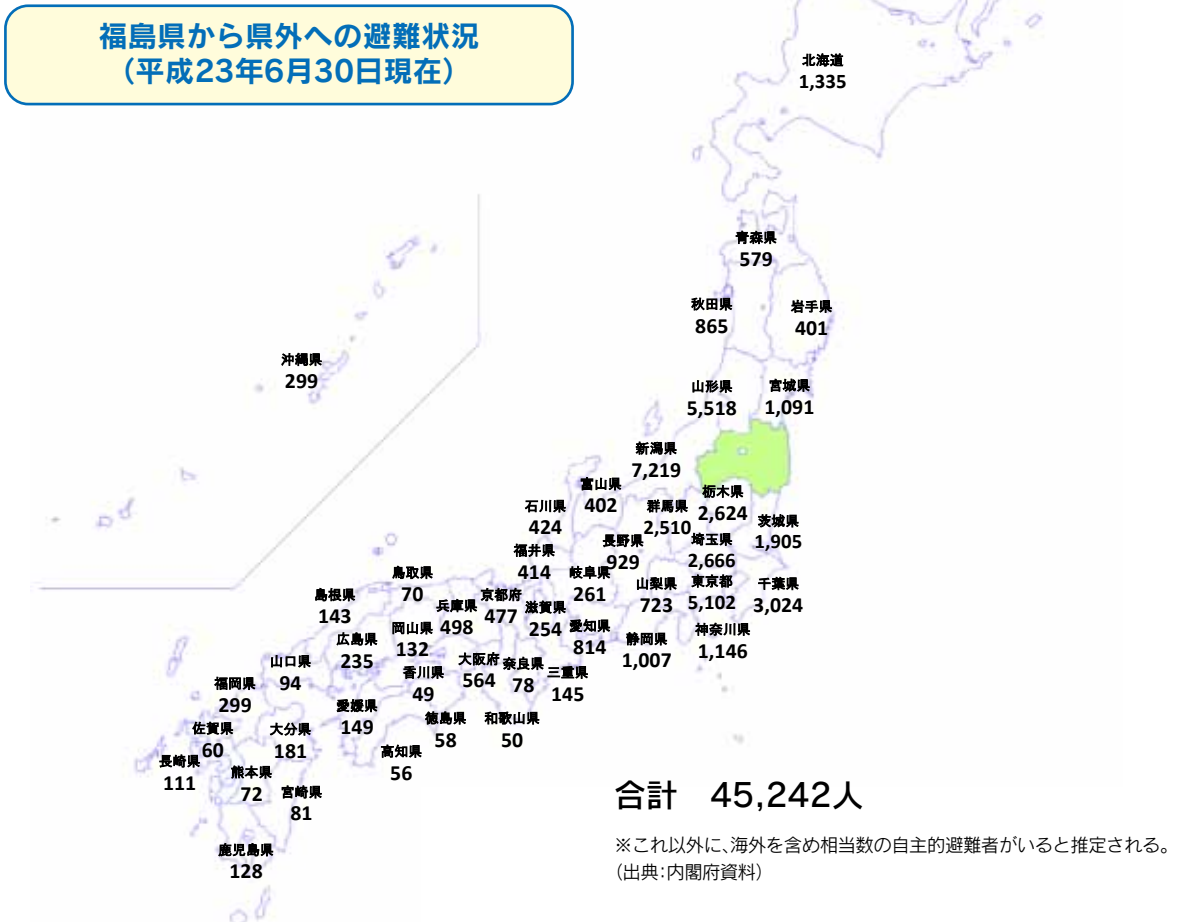
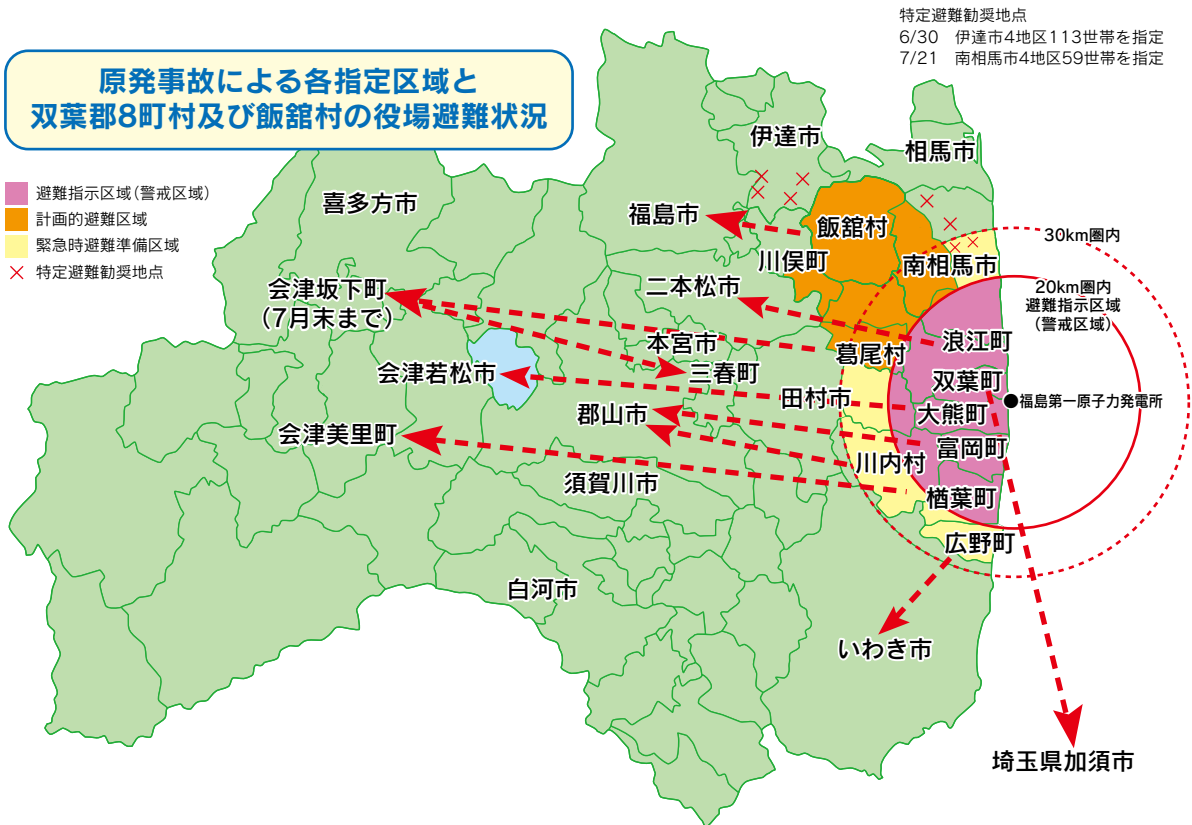
- ・アメリカ政府機関が福島第一原発から半径80km以内に滞在する自国民に対し退避勧告

●4月21日(木)

- ・政府が福島第一原発の半径20km圏内を警戒区域として設定

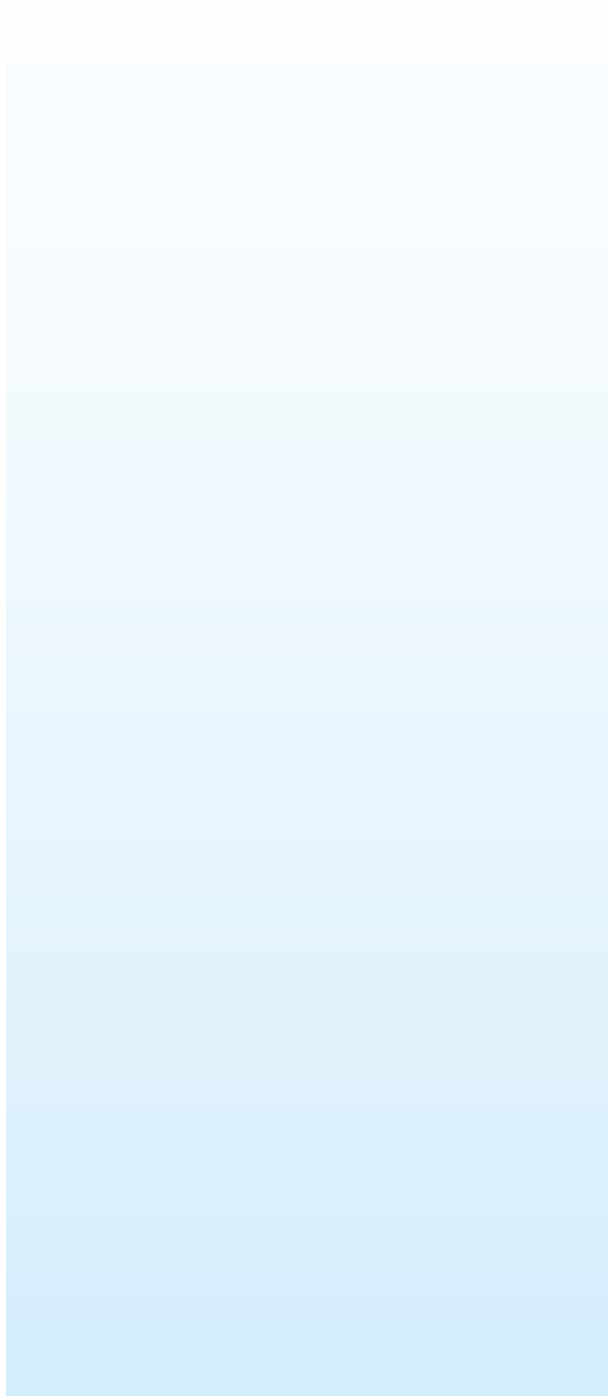
●4月22日(金)

- ・政府が福島第一原発の半径20kmから30km圏内について、屋内退避指示を解除
- ・政府が飯舘村等を「計画的避難区域」に指定





Ⅱ 震災時から平成 23 年度末までの 当協会の主な取り組み



1 外国語による地震情報センターの設置

(1)地震情報センターについて

県災害対策本部からの情報を英語と中国語に翻訳し、県HPにアップして外国出身住民に情報提供するとともに、電話やメールでの相談に応じるため、県国際課と共同で立ち上げた組織

(2)立ち上げまでの経緯

3月11日(金) 14:46

東日本大震災発生

東京電力福島第一原発外部電源一部喪失

- ・当協会事務所内の被害が激しいため、通帳と印鑑、金庫・車の鍵、サポーター登録ファイル(紙データ)を持ち出し、職員は自宅待機

3月12日(土)

- ・福島県庁及び当協会事務所が入っている県庁舟場町分館の安全確認ができないため、立ち入り制限
- ・県災害対策本部が入った県自治会館で待機しつつ、県国際課と今後の対策を協議
- ・(財)自治体国際化協会の災害時多言語情報作成シートのURL案内を、県国際課を通じて県内の市町村にファックス

3月13日(日)

- ・県国際課と今後の対策を協議し、14日から県自治会館1階のスペースに国際課と合同の仮事務所を開設することについて決定
- ・(財)自治体国際化協会の災害時多言語情報作成シートのURL案内を県内の市町村国際交流協会にファックス

3月14日(月)

- ・県自治会館1階に仮事務所を開設
- ・県と当協会が共同で「外国語による地震情報センター」を15日に設置することを決定。その予告を午後3時に当協会ホームページにアップ

3月15日(火)

- ・県災害対策本部暫定ホームページへの英語及び中国語ページのアップ作業開始

(3)運用体制

開設時間

平成23年3月……………毎日 9:00～16:30

平成23年4月～5月……………毎日 9:00～16:00

平成23年6月……………月～土 9:00～16:00

平成23年7月～平成24年3月…火～土 9:00～17:00

対応言語

英語、中国語

(タガログ語、韓国語、ポルトガル語は平成23年5月から毎週第1・2・3水曜日午後)



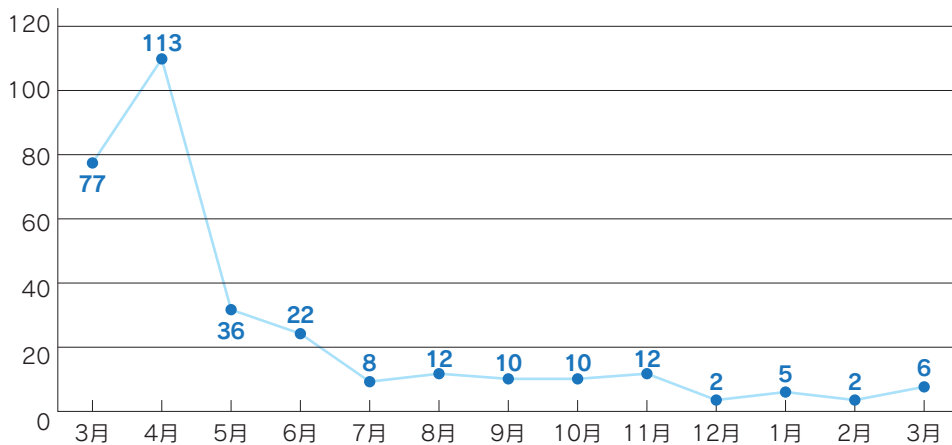
外国語による地震情報センター

【県国際交流協会】英語と中国語で県や国の災害情報をホームページ上で公開しているほか相談窓口を設置。ホームページアドレスは(<http://www.worldvillage.org>)。☎080-10851-4880。相談窓口は県自治会館1階(福島市中町8の2)で、時間は平日午前9時～午後4時30分。

新聞の案内記事

(平成23年3月19日 福島民友)

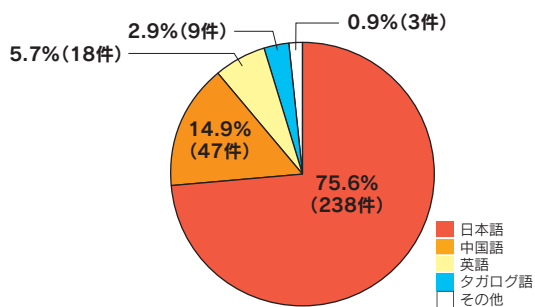
月別相談件数(平成23年3月～平成24年3月)



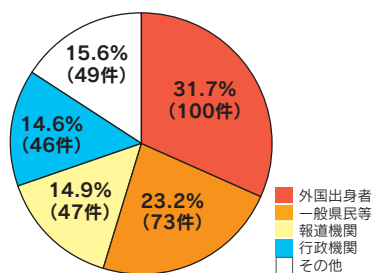
月別相談件数の内訳

相談内容	出身国	出身国								合計
		日 本	中 国	フィリピン	韓国朝鮮	米 国	カナダ	英 国	他	
1 在住外国人等からの相談										
避 難		5	3	17				1		26
放 射 線		2	7	2	1			3	3	18
子どもの学校・教育		1	5	1						7
査 証・出 入 国		2	9	1						12
福島 の 状 況 確 認		4	5	1						10
仕 事			4	3						7
そ の 他		9	6	4		2			1	22
小 計		23	39	29	1	2		4	4	102
2 県内外からの救援相談										
物 資 関 係		13		2		1	1	1		18
ボランティア関係		8	1	2	1		1	1	2	16
義援金・寄付金関係		3					2			5
3 行政機関等からの相談・依頼		51	2		1					54
4 民間団体からの連絡・問い合わせ		50			3	1				54
5 報道機関からの問い合わせ		36	5			2		1	3	47
6 その他		14	1			1			3	19
小 計		175	9	4	5	5	4	3	8	213
合 計		198	48	33	6	7	4	7	12	315

言語別相談件数



相談者属性別



2 避難所巡回

市内の大規模避難所を巡回し、「外国語による地震情報センター」のちらしを掲示板に貼りながら、避難所対応職員等からの聞き取りや会場内巡回を通して外国出身住民の状況把握を行った。

なお、3月21日(月)からは、福島県のホームページにアップされた避難者リストから外国出身住民らしい名前がある避難所に電話して、状況把握を行った。

ちゅうごくご
ENGLISH と中国語の
じしんじょうほうていきせう
地震情報提供センター
Earthquake Information Center (English & Chinese)

<http://www.worldvillage.org/>
 検索 **福島県国際交流協会**

Fukushima International Association

☎ 024-521-7183 (I.A.D.国際課)
080-1851-4881
Mon.-Fri. (週一-五) 9:00~16:30
Interpreter might not be on site at times.

避難所に貼ったチラシ

月 日	避難所	職員からの聞き取り内容、及び巡回による状況把握
3月15日 (火)	福島競馬場	「当初中国語を話す人が2名いたが、現在は避難所を出た模様」
	福島市保健福祉センター	「外国人は家族と一緒に来ているようなので、現在のところ意思疎通の問題は起きていない。」
	福島県立福島高校	「浪江町や小高区からの住民が避難している。避難所入所者名簿を見ても日本名だと外国人がどうかかわからない。」
	福島県立橋高校	「外国人はいないようだ。」
	福島市立南向台小学校	「外国人はいないようだ。」
	福島市吉井田学習センター	「外国人はいないようだ。」
3月16日 (水)	福島県青少年会館	「当初は外国人が数名いたようだが、今はいない。」
	福島県立明成高校	「外国人はいないようだ。」
	福島県あづま総合運動公園	「外国人はいないようだ。」
	福島県立福島西高校	「名簿上、外国人はいないようだ。」
3月19日 (土)	福島県あづま総合運動公園	名簿上で、葛尾村居住で名前がカタカナの女性2名を確認。職員によると外国人と思われる人がいたとのことだが、それ以上の情報はなし。

3 震災復興版ジャイロ『がんばろう福島』の発行

(1) 発行の目的

外国出身住民や県に縁のある県外・海外の外国人に向けて、多言語で震災の関連情報を提供することにより、不要な不安を取り除き、また、国内、海外からの福島に対する風評を払拭するため、当協会の広報紙である「Gyro (ジャイロ)」の震災復興版を発行した。(平成24年度からは、ブログ版として現在も発信中)

(2) 発行の形式

ニュースレター

- ・仕様：A4判2ページ両面カラー刷り
- ・発行回数：平成23年5月～6月の月2回と11月の月1回 計5回
- ・発行部数：日本語(2,000部)、英語(1,000部)、中国語(1,000部)



ニューズレター版「がんばろう福島」

※創刊号及び第2号については、資料編(P76～P79)参照

ホームページへの掲載

- ・掲載回数：平成23年5月～6月は月2回、平成23年8月から平成24年3月までは月1回 計12回
- ・言語：日本語、英語、中国語、韓国語、フランス語、タガログ語(平成23年9月から)、ポルトガル語(平成23年9月から) 計7か国語

(3) 海外への発信

(財)自治体国際化協会の海外事務所や福島県の上海事務所、JICA二本松など関係機関のホームページとリンクを張り、海外への発信に努めた。

(4) 福島に暮らす外国出身者の声(抜粋)

市内でインド料理レストラン2店舗と中古自動車販売会社を営んでいる。地震発生後、レストランは材料が調達できないため一週間ほど店を閉め、ほぼ毎日市内の避難所で炊き出しをした。(福島市在住インド出身男性 平成23年5月取材)

地震当日は近所の人に招かれて、朝まで一緒に居させてもらい、とても心強かった。(郡山市在住イギリス出身女性 平成23年5月取材)

もちろん放射能は心配。でもこれも私の人生の一部、天命である。平常心でいなければと思っている。そう思わないと生きていけない。(月館

町在住中国出身男性 平成23年5月取材)

放射能が不安。私たち家族は、子どもの学校のことや自分の仕事のこと、両親のことがあるのでここに残っている。ただ時々週末には、リフレッシュのため家族で会津の温泉に出かけている。(郡山市在住インド出身男性 平成23年6月取材)

母国に一時避難したが、大学が始まる5月に福島に戻った。大学に行ってみるとマスクをつけている人も思ったほどいないし、みんな楽しそうに笑顔でサークル活動をしている様子に感動した。(福島市在住中国出身男性 平成23年6月取材)

原発事故後、1か月半ほど妻の実家のニュージーランドに避難。今は普通の生活に戻ってそれなりの生活をしている。1歳になる娘を肩車して散歩するなど自由に外で遊べないのがとても残念だ。(福島市在住ブラジル出身男性 平成23年8月取材)

私が手伝っている幼稚園の半数の子どもたちが家を失い、なかには家族を失った子どももいる。子どもたちに以前の笑顔が戻るようにすること、これこそが私がここに戻った意味と思っている。(相馬市在住メキシコ出身女性 平成23年8月取材)

会津は、放射線の値も低く直接的な地震の被害も少なかったにも関わらず、風評被害によって、とりわけ海外からの観光客が劇的に減少し、農産物は売れない。私は震災後も会津で仕事をするという決意は揺るがなかった。こういう大変な時だからこそ、会津に暮らしている外国出身者をサポートし、復興に協力したいという人たちへ情報を発信していきたい。(会津若松市在住アメリカ出身男性 平成23年9月取材)

今回の震災で、家族がバラバラになってしまった。妻はスリランカ、息子はアメリカの高校。でも私の住むところは福島しかないと思っている。頑張っていくしかない。(郡山市在住スリランカ出身男性 平成23年10月取材)

震災後すぐに5歳の息子と妻の3人で中国に一時帰国。息子は、まだ中国の両親に預けたまま。いつになったら子どもと一緒に暮らせるのか、将来の生活設計が立たない。(福島市在住中国出身男性 平成23年10月取材)

ごはんは、子ども用には県外産米を、大人用とは別にして毎食2釜炊いている。毎日目に見えない放射線と戦っている感じ。でも愛する家族と一緒にだからがんばれる。(二本松市在住フィリピン出身女性 平成23年11月取材)

家族で一時母国に避難したが、仕事のことがあるので子ども3人だけを実家に残して5

月に福島へ戻ってきた。今は、スカイプなどで子どもたちと連絡を取り合っているが、会えなくてとてもさびしい。(福島市在住フィリピン出身男性 平成23年12月取材)

趣味の写真をネットで公開し、県内の素晴らしい風景を世界中の人に知ってもらい、多くの人が福島を訪れてほしいと思っている。(福島市在住エジプト出身男性 平成24年1月取材)

私は福島で暮らして35年。福島は私の故郷。楽しいことを考えて、前向きに過ごしていこうと思っている。(いわき市在住トンガ出身女性 平成24年1月取材)

避難所を転々として8月から福島市内の仮設住宅に住んでいる。浪江には5年前に新築したばかりの家のローンも残っている。いろいろ考えてもしょうがない、なるようにしかならないと思っている。(浪江町在住中国出身女性 平成24年2月取材)

II

4 各種会議の開催

(1) 中核的市国際交流協会ネットワーク会議

- ・実施日：平成23年8月23日(火)10:00～15:00
- ・出席者：県内10市の国際交流協会担当者
(10市全協会が参加)

① 被災状況の報告

市	事務局の被害状況	外国出身者からの相談件数
福島	特になし	2
会津若松	特になし	67
郡山	被災したため、別建物で業務	7
いわき	被災したため、4月末から別建物で業務	79
白河	特になし	0
喜多方	特になし	0
二本松	特になし	0
田村	特になし	0
南相馬	屋内避難のため、4月中旬まで閉所	—
伊達	特になし	0

※会津若松、南相馬、喜多方以外の7市協会は、市役所内に事務局を置き市職員が兼務

② 震災時の外国出身住民への支援内容

- ・パソコンが使えなかったため、海外にいる元国際交流員に英訳をお願いし、ツイッターを活用して英語での情報発信を行った。(いわき市国際交流協会)
- ・FM会津の協力を得て、3月12日に英語で30分ほど情報発信した。(会津若松市国際交流協会)
- ・市業務として避難所支援を行ったが、困っている外国人がいるようには見えなかった。(福島市、郡山市、白河市、二本松市、田村市、伊達市、白河市の国際交流協会)
- ・市内の主な避難所に出向き、県協会からの地震情報センターのチラシを貼って

まわったが、困っている外国人は把握できなかった。(会津若松市国際交流協会)

③情報交換

- ・震災時は、市職員としての災害対応業務があり、外国人支援活動に特化した業務に従事する環境ではなかった。
- ・大使館の避難用バスの情報提供について、大使館からでなく個人から得た情報であったため、市協会として発信して良いか迷った。結局できなかった。
- ・外国人から特に相談がなかったが、これを外国人が家族や地域とうまくいっていたと解釈するか、当協会があてにされていなかったと解釈するか微妙である。
- ・外国人からボランティア活動をしたいという申し出もあったが、うまく対応できなかった。協会独自のボランティアコーディネート体制を考えておく必要がある。
- ・外国人の状況が見えず積極的な支援ができなかった。今後地域の外国人と接点をもつ体制をつくる必要がある。
- ・外国人のネットワークがあれば、それとの接点を持つことで効率的な支援ができるかもしれない。外国人のネットワーク化を支援していきたい。
- ・英語、中国語だけでなく、少数言語に対応できる他団体との連携の必要性を感じた。
- ・日本語教室やその他各種団体とのネットワークが必要であると思う。
- ・緊急時に備え、日頃から外国人が地域の中でコミュニケーションを取っていることが大切である。



(2)日本語教室ネットワーク会議

- ・実施日：平成23年9月6日(火)10:00～16:00
- ・出席者：県内の日本語教室の代表者(33教室のうち20教室が出席)

①講演

テーマ：「震災後の外国人学習者の心のケアについて」

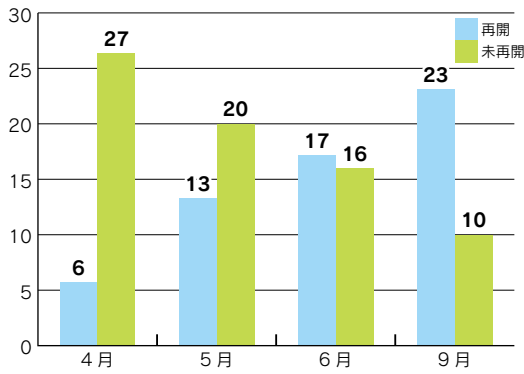
講師：鶴川晃(大正大学人間学部人間環境学科専任講師)

②震災時の状況報告

- ・教室ベース、個人ベースで学習者の安否確認を行ったケースだけでなく、学習者の方からボランティアに連絡を入れてくれたケースも多かった。
- ・震災当初は、原発事故の心配から母国等に一時避難する学習者が相次いだため、休止した教室がほとんどだった。
- ・震災により会場が損壊したり避難所に使用されたりしたため、会場の確保ができず休止したところも多かった。

③意見交換

- ・普段からの信頼関係が構築できているかどうかは非常時には大切であると感じた。
- ・ALT、企業研修生などは情報が早く入り、いち早く行動できたが、コミュニティに属さない個人は情報が入りにくかったのではないか。
- ・帰国するかしないか、福島を食べ物は安全かどうかなどの判断は本人次第である。周囲の日本人は、彼らが判断できるように情報提供していくしかないのではないか。
- ・一時避難から戻ってきた外国人の受け入れについて、地元住民の寛容さが大切である。
- ・震災がきっかけで、これまで以上に外国人学習者と寄り添うことができた。



平成23年度における日本語教室再開の推移(県内33教室への電話によるヒアリング)

※平成24年12月末現在、なお休止状態の日本語教室は、福島市内(1)、警戒地域となっている大熊町内(1)、南相馬市小高区内(1)



5 放射線に関わる健康管理セミナーの実施

放射線の健康への影響に対する不安解消の一助とするため、英語又は中国語の逐次通訳を入れた放射線に関わる健康管理セミナーを県内4会場で実施した。

また、講演録と4会場の質疑応答をまとめたものを4か国語に翻訳して印刷し、外国出身住民等に配布するとともに、当協会ホームページに掲載した。



- ・発行月：平成24年2月
- ・翻訳言語と発行部数：中国語(900部)、英語(500部)、韓国語(300部)、やさしい日本語(300部)

(1) セミナー

- ・講師：高村昇さん(福島県放射線健康リスク管理アドバイザー 長崎大学教授)
- ・実施日・場所等

(2) 講演録翻訳版の作成

月日	会場名	参加者数 (うち外国出身者数)	逐次通訳した言語
12月3日(土) 13:00~15:30	郡山市総合福祉センター(視聴覚室)	16(3)	中国語
12月4日(日) 13:00~15:30	会津若松市生涯学習総合センター 『會津稲古堂』(研修室3)	13(5)	中国語
12月17日(土) 13:00~15:30	いわき市社会福祉センター(大会議室)	42(1)	英語
12月18日(日) 13:00~15:30	福島テルサ(あぶくま)	52(17)	英語

計123名(うち外国出身住民26名)



6 その他の震災関連事業

1から5までに掲げたものの他、平成23年3月11日(金)から平成24年3月31日(土)までに行った震災関連事業は以下の通りである。

(1)国際交流・協力団体 東日本大震災に関する活動助成事業

福島県内に拠点を有し活動する非営利団体が行う震災復旧復興活動に対し、助成金を交付した。

・募集時期:

(前期)平成23年4月23日～平成23年6月15日(3回に分けて締切・交付)

(後期)平成23年10月4日～平成23年10月18日

・助成額:1活動上限10万円

・交付団体

前期

NO	団体名	活動名	交付額
1	船と翼の会ふくしま	被災者支援活動	10万円
2	南相馬市国際交流協会	被災地南相馬市多言語くらし情報	10万円
3	NPO法人ふくかねっと	韓国の家庭料理を食べよう	10万円
4	いわき国際セラミックコーポレーション交流推進協議会	復興国際交流イベント『「陶芸」と「みんなともだちカラム」でがんばっぺいわき』	10万円
5	NPO法人ルワンダの教育を考える会	ルワンダコーヒーとクッキーサービス～マリールイズとの懇談会～	4万円
6	HAWAK KAWAY FUKUSHIMA	避難所でのカフェと炊き出し	6万円

後期

NO	申請団体名	活動名	交付額
1	会津若松市国際交流協会	2011 国際交流フェスティバル	10万円
2	南相馬市国際交流協会	被災地南相馬市多言語くらし情報	10万円
3	ふくしま子どもの日本語ネットワーク	「移動する子どもたち」の心のケアを考えるシンポジウム	8万円
4	にほんまつ地球市民の会	地球市民の集い『地球のステージ(震災編)』	10万円
5	HAWAK KAWAY FUKUSHIMA	仮設住宅でのフィリピンカフェの開催	5万円
6	HAWAK KAWAY FUKUSHIMA	タガログ語のニュースレター発行	2万円
7	NPO法人ふくかねっと	福島県復興ボランティア受け入れ事業	5万円

(2)日本語教室巡回相談会

日本語教室に通う外国出身学習者を対象に、巡回相談会を実施した。

①外国にルーツを持つ子どものための土曜広場(福島市)

・実施日:平成23年6月25日(土)

・相談者:中国出身者2名、アメリカ出身者1名

②二本松国際交流ボランティア ざくざくねっと

・実施日:平成23年7月10日(日)

・相談者:中国出身者4名、アフガニスタン出身者2名

(3)東日本大震災応援チャリティ国際理解講座



「ふくしまユースグローバルカレッジ2011」の第1回講座を公開講座とし、「震災と地球規模の課題」をテーマに、震災で起こったことを語り合う場とした。なお、会場に募金箱を設置し、募金協力をお願いした。

・実施日:平成23年7月9日(土)13:30～16:00

・参加者:高校生以上の県民38名

(4)外国出身住民への情報提供のための携帯ラジオの配布

今後の災害に備えるため、NPO法人オックスファムからの支援品



である手動式携帯ラジオに、災害時のラジオの有効性の説明文を同封し、当協会多言語相談窓口案内シールを本体に貼付のうえ、大学や日本語教室等を通じて外国出身住民に配布した。

・配布時期:平成23年8月～9月

・配布台数:1,400台

・配布先:大学、日本語教室、同胞団体、JET青年等

(5) 東日本大震災外国人住民支援活動シンポジウム

福島市で開催された(財)自治体国際化協会主催のシンポジウムにおいて、パネラーを派遣するとともに2日目の現地視察のコーディネートを行った。

- ・実施日:平成23年11月22日(火)~11月23日(水・祝)
- ・参加者:全国の行政及び国際交流協会等職員
1日目約100名/2日目約40名



7 活用した助成金等

(1) (財)自治体国際化協会の各種震災枠助成金(計1,733,954円)

- ①災害時外国人住民支援活動助成金
 - ・『外国語による地震情報センター』の開設に伴うサポーター活動経費として478,000円
 - ・携帯ラジオ配布事業の配布送料、テプラシール代等として55,954円
- ②地域国際化施策支援特別対策事業(東日本震災枠)
 - ・多言語による東日本大震災復興版ジャイロ「がんばろう福島」の発行に伴う印刷費、送料等として400,000円
 - ・放射線に関わる健康管理セミナーに伴う通訳者翻訳者謝金、講演録印刷費及び送料等として800,000円

(2) 支援品等のコーディネート

- ①メッセージと小物(1箱)

文部科学省からの依頼により、台湾の中学校から贈られてきた見舞い品を、福島市立立子山小学校に寄贈した。
- ②ペットボトルの水、レトルトごはん、韓国のみ(500セット)

在日本大韓国民団福島県地方本部からの依頼により、福島市国際交流協会を通じて、福島市に寄贈した。

③靴下(100足)

当協会賛助会員からの依頼により、元伊達市在住スコットランド人の知人から贈られてきた靴下を、福島市立福島第一小学校に寄贈した。

④ペットボトルの水(22万本)

新潟総領事館からの依頼により、香港のラジオ放送会社より贈られた水を、福島市に10万本、日本労働組合総連合会福島県連合会に6万本、その他在住同胞に6万本寄贈した。

⑤手動式携帯ラジオ(1,400台)

多言語センターFACILを通じてNPO法人Oxformより寄贈されたラジオを、日本語教室や大学等を通じて県内在住外国人に配布した。

⑥Tシャツ(約50枚)

アメリカの大学の日本人教員の依頼により、南相馬市国際交流協会を通じて仮設住宅の方々に配布した。

⑦チョコレート菓子(400箱)

在日本大韓国民団福島県地方本部からの依頼により、福島県私立幼稚園協会を通じて浜通りの幼稚園に配布した。

8 関係機関(者)からの聞き取りの実施

発災当時、外国出身住民がどのようにして情報を収集したか調査するため、関係機

関(者)への聞き取りを実施した。その結果は、以下のとおりである。

(1) ラジオ福島(地元の中波ラジオ局)

3月11日午後6時ごろ、以前出演したことがあるニュージーランド出身の県国際交流員が、県内の外国出身者たちに対する英語での地震等に関する情報提供のため、ラジオを使って情報発信させてほしいと来局した。

当放送局では、すぐにスタジオに入ってもらい、特に原稿もないまま、その場でのアナウンサーとの掛け合いの様子を、18:19~18:25の6分間生放送した。その内容は「大きな地震が起こった。身の安全を確保して。避難所に行って。親戚友人と連絡を取って。災害伝言ダイヤル171を活用して。」といったものであった。

災害伝言ダイヤルのアナウンスの部分だけは録音し、その後1~2日間に2~3回放送した。

英語の放送だけでなく中国語も必要と考え、すぐに当放送局アナウンサーの個人的な知人の中国出身男性と連絡を試みたが、なかなか連絡が取れなかった。最終的に13日にラジオ福島に来てもらうことになった。

当日は、インタビュー形式の台本を作成し、中国語で放送してほしい原稿をその男性に読み上げてもらい、3月13日12:26~12:35の間に約1分間放送した。その原稿内容は「〇〇と申します。皆さん、こんにちは。僕は上海出身です。被災された方々にお見舞い申し上げます。相談したい場合は、行政サービス支援ネットにアクセスしてください。水や避難所、学校、病院に関する情報が得られます。現在ガソリンが不足しているので、外出はなるべく控えてください。外国人相談ネットのホームページは、<http://tabumane.jimbo.com>です。」といったものであった。

なお、このアドレスは、当放送局が共同通信のニュースで知り得たものである。この内容は録音し、その後2回ほど流した。

(2) 当協会外国出身スタッフ

①多言語コーディネーター(中国出身)

中国政府は、3月15日(火)午後、中国の国営テレビにおいて被災3県からの避難用バスの出発案内をテロップで流した。これを見た中国の家族が福島にいる家族に連絡し、その情報を得た人が更に県内の中国出身者に伝え、情報が網の目のように次々と伝達されていったようである。

私には、15日午前中に中国駐新潟総領事館から電話が入り、避難用バスの案内を同胞に流してほしいと依頼があった。そこで県内の知る限りの中国出身者に連絡を取り、次から次へと情報を伝達してもらった。一方、中国駐新潟総領事館もホームページ上でバスの情報を発信し続けた。

中国駐新潟総領事館が準備した避難用バスの第一便計20数台の大型バスは、3月15日18時、福島駅前、郡山市役所前及び会津若松市役所前から新潟に向けて出発した。その後、いわき市役所前、白河市役所前、田村市内の避難所からの出発も加わった。

なお、中国駐新潟総領事館HPによると、3月21日までに被災3県から出た避難用バスの合計台数は、76台(大使館、札幌領事館手配分も含む。内40~50台は福島県内発)。新潟から中国に向けてのチャーター便数は、30機。これらにより5,298名の中国出身者及びその家族が中国に避難したと報告されている。

②国際交流員(カナダ出身)

以前福島市内の県立高校でALTをしていたカナダ人男性が、カナダで入手した情報を個人のクロウズのフェイスブックに、震災直後から英語で発信し続けていたところ、あまりに反響が大きかったことから、3月13日にオープンフェイスブックに変更したようである。

そこには水や食料、ガソリンの入手方法、放射線の影響、避難経路など、県外や海外から様々な情報が書き込まれていた。私も、このフェイスブックを活用して3月13日から3月16日にかけて、県内JET青年150名の安否確認を行った。

震災当初から3月末までの約1か月間は、毎日20~30件の書き込みがあった。平成24年2月現在の登録者数は、県内のJET青年や英語教師及びその関係者等で約270名である。

(3)大学

①福島大学(留学生数*177人)

震災直後、留学生が次々と留学生用学生寮を兼ねている福島大学国際交流会館に集まってきた。そこで、多目的ホールを開放し、一時的な避難場所を確保した。また、少量ではあるが、食料を調達・配給した。翌日は会館が断水となったことから、飲料水を調達し配給した。

中国出身留学生等は、直接新潟総領事館に避難用バスの手配を依頼し、3月15日朝、領事館が準備した大型バスに乗り約50名が東京に向かった。

福島を離れた留学生とは、帰国時連絡先の収集や所在地確認等の安否確認を行った。また、アパート半壊等により、至急撤去することを求められた留学生の所有物を搬出し、一時的に保管した。

5月からの大学再開に向けて、原子力問題に関する相談対応や、インターネットでの情報提供を行った。6月には、留学生を集め、原子力問題に関する留学生懇談会を実施した。また、留学生の放射線に対する不安が大きいことから、希望者に対しては自宅に赴き居住スペースの放射線計測を行い、不安の解消に努めた。無断で帰国した留学生のアパートについては、不動産会社と交渉し退去のための手続きを本人に代わって行った。

②東日本国際大学(留学生数*210人)

震災直後は、留学生を大学に集合させ、大学、近隣の中学校及び大学の寮に避難のうえ宿泊させた。その後原発事故の発生により、バス5台を使い、留学生とその家族、さらに引率教職員を合わせた約140名を創価大学(東京)に避難させた。避難中、留学生全員が帰国できるよう手配し、3月21日に留学生全員を帰国、または親戚の家に避難させた。

その後、母国に帰国した留学生との国際電話を繰り返すとともに、HP上でも中国語、韓国語でブログを更新し、現地いわきの最新情報の発信に努めた。

5月の大学新学期がスタートするころには、留学生の約8割が日本に戻ってきた。まだ戻ってきていない約2割の留学生に対しては、引き続き国際電話で連絡を取り続けた。

③いわき明星大学(留学生数*5人)

中国からの留学生4名は、一時帰国し自宅で待機した。韓国からの留学生11名は、日本国内に避難しその後間もなく帰宅した。一時帰国する留学生については、研究指導教員が出国までのサポートを行った。

中国からの留学生は、5月後半に日本に戻った。韓国からの留学生は、新学期当初から登校している。

④会津大学(留学生数*64人)

震災後早い段階で留学生全員の無事を確認したが、留学生の多くが一時的に県外、国外に避難していた。

その後、DRIO(留学生向け特別支援室)を立ち上げ、会津での生活情報や安全性についての情報提供を積極的に行った結果、ほとんどの留学生が会津に戻ってきた。

⑤日本大学工学部(留学生数※13名)

震災後、日本人学生、留学生を問わず災害救助法適用地域の学生に対し、クラス担任を通じて安否確認を実施した。留学生の中にはいち早く帰国する者もあり、安否確認は困難を極めたが、最終的に留学生全員の無事を確認した。

5月の新学期開始までには、ほとんどの留学生が日本に戻り新学期開始には影響なかった。

⑥福島工業高等専門学校(留学生数※13名)

多くの留学生が磐陽寮にて被災した。マレーシア大使館から迎えの車がきて、マレーシア以外の留学生も含め東京へ避難した。新年度編入学する予定の留学生5名を他の高専へ配置換えした。

マレーシア大使館からの要請により、在学中のマレーシアからの留学生5名を他の高専へ転学させた。また、インドネシア国費留学生1名からの強い転学希望があり他の高専へ転学させた。

※留学生数は平成22年10月1日現在

9 主な外国出身住民コミュニティの支援活動に関する聞き取りの実施

今回の震災や原発事故では、多くの外国出身住民コミュニティが支援活動を行った。その内容を聞き取った結果は、以下のとおりである。

(1) NPO法人ルワンダの教育を考える会



震災から2週間後の3月25日に、当時避難所になっていた県立福島高校でルワンダコーヒーの提供を開始した。これを皮切りに県内各地の避難所や仮設住宅に出向き、ルワンダコーヒー・紅茶を片手に会の代表であるルイズさんとの会話などを楽しむ「ルワンダカフェ」を開催した。ルイズさんは、「私もルワンダ内戦で家や家族を失い、難民キャンプで過ごした経験があります。避難されている方々の気持ちが痛いほどわかります」と言っている。現在も継続して「ルワンダカフェ」を開催している。

(2) 福島グローバルロータリー



3月27日、パキスタン出身のメンバーが中心になって、当時避難所になっていた県立郡山高校に約300食、郡山市立橘小学校に約50食のパキスタンカレーの炊き出しを行った。その後は、他のボランティア団体と協力して南相馬市鹿島区のがれきの撤去等を行った。

(3) Heart for Haragama



相馬市にある被災した「原釜幼稚園」を再建するため、震災後、県国際交流協会の元国

際交流員でカナダ出身のマクマイケルさんが中心となり、期限付きで県内のJET青年等とともに「heart for haragama」を設立した。インターネットで募金を呼びかけるとともに、3月下旬から月1~2回原釜幼稚園を訪問し、お米等の支援物資を届けたり、園児との交流会等を開催したりした。

(4) 在日日本大韓民国民団福島県地方支部



4月15日に、いわき市役所と福島市役所、そして郡山市内の避難所になっているビッグパレットふくしまに、東京本部から届いたペットボトルの水やレトルトごはん、韓国のりなどの支援物資を届けた。11月には韓国のお菓子メーカーからの支援物資を県内の幼稚園等に届けた。

(5) HAWAK KAMAY FUKUSHIMA



震災を機にフィリピン出身者のネットワークを広げようと、4月17日に自助団体を設立。6月8日、福島市内の避難所にビーフン100食の炊き出しを行い、その後3か所の避難所でも炊き出しを行った。11月からは仮設住宅2か所を訪問し、ビーフン等の炊き出しとフィリピンの歌や踊りの披露を行った。

(6) FuJET



県内のJET青年のネットワークであるFuJETでは、震災後の4~5月にかけての週末に、近くに住むJET青年等10人程度が集まり、いわき市や相馬市の沿岸部のがれきの撤去を行った。5月~7月にかけては、福島市内に住むJET青年が5~6人集まり、月1回避難所となっていたあづま総合運動公園の体育館に行き、避難している子どもたちの誕生会などの交流を行った。夏には、相馬市内の子どもたちとの一日キャンプなども行った。

(7) NPO法人ふくかねっと



韓国と福島の文化交流を目的とするふくかねっとでは、7月3日に避難所となっていたあづま総合運動公園で450食の韓国料理の炊き出しを開始した。その後も継続して仮設住宅への韓国料理の提供等を行った。



Ⅲ 平成 24 年度「東日本大震災及び東京 電力福島第一原子力発電所事故に関わる 外国出身等県民アンケート調査」

1 調査の概要

(1) 調査目的

平成23年3月11日に発生した東日本大震災や東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故によって、外国出身等県民(外国出身又は外国籍の住民(帰化者及び日本生まれの外国籍者を含む))が、当時置かれた状況及び現在の状況を調査することにより、災害時の外国出身等県民に対する情報提供をはじめとした支援の在り方について検討するための資料を得ることを目的とする。

(2) 調査主体

公益財団法人福島県国際交流協会

(3) 調査期間

平成24年6月～平成24年12月

(4) 調査対象者

平成23年3月11日の震災の際、福島県内に居住していた18歳以上の外国出身等住民 100人

(5) 調査方法

調査員による面談調査(70人)及びアンケートによる書面調査(30人)

(6) 調査言語

【面談調査】日本語、英語、中国語、タガログ語

【書面調査】ルビ付きやさしい日本語、英語、中国語

2 調査結果の概要

III

(1) 震災時の調査対象者の状況

調査対象者100人の居住地域をみると、避難の対象となった地域に居住していた者は、富岡町、大熊町、双葉町、広野町、南相馬市小高区の7人であった。また比較的影響が少なかった会津地方の居住者は、17人であった。こうした各地域の比率は、震災前の市町村別外国人登録者数の比率とほぼ一致している。

出身国又は国籍別では、中国が42%と最も多く、フィリピン14%、韓国朝鮮13%と続いている。この比率も震災前の市町村別外国人登録者数の比率と近いものとなっている。

性別では、女性が76%を占め、日本滞在年数では10年以上が半数となっている。複数回答で聞いた日常言語では、日本語と答えた人が84人おり、ほとんどの人が母語の他に日本語を使っていることがわかる。

職業では、学生が8%、研修生が4%と少なく、会社員、主婦・主夫、自営業で約8割を占めている。家族構成では、家族と同居している人が約7割であった。

(2) 震災前の防災知識

机の下などに隠れるなど身の安全を確保することについての知識は、ほとんどの人が持っていたが、「避難所」については、中国をはじめとして避難所の制度そのものがない国があることもあって、学校や公民館が避難所になることや外国人も入れること、水、食料、情報等が得られることを理解していた人が半分程度にとどまっていた。

また、地震の後に沿岸部に津波が来る可能性があるという地震と津波の関連性については、6割程度の人理解していたが、平成22年3月に東京大学地震研究所が行った日本人を対象とした調査では、95%の正答率が得られたと報告されており、津波に対する基本的な知識が乏しかったことがうかがえる。

原子力発電所については、福島県に立地していることを理解していた人が半分にとどまった。

(3) 震災時の情報収集の方法

利用したメディアについては、ほとんどの人が映像を伴うテレビと回答している。これに対して新聞・ラジオについては、30%程度の利用に止まっているが、日本語の文字や音だけでは正確な情報を得ることが難しいことが原因であると思われる。

また、携帯電話、パソコン、スマートフォンを利用した人は実数で68人いたが、そのうち8割程度の方はインターネットのサイトを閲覧している。E-mail及びfacebook等のソーシャルネットワーキングサービスの利用も半分程度あり、様々な言語で情報を得、その情報を交換することができる媒体が災害時に重要な役割を果たしていることがわかる。

行政機関等と連絡を取ったと回答した実数63人の連絡先をみると、大使館が65%を占めており、情報入手先として一番多くなっている。これに対し、市役所・役場、国際交流協会は、30%程度と半分になっている。

震災直後、直接会ったり連絡を取り合った相手方の内訳では、国籍による違いは見られなかったが、集団別では家族・親戚の7割に次いで5割程度の方が同国出身者のコミュニティと接触を持っており、重要な存在であったことがわかる。

(4) 避難所への避難状況

面談した70人に避難所へ避難したかどうか聞いたが、避難対象区域に居住していた7人の他に10人程度の方が避難所に行っていた。

(5) 県外又は国外への一時避難状況

面談した70人に一時避難状況を聞いたが、何らかの避難をした人が7割を超えており、日本人との大きな違いが見られた。そのうち母国へ避難した人は、4割を超えている。

(6) 震災前後での変化

① 様々な状況の変化

4人に1人の割合で職業上の変化があっ

たと答えており、日本人と比較してかなり高い割合で震災の影響が出ているものと思われる。放射線被曝を恐れての避難による住居の変更、家族との別居もそれぞれ6%ある。

なお、職業に変化があった人の内訳は、減収8人、退職9人、勤務地変更5人、転職1人、家業の休業1人、自店舗移転1人、雇用形態の変化1人であった。

居住場所に変化があった人の内訳は、被曝からの避難6人、長期避難による借家の変更5人、津波被害による家屋の流出2人、家屋損壊2人、その他3人であった。家族構成に変化があった人の内訳は、被曝からの避難による家族との別居6人、居所変更による家族構成の変化3人であった。

② 「災害に関する言葉」の認知度の変化

「原発事故」や「放射線」の認知度が震災後に高まっているが、これは日本人でも同様の傾向があると思われる。「防災訓練」については、震災後においても認知している人が約3割にとどまっており、また、約7割の方は震災後も避難(防災)訓練へ参加していない。

③ 防災に関する行動の変化

震災後も町内会や同じ国の出身者の団体等への加入が進んでいない状況がうかがわれる。「食料や水の備蓄」「緊急時持ち出し袋の準備」「避難経路・避難所の確認」については、震災後半数近くの方が対応している。

(7) 原発事故への不安

調査した平成24年秋の時点でも、「原発事故の再発」「健康への影響」についての不安を持つ人が8~9割近くを占めていた。

また、「環境放射能の測定値がどのくらいあるのか」や「水や食料は安全か」などについても7割程度の方が不安に思っている

いう結果であり、原子力災害が引き起こした様々な不安が、ほとんど払拭されていないことがわかる。

しかしながら、「避難すべきかどうか」については、「あまり心配はない」「心配はない」とした回答が5割を超えており、様々な不安を抱えているものの避難まで行う必要はないという判断がなされていることがうかがえる。

(8) 行政等(県国際交流協会)に期待すること

今後、県国際交流協会を含む行政機関等への期待するかを聞いた結果では、放射線情

報や災害情報を英語、中国語、やさしい日本語で発信することについて8割程度の期待があり、震災後1年以上経過しても多様な言語による情報への需要があることがわかる。

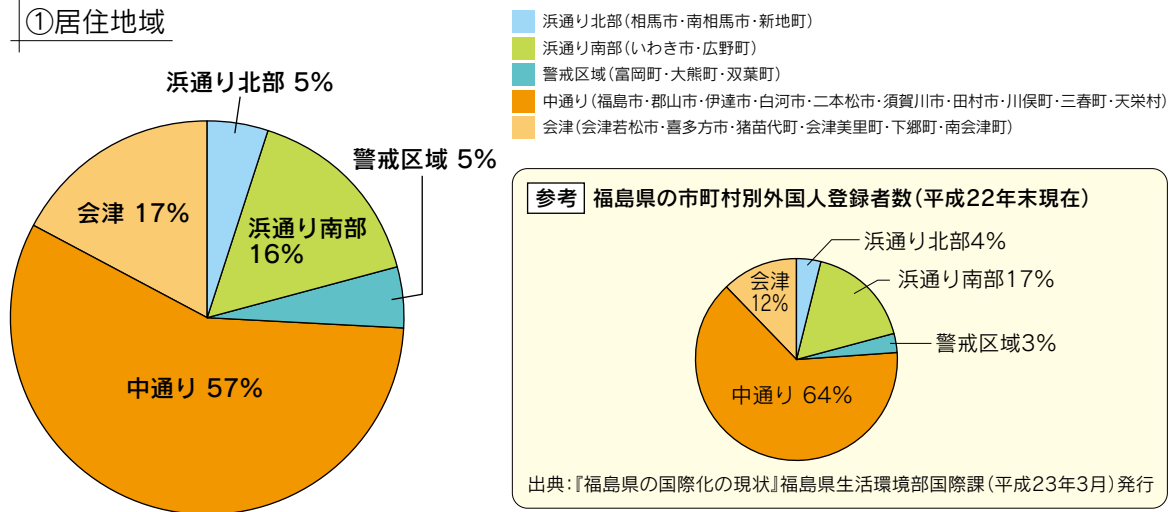
また、日本語を勉強する場所の設置についても8割を超えており、災害時に日本語を理解できないことによって不安を感じた人が多数いたことがうかがえる。

一方、英語、中国語、やさしい日本語でのカウンセリングについては、比較的期待する人が少ないが、震災後1年以上経過していたことが影響しているものと思われる。

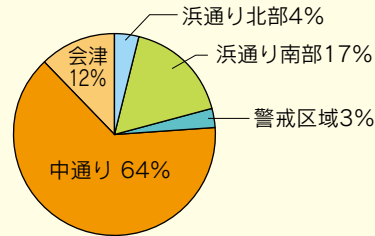
3 調査結果

(1) 震災時の調査対象者の状況

① 居住地域

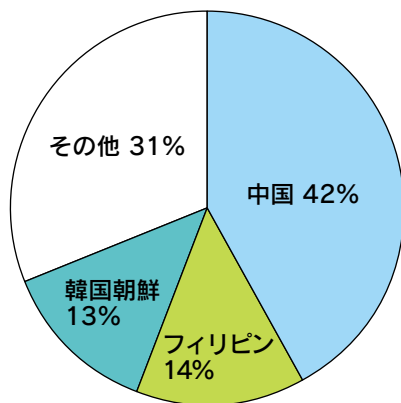


参考 福島県の市町村別外国人登録者数(平成22年末現在)



出典:『福島県の国際化の現状』福島県生活環境部国際課(平成23年3月)発行

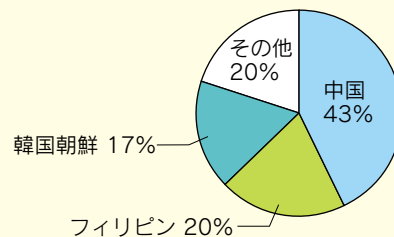
② 出身国または国籍



「その他」の国の内訳

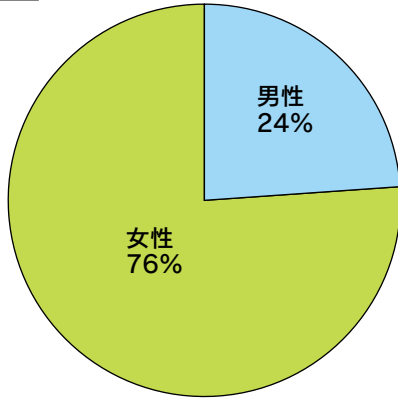
- タイ、アメリカ合衆国……………各5人
- ベトナム……………4人
- ニューゼaland……………3人
- パキスタン・インドネシア・モンゴル・イギリス……………各2人
- カンボジア・インド・カナダ・スリランカ・ケニヤ・オーストラリア……………各1人

参考 福島県の国籍別外国人登録者数(平成22年末現在)

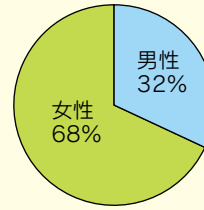


出典:『福島県の国際化の現状』福島県生活環境部国際課(平成23年3月)発行

③性別

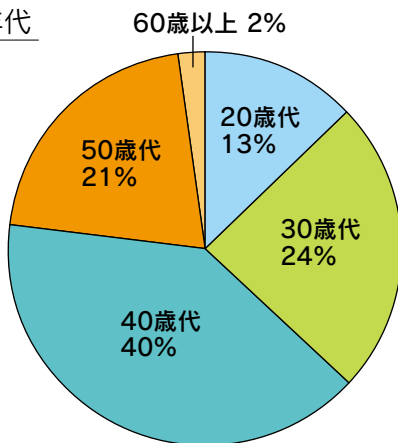


参考 福島県の外国人登録者数男女比(平成22年末現在)

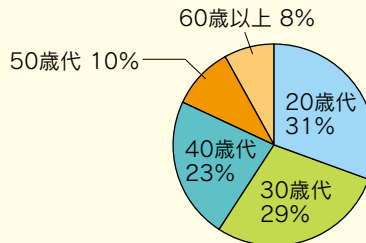


出典:『在留外国人統計平成23年度版』 法務省発行

④年代

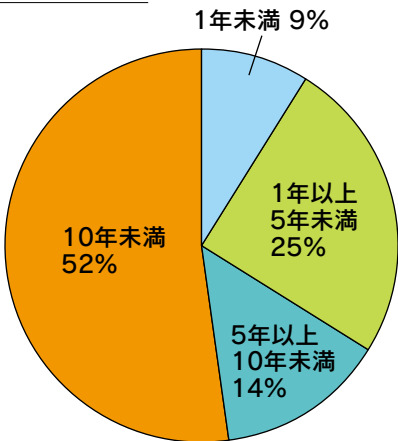


参考 福島県の外国人登録者数年代比(平成22年末現在)

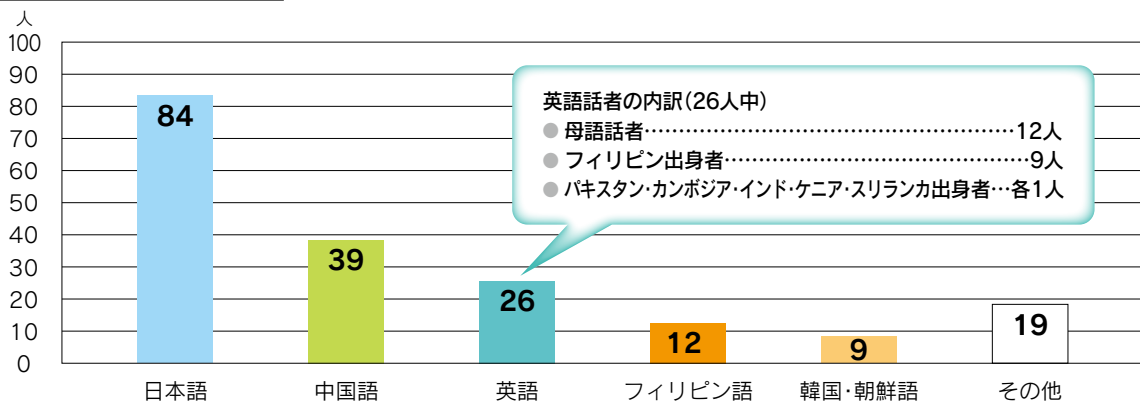


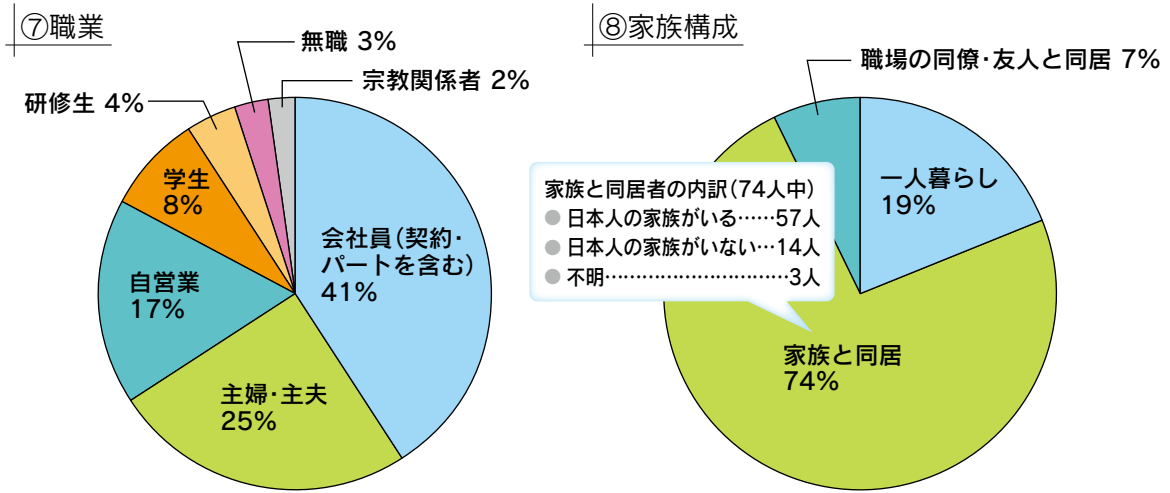
出典:『在留外国人統計平成23年度版』 法務省発行

⑤日本滞在年数

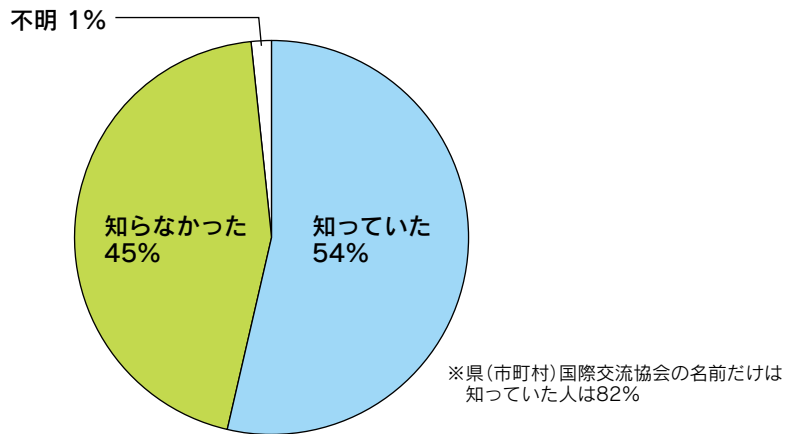


⑥日常言語(複数回答)



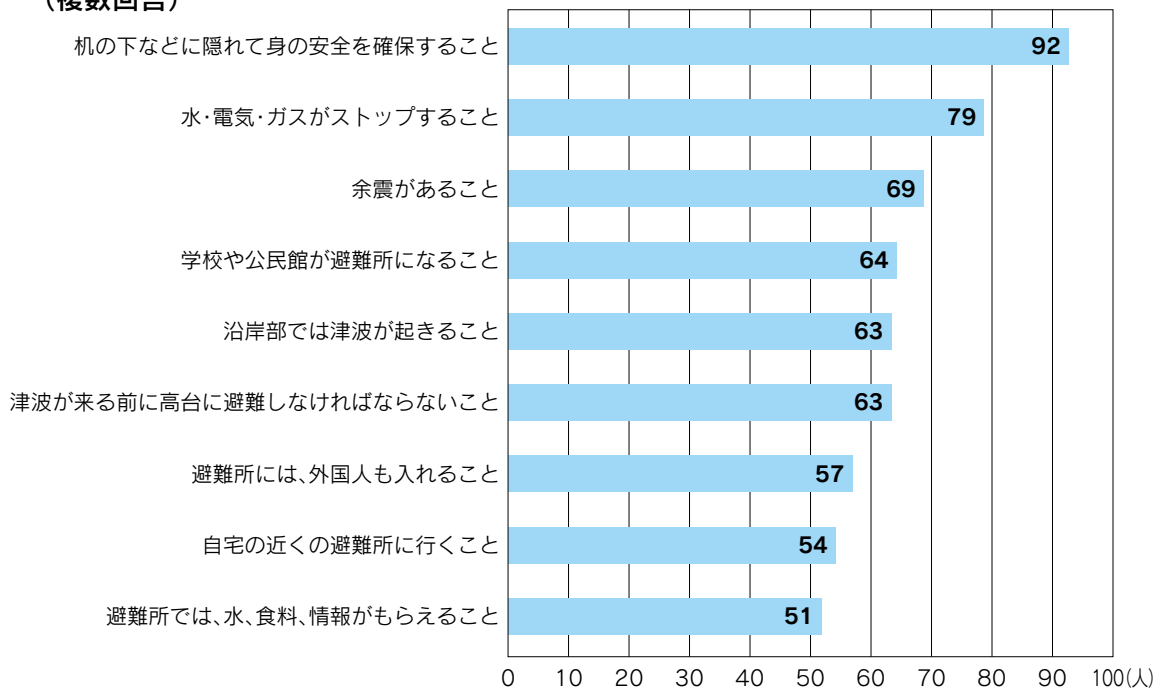


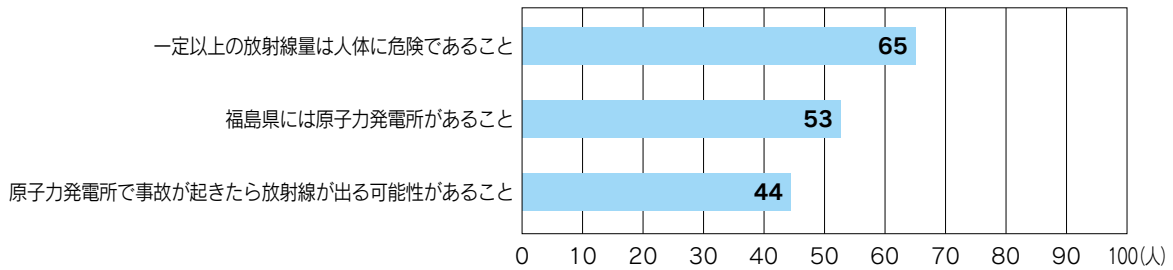
⑨県(市町村)国際交流協会が英語や中国語での情報発信や相談業務を行っていることを知っていたか



(2) 震災前の防災知識

「震災前、地震が起きたらどんなことをするか、どんなことが起こるか知っていたか？」
(複数回答)

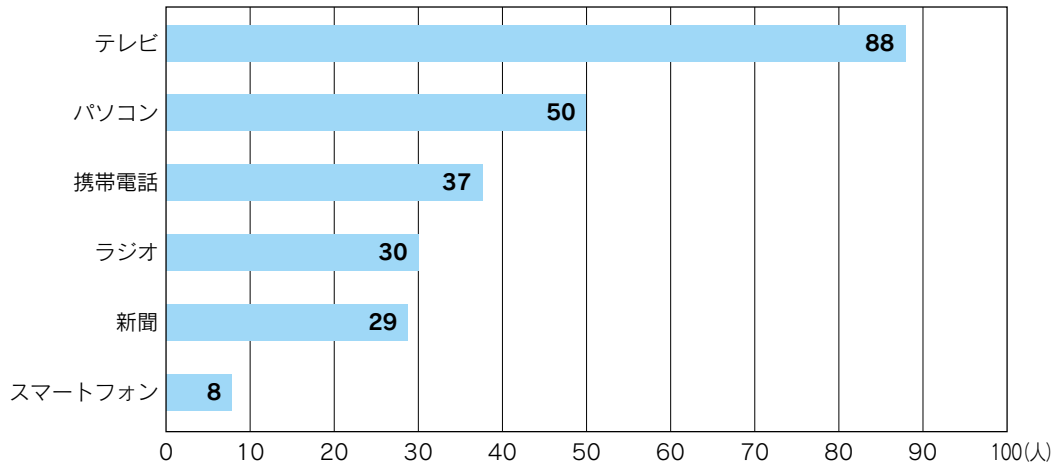




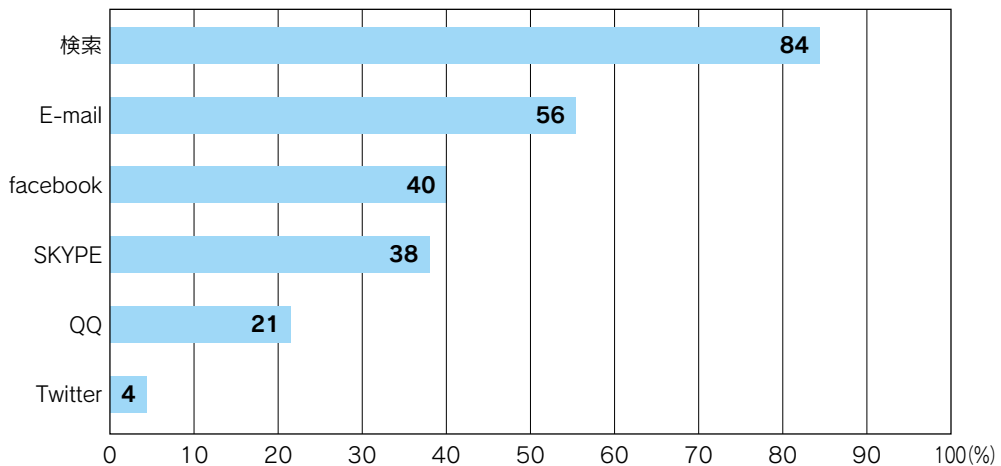
(3) 震災時の情報収集の方法

「震災発災時から平成23年3月末日までの間、どのようにして必要な情報を得たか？」

① 利用したメディア(複数回答)

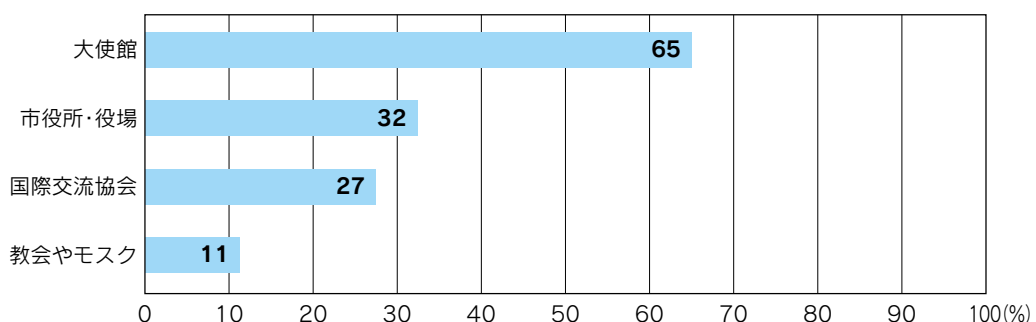


② 携帯電話、パソコン、スマートフォンを利用した人(68人)が活用したツール(複数回答)

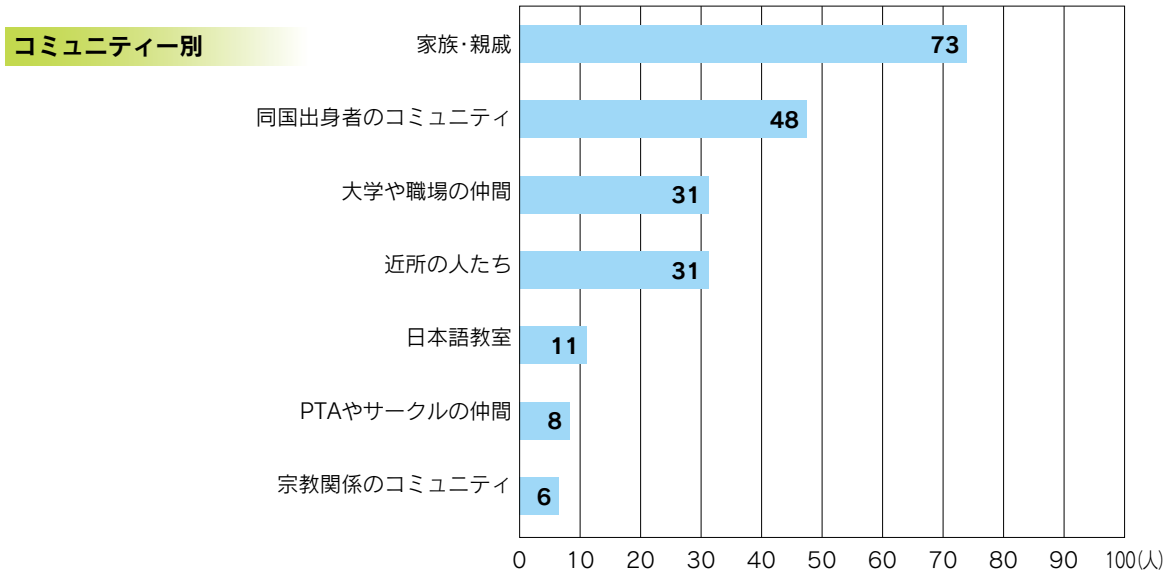
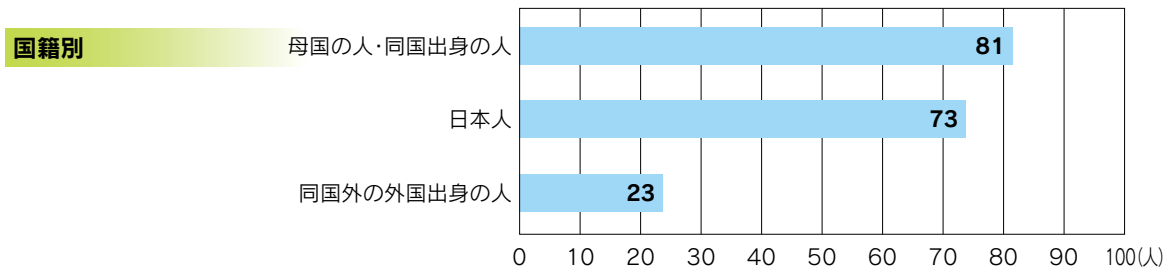


※QQは中国語のソーシャルネットワークサービス。39人の中国大陸出身者中14人(36%)が利用していた。

③ 大使館、市役所・役場、国際交流協会、教会やモスクと連絡を取りあった人(63人)の内訳(複数回答)

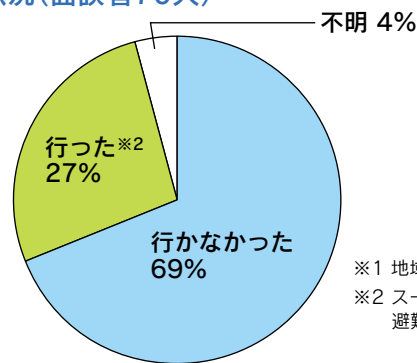


④ 震災直後、直接会ったり連絡を取りあったりして情報交換をした相手方の内訳(複数回答)



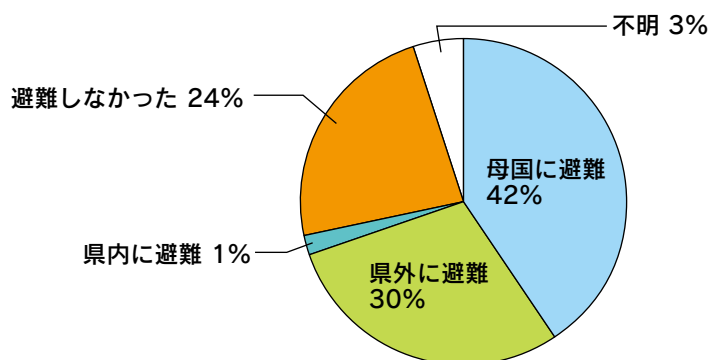
※全く情報が取れずに孤立した人は面談者70人中1人

(4) 発災時の避難所^{※1}への避難状況(面談者70人)



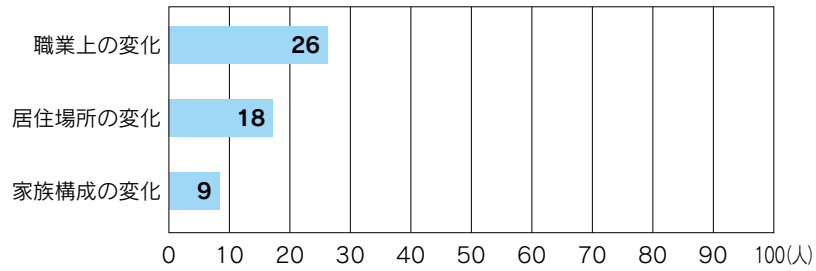
※1 地域防災計画で指定された避難場所
 ※2 スーパーマーケットが自主的に設置した避難所に3日間滞在した人1人を含む

(5) 発災時の県外または国外への一時避難状況(面談者70人)

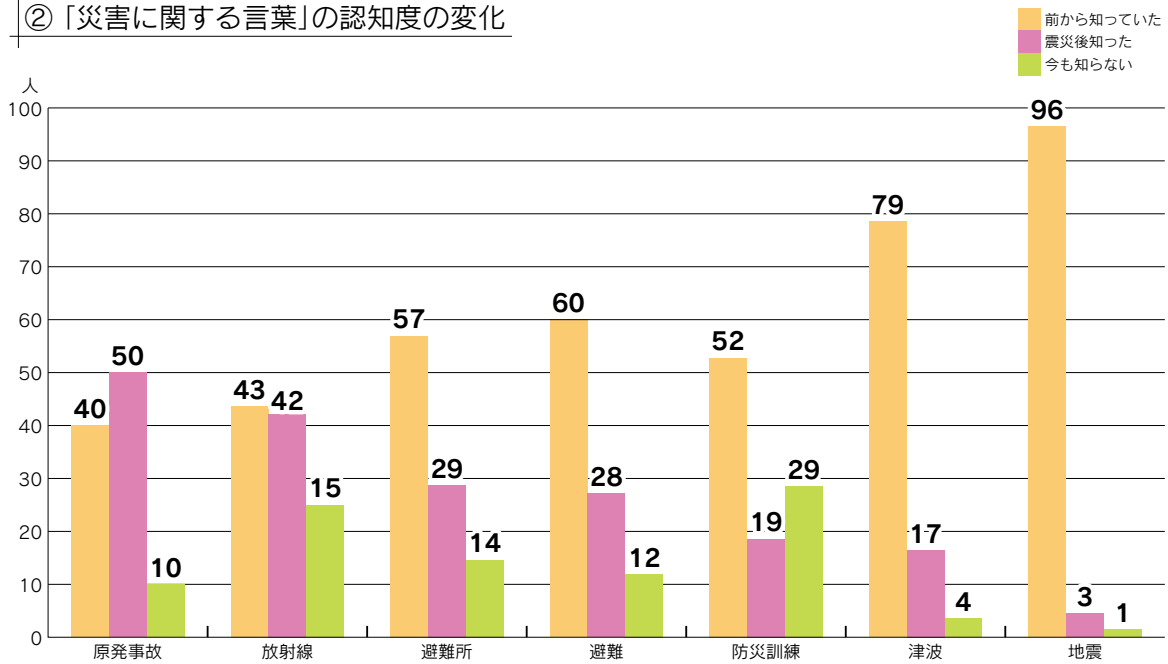


(6) 震災前後での変化

① 様々な状況の変化(複数回答)

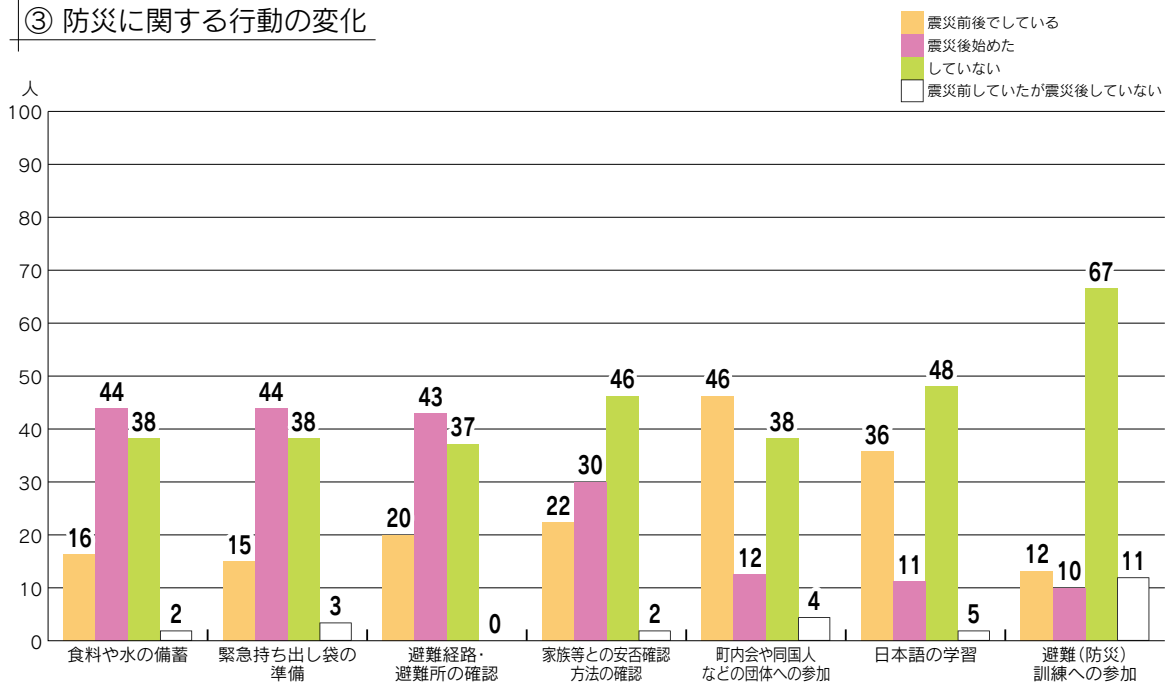


② 「災害に関する言葉」の認知度の変化

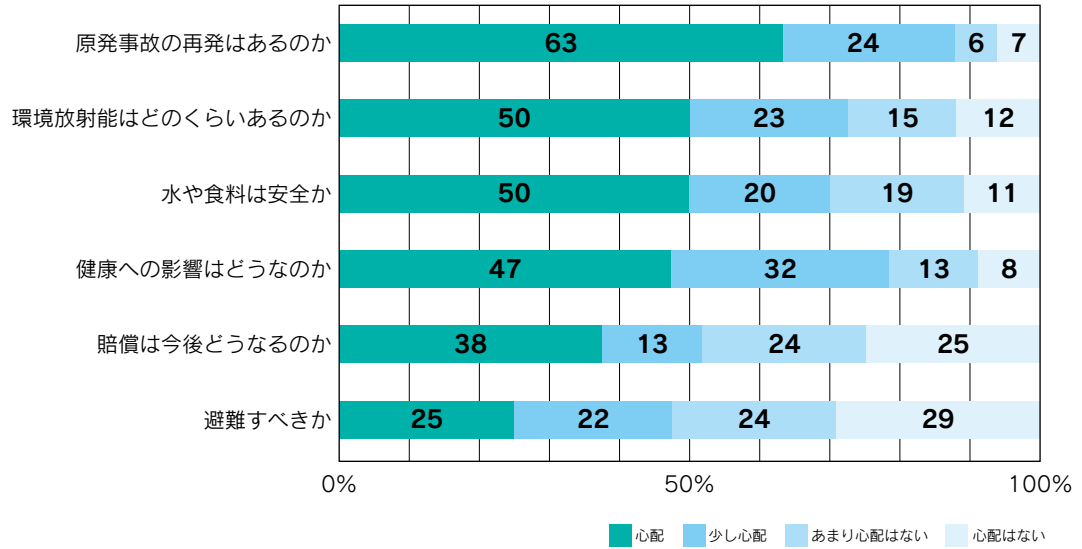


III

③ 防災に関する行動の変化

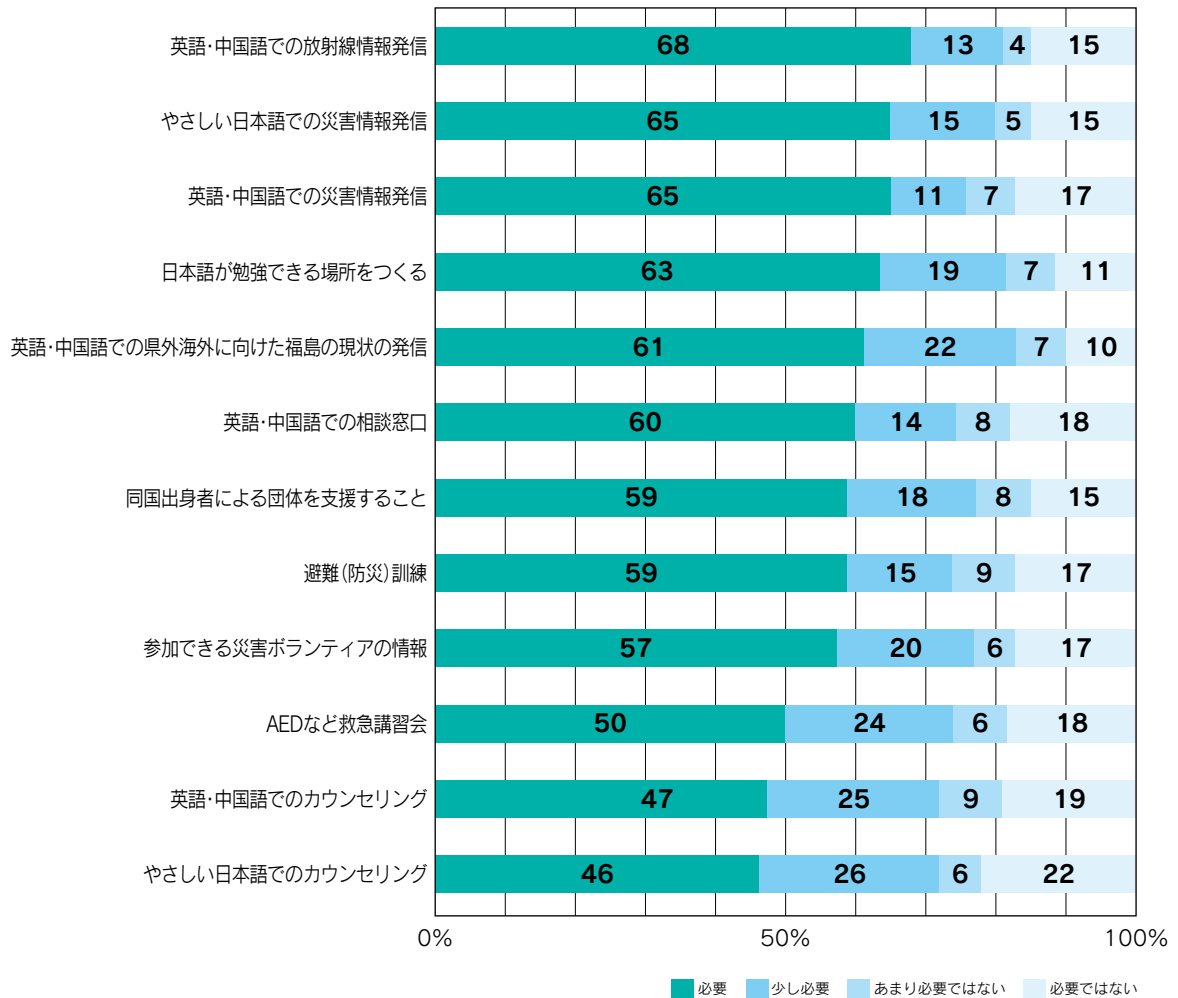


(7) 原発事故(放射線被ばく)への不安



◆他に、子どもの健康への影響(13人)、政府の政策や東京電力の姿勢(3人)、風評被害(2人)などの回答があった。

(8) 今後、行政等(県国際交流協会)に期待すること





IV 外国出身住民 100 人の証言

直接インタビューをした70人の証言とアンケート調査の自由記載の内容を、7つのカテゴリー（(1)地震発生直後の状況、(2)原子力発電所事故後の状況、(3)将来への不安、(4)情報収集の状況、(5)震災を経験して、(6)今後、行政に期待すること、(7)支援活動）に整理してまとめている。大震災と原子力災害に遭遇した外国出身県民の生々しい声が聞こえてくる貴重なドキュメントである。

1 証言の概要

外国出身住民には、日本で生活するうえで突き当たる「3つの壁」（「言葉の壁」「制度の壁」「心の壁」）があると言われている。災害時には、この「壁」がより高くなり、いわゆる災害弱者になるリスクが高いと言われているが、このことが現実の問題となったことが証言からうかがえる。

特に日本語がわからないことからくる「言葉の壁」の影響は深刻であり、ライフラインが途絶しても近所の人から役に立つ情報を得られなかったり、避難指示や津波警報がわからなかったり、状況の把握ができないことで極度の不安の中に置かれたり、避難所でのトラブルに際し日本語で言い返せなかったことが心の傷になったりした人がいたが、幸いにも今回の調査対象者の中では少数であり、家族や同僚、近所の人をサポートで大事には至っていなかったようだ。有事の際には、日本語ができることが非常に重要であるとの認識から、震災後本格的に日本語の勉強を始めた人もいる。また、子どもが母語を話せないことで、母国への避難を断念したケースや母国へ避難してもすぐ帰国したケースも見られている。

「心の壁」では、具体的に差別を受けたという証言はなかったが、過去に起きた関東大震災の時の事件を思い出し、風評による迫害がまた起きるのではないかと緊張したという人がいた他、避難所へ受け入れてもらえるのかどうか半信半疑だった人、東京電力の補償の待遇が違うとの噂が流れて動揺した人がいた。また、途上国からの援助

を日本人に快く受け取ってもらえるか心配だったという証言があった。結果的に快く受け取ってもらえたが、日本人の優しさをその理由にしている。災害に際して、日本人は親切で親身に対応してくれたとの趣旨の証言が多く得られている。

なお、「制度の壁」では、外国人登録の制度上の問題で東京電力の補償申請書類が日本人より遅く届いたという証言があった程度であった。

日本と外国との情報の違いについては、多くの証言があった。国際電話やメールなどにより、母国のメディアが流した大量の情報が提供された他、自らもインターネットにより外国のサイトからの情報を収集したが、それぞれの情報が違い過ぎて何が正しい情報かわからなかったという人が多かった。多くの人が、日本政府が情報を隠蔽しているのではないかという疑いを持っており、情報量も日本は少ないと感じ、母国から情報を得て行動の指針としようとした。

平成23年3月15日に中華民国政府から出された被災地域からの退避勧告を皮切りに各国から続々と退避勧告が出されたが、それに伴い、多くの人が母国への避難を実行した。証言では、避難した人、避難をせずに踏み止まった人それぞれの思いが語られているが、国による対応の違い、経済力による違いがあったことがわかる。また、避難した人は、母国の親族が歓迎してくれたものの、残してきた家族への罪悪感等から、反対を振り切って比較的短期間で戻ってきた例

が多いことがわかる。

今回の大震災において、外国出身住民は、災害弱者という側面だけではなく、地域の一員として支援者となった。証言でも、海外からの支援金や支援物資を避難所に送り、自らは炊き出しを行ったことや、母国へ避難した後、募金活動をしたことが語られている。被災地支援のボランティア活動については、積極的に行動しようとしたが情報が少なかったため十分に活動できなかつたようだ。

最後に、震災時の日本人への評価については、自分のことだけを考えるのではなく、一緒に頑張ろうという雰囲気があったことや、我慢強く政府の言うことに従順で一緒に行動すること、非常に冷静であったこと、助け合いの精神があったこと等が語られているが、一方、政府に対してメッセージを出していないと政府が変わらない、日本人は変わった方がよいとの証言もあった。

2 証言

出身国の表示は、個人情報に配慮し以下の通りとした。

東アジア……中華人民共和国、中華民国、大韓民国、モンゴル、在日韓国人、在日朝鮮人

欧米……イギリス、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド

東南アジア…フィリピン、タイ王国、ベトナム、インドネシア、カンボジア、パキスタン、インド、スリランカ

に過ごさせてもらった。

(避難対象地域女性 欧米)

震災時は東京に出張中だった。事務所の人、義理の母に電話をしたが通じなかった。会社と会社の社員の状況を知りたかった。確かめに戻ろうとしたが、戻れないということが信じられなかった。3月12日の午後、会社の人から電話でみんなの無事を知らされた。町が役場ごと避難したことはテレビや会社と友達からの電話で知った。

(避難対象地域女性 東アジア)

(1) 地震発生直後の状況

最初は事の重大さに気づけなかった。帰宅途中の風景を見て、一人で夜を過ごすことに不安を覚えたが、電話が通じなかったので、どうしていいかわからず、11日は一人で自宅に帰り一晩過ごした。とても心配だったが、携帯電話が通じなかったので、誰とも連絡が取れず、動きようがなかった。地震の被害状況、津波の大きさなど、よくわからなかった。わかっていたら、当日一人で家に帰るといった選択はしなかった。翌日から職場の同僚の好意に甘えて、一緒

市内のショッピングセンターの2階で夫と一緒に買い物中だった。夫と一緒に自分たちの判断で外に逃げた。店の人の誘導はなかった。自宅に一人いる義母の安否が心配だった。津波で家が流されるのではないかと心配した。夫は、家は高台にあるから大丈夫だと言った。通常は1時間で帰れる自宅に、2時間半かけて帰った。夜の10時に津波警報が出て、近くの公民館(避難所)に家族3人で避難した。寒かった。朝の4時に家に帰った。

(避難対象地域女性 東アジア)

勤務していた学校で先生と一緒にいた。混乱して泣いている先生もいた。家が海岸の近くにある先生は自宅に戻ったり、それぞれの判断で行動しなければならなかった。他の先生は津波の心配をしていたが、原子力発電所のことの方が心配だった。その日は、同僚の先生の家で3人の先生と1人の生徒と一緒に泊まった。

(避難対象地域女性 欧米)

家に一人でいた。家族は畑にいた。警察と消防の車のアナウンスで津波を避けるため高台に避難するよう指示を聞いた。高台に避難することにしたが、義父が家を空けることにより泥棒に入られるという心配をして家に残った。子どもと義母を高台の避難所に避難させた後に、義父を説得しに帰ったが、義父は自宅にいなかった。一生懸命探して、やっと隣の家にいる義父を発見し、説得して避難所に連れて行った。

(避難対象地域女性 東アジア)

店の休憩時間だったので、車で息子を迎えに行く途中だった。道路が波打っていた。小学生の息子を迎えに行き、家に帰った。余震が続き、家が壊れるのではないかと思った。怖くて車の中にいた。午後6時ごろ、防災スピーカーから放送があったが、「避難」という単語しか聞き取れなかった。避難の理由もどこに避難していいかもわからなかった。ガソリンを使わないようにして、午後7時まで車で待ち、義母と息子と3人で町の避難所を目指した。しかし、近所の人に声をかけられ、その人の知人の家に一緒に避難して1泊した。

(避難対象地域女性 東南アジア)

震災時、家族と自宅にいた。妻の実家の母が津波で死亡。遺体を探しに行った。情報収集

は仕事でつきあいのある人のネットワークが有効だった。市役所はパニックになって何も情報が得られなかった。日本人が知り得る情報以外は手に入らなかった。パソコンが使えれば国外からの情報も得られたが、パソコンが使えなくなったので入手できなかった。ラジオは車で聞くようになった。一番知りたかったことはガソリンがどこで買えるかと葬儀の手配。避難指示は近所の人から口頭で受けた。地域の避難所に2時間避難し、その後、県外に一時避難した。

(浜通り地方男性 東南アジア)

自宅に家族と一緒にいた。びっくりした。海から200mのところに住んでいた。主人がラジオを聞いて、津波が来るから避難するようと言った。車で避難所に行き3日間避難した。介護が必要な高齢の義母がいたので、避難所には入ったが車の中で寝泊まりした。

(浜通り地方女性 東南アジア)

家で一人でいた。携帯電話の地震警報にびっくりした。警報の意味がわからなかった。どこに行けば良いかわからなかった。怖くて何も考えられなかった。近くに住む友人のところに行き、その人の指示に従って避難した。避難所には3日間滞在した。トイレが汚かったが我慢して入った。たくさんの方がいた。雪が降って寒かった。

(浜通り地方女性 東南アジア)

パートの工作中だった。携帯の地震警報が鳴ったので、地震が来ることが分かった。職場の人と一緒に外に出た。空が暗くなって、地面が波打っていた。怖くて泣いていた。高1の子どもが家に一人でいたので心

配だった。電話も通じなく、早く家に帰りたいかった。危険なので会社にとどまるように言われたが、泣いて頼んで、午後3時半に会社を出た。渋滞していたので15分で帰れるところを2時間かかった。津波の心配はなかったが、家の中はぐちゃぐちゃで娘の方がしっかりしていた。近所のおばあさんが娘に声をかけて励ましてくれていた。頭の中はパニックで、怖い、逃げることしか考えなかった。息子が海の近くで働いていたのでとても心配だった。翌日、連絡が取れてほっとした。その日は知り合いの女性と娘と3人で車の中で寝た。寒いからエンジンをかけて過ごした。ガソリンがなくなるなんて考えもしなかった。翌日ガソリンがなくなりそうだったので、ガソリンスタンドに行ったが、待っている間にガソリンがなくなってしまうそうだった。停電はしなかったが、断水していた。車が使えないので、歩いてコンビニに水を買に行ったが、食べ物はなくなっていた。

(浜通り地方女性 東南アジア)

食堂でアルバイト中だった。仕事の片づけが終わって帰る準備をしていた。店長が外に避難するように言った。みんなパニックになって外に出て公園に集まった。死ぬかと思った。子どもは保育園にいるから安全だと思った。アパートが古くて心配だったので、その日は車の中で寝た。アパートには戻りたくないと言ったら、避難所に行こうと言われた。小学校の避難所に1週間避難した。避難所では、トイレの水がなくプールの水を使っていた。たくさんの人が避難していて、おにぎりやパンだけが配られた。

(浜通り地方女性 東南アジア)

スーパーで友達と一緒にいた。当日、東京から遊びに来た同国人の友人と一緒に飲み物

をいっぱい買ってレジを出たところだった。スーパーの店員の誘導の言葉はわかった。子どもの安否が心配だった。友人は、東京に帰れず自宅にそのまま避難することになった。海岸近くに住む友人も避難してきた。その友人の夫は一旦避難所に避難したが、本人は日本語ができないので日本人ばかりの避難所に行くよりも良いと言って、自宅に来た。自宅はライフラインがダメだったので、トイレの水がなくて、一番大変だった。

(浜通り地方男性 東アジア)

勤務していた学校の卒業式が終わって、職員室にいた。あまり地震が長く続いたので机の下に隠れた。いつもと違うゆれと長さに建物が壊れるのではないかと思った。地震がおさまってから、外に避難するように指示された。校庭に避難してから、各自家に帰るように指示されたが、自分の判断で学校に残り片づけを手伝った。津波警報、避難を告げる日本語がわからなかったし、津波が来るとは思ってもいなかったのも、この時家に帰っていたら確実に津波に巻き込まれていた。自分の住んでいたアパートは津波に流された。震災当日、学校の卒業式を終えて、午後は仕事がなかったので年休を取ろうかと思ったが取らなかった。避難所になった学校から海岸を見下ろして、誰かが「水が来た」と叫んでいた。何のことかわからなかった。人々が学校に避難してきた。地震と津波の関係がわからなかったが、津波が押し寄せてきたのを目の当たりにして、初めて分かった。避難所では情報が何も取れなかったことや電気も食べ物もガソリンもなかったことが苦しかった。

(浜通り地方男性 欧米)

ショッピングセンターから車を運転して帰る途中、一人で車を運転していて震災に

遭った。いつもの地震ですぐ終わると思った。車から降りてサイドミラーにつかまってやっと体を支えていた。路上ではうずくまって抱き合って悲鳴を上げていた人もいた。車もゆれ建物が大きな音をたてていた。異常事態だと思った。ゆれがいつ終わるのかが心配だった。近くにいた夫のところにすぐ行き、駐車場で会えた。すぐに家に向かって移動したので、渋滞に巻き込まれることはなかった。道路も大丈夫だった。家に帰る途中も余震で揺れ、周りの日本人は「クライストチャーチの再現だ」と言っていた。液状化の心配をしていた。家に帰ってテレビを見て、津波の映像にびっくりした。津波が来るとは思わなかった。

(浜通り地方女性 欧米)

自宅に一人でいた。家が壊れると思い、外に出た。近所の人には年配の日本人だけ。隣の人に教えられ、公園に行った。日本人が話す言葉がわからなくて不安だった。どこに行ったらいいか知りたかった。寒いので家に戻ったが、ライフラインがすべてダメになっており、2、3日間水なしで生活していた。水がどこでもらえるのかわからなかった。数日後、給水所の情報を同国人から教えてもらった。日本語ができないので、近所の人から生活に役立つ情報を何も教えてもらえなかった。

(浜通り地方男性 東アジア)

家族と一緒に自宅にいた。テレビからの情報しか入らなかった。ラジオは聞かない。日本のメディアと外国のメディアの情報が違いすぎて何が正しい情報なのかわからなかった。3月11日の深夜に断水し、翌朝には回復していたので、避難の必要はないと日本人の妻が言った。それでよいと思った。

(中通り地方男性 東南アジア)

子どもと一緒に大型ショッピングセンターにいた。地震発生時、誰かが机の下に入ると叫んでいたが、それに対応できる大きさの地震ではないと思い、外に出るという判断を自分でして建物の外に出た。店員の誘導があったかは覚えていない。死ぬかと思った。家に戻らなければならないと思ったが、駐車場に止めておいた車の前に天井からパイプが落ちて来て進路をふさいでしまったので、約10日間車が出せなかった。家の破損もなく、水も食べ物も十分あったから、避難の必要はなかった。

(中通り地方女性 東アジア)

病院で勤務中に震災に遭った。自宅の損傷の有無が気になったが、患者さんを危険な病棟から安全な病棟に避難させるのに奔走した。当日は帰宅できたのが深夜になった。

(中通り地方女性 東アジア)

自宅を兼ねた教会の事務所にいた。同じ建物にいた妊娠中の妻の安否が心配だったが、自力で部屋から出て子どもを迎えに行っていた。誰かと連絡をつけようとしても電話が繋がらない場合が多かった。公衆電話は繋がったので、公衆電話はなくしてはいけないと思う。自宅ビルの耐久性が心配で眠れなかったので、当日の夜は車の中で寝た。その後、避難所がどんなところかを見るため避難所に行ってみた。狭くて、空気も悪く、衛生上心配なことが多かった。すぐに自宅に戻り、自宅の事務室で寝泊まりを1週間ほどした。

(中通り地方男性 東アジア)

地震の最中は、びっくりして何をしていいかわからなかった。日本での生活オリエンテーションで、地震時の対応について読ん

でいたが、忘れていて、対応できなかった。同僚の日本人は、小さい時から訓練を積んでいるので、窓を開けて退路を確保するなど、対応していた。一緒にいた同僚と外に避難した。その後、避難所に行くことを勧められ、1泊だけ避難所で過ごした。避難所には知り合いもいて、トラブルはなかった。テレビのニュースを見て、被害の大きさに驚いた。インターネットで、本国の家族に無事を知らせた。

(中通り地方男性 欧米)

会議があって公共の会議室にいた。まず、テーブルの下に隠れ、自分たちの判断で外に出た。エレベーターを使うことはクレージーだと知っていた。役所の前で上司や同僚と会い、お互いの無事を確認した後、みんなで避難した。地震直後、海外にニュースが配信される前にi-phoneで本国の家族に自分の無事を伝えることができた。

(中通り地方男性 欧米)

会議があって公共の会議室にいた。自分の判断で外に出た。2週間前にあったクライストチャーチの大地震のことが思い出されて、ビルの中にいることはとても怖かった。避難所を教えてもらって、そこでミーティングをして家に帰った。アパートの近くの公民館の避難所に避難した。避難所となった公民館の人はみんな親切だった。

(中通り地方男性 欧米)

NPOのスタッフと預かっている子どもたちと一緒にいた。子どもたちを安心させながら、余震が続き道路も崩れて危険だと教えられたので山の上の施設から近くの避難所に行くタイミングをはかった。一番の心配は家族の安否だった。断水していたの

で、夕方コンビニに夕飯を買いに行ったが、大勢の人がいて食べ物が全くなくなっていた。その時、初めて事態の大きさに気づいた。自宅に米も野菜もあったが、大勢の人が買い物をしているのを見て、今後どうなるか不安になった。その後、隣接している町のコンビニやスーパーマーケットを回ったが、何も食料を買うことができなかった。余震が続き、家の中にいることが不安だったし、家は寒かったので、朝まで車の中にいた。ガソリンをたくさん使ってしまった。どこに避難していいのかわからなかった。町の避難所には、浜通りからの避難者がたくさんいたので、町の人が入れる雰囲気ではなかった。

(中通り地方女性 東南アジア)

家に一人でいた。息子が隣の市にいたので、息子とどうやって会うかが心配だった。電話が午後3時ごろ通じたので、安心した。その後、息子を迎えに行った。途中道路が崩れていたりして、往復で6時間かかった。戻るときガソリンを満タンにした。近くに住む義母も心配だったが、道路状況がわからない中、夜の移動は危険だと判断し訪ねていかなかった。余震が怖かったので、その夜は車の中で寝た。寒かった。停電したが、水は出た。義母の住む町は断水していたが、電気はあった。車で往復して補い合った。

(中通り地方女性 東アジア)

自宅に家族全員でいた。ゆれがおさまって家の片づけをした。風呂のタンクが壊れた。放射能のことが一番怖かった。自分は死ぬのだと思った。とても怖かったので、震災後1週間は家の一階で家族みんなで寝た。

(中通り地方女性 東南アジア)

ピアノ教室に来てくれる子どもを小学校に迎えに行っていたので、その子の小学校にいた。子どもの家族に学校に無事であることを伝えた後、自分の家族も心配なので自宅に帰った。義母を隣の家をお願いして、自分の子どもを小学校と中学校に迎えに行った。

(中通り地方女性 東アジア)

市内を運転中だった。実母と一緒にいた。はじめ、車がパンクしたかと思った。東京に帰る実母を駅に送る途中だったが、この状況で新幹線に乗ることは危険だと考えて家に戻った。普段は20分位の道だが、1時間以上かかった。家の中がぐちゃぐちゃになっていた。家にいなくてよかったと思った。断水したので、水を買いに外出したが、売り切れていた。自販機でやっと2本買った。主人の職場は断水しなかった。水を汲んで来て、近所の人にも配ったが、水を運ぶ容器がなくて困った。その後、ガソリンがなくなった。近所から、どこでどんなものが買えるか教えてもらった。地震発生の翌日、市内の美容室に実母を洗髪に連れて行った。家族と離ればなれになるのが嫌だったので、自分も洗髪してもらった。美容室の人も、まさかこんな時にお客が来るとはと驚いていた。

(中通り地方女性 東アジア)

経営する商店で、主人と主人の従兄弟と一緒にお茶を飲んでいて、ストーブを消して、TVを消して、熱湯の入ったやかんをストーブから降ろして裸足で外に出た。商品が全部棚から落ちて、家に入れなくなった。初めての経験だったので、びっくりした。家の中に入る通路を確保して家の中に入ったのが夜中の12時だった。その後、友人・知人の安否確認をしようとしたが電話が通じなかった。テレビは棚から落ちていて見るができなかった。まず、店舗の片

づけをして、テレビを設置しなおして、テレビを見て事態の重大さにびっくりした。地震直後、壊れたものを補修する人が材料を買いに殺到したので、とても忙しくなった。家の前の国道は車で渋滞していたが、なぜ渋滞しているかがわからなかった。家の片づけ、販売で忙しく、テレビを見る暇がなく、何が起きているかわからなかった。

(中通り地方女性 東アジア)

友だちの親子と自分の娘と一緒に自宅にいた。外に裸足で飛び出した。怖くてしょうがなかった。家が壊れるのではないかと心配だった。頭が真っ白になって、言葉にもならなかった。夫がいなかったのが不安でしょうがなかった。

(中通り地方女性 東南アジア)

自宅に一人でいた。地震当日の朝、偶然にも、夫と地震が来たらどうするかを話し合っていた。リビングに大きなテーブルがあるので、その下に隠れるようにと言われた。しかし、地震の大きさから、外に避難する方が安全だと自分で判断し、瓦等の落下物の心配のない玄関から外に出て、庭先でうずくまっていた。臨月だったので、お腹が張って、子どもが生まれてしまうのではないかととても心配した。しばらく外にいたが寒かったので、家の中に入って夫の帰りを待った。あまりの恐怖に、めまいもした。携帯電話で夫に連絡をしようとしたが、全く通じなかった。情報がどこからも入らないことが一番の不安だった。

(中通り地方女性 東南アジア)

レストランでアルバイト中だった。たまたま、外でたばこを吸っている時に地震が発生した。外でじっとしてゆれがおさまるの

を待っていた。友達の安否や、アパートが無事かどうか、火事になってはいないだろうかと心配した。当日は、中学校の卒業式だったので、レストランは混んでいた。約80人のお客さんを、店長が外に誘導し、その後、男性の店員がレストラン内に入り、ガスの元栓や電気のスイッチを消して、店内を点検した。お客さんを無事に帰宅させて、午後4時ごろ、自分たちも帰宅することができた。物が散乱しているアパートの部屋から服を取って、友人3人と避難所を探して歩いた。大手スーパーマーケットに立ち寄ったら、避難所として開放されていることがわかり、そのまま2泊した。他の同国人も10人程度避難していた。12日の日中、アルバイト先のレストランに行って、水と食料をもらってきた。

(中通り地方男性 東アジア)

アパートに一人でいた。母国の母と電話中だった。強い地震になったので、いったん電話を切った。いつもの地震だと思ったが、だんだんゆれが強くなり、どうしていいかわからなくなった。着替えて外に出ようとしたが、立てないくらいのゆれで頭の中が真っ白になり、泣くしかなかった。この世の終わりだと思った。建物が倒れるのではないかと思い怖かった。ゆれがおさまり、着替えて、同じアパートに住んでいる友だちのところに行って、この後どうしようかと話した。一度部屋に戻り、貴重品を取り、安全な場所に行こうとアパートを出た。日本人の知り合いが多くいるので、友達がアルバイトをしている駅前の居酒屋に行った。パトカーが避難所をアナウンスしていたので、警察官の誘導に従って、高校の体育館に避難し1泊した。大小2つの体育館があり、比較的暖かい小さい体育館は老人と子ども用として使うという担当者の指示に従って、若い人たちがみんな大きな体育館

に移動した姿に感心した。避難所にいた近くの人に食料の配給のことを教えてもらった。みんな自分のことだけを考えるのではなく、一緒に頑張ろうという雰囲気があった。あわてて避難し、靴下を履かないで家を出たので、寒くて早く家に帰りたかった。翌日家に戻った。

(中通り地方女性 東アジア)

娘とスーパーマーケットの2階にいた。家族の安否と家の被害状況が知りたかったが情報は入らなかった。とりあえず近くの避難所になっている小学校へ行ってみたり、隣近所の住民の意見を聞いたりした。状況がよく理解できなかったので様子を見ていた。幼い子供が多かったので、自分たちが避難所に入ることを遠慮した。行政関係の人なのか指示を出していた人がひどく怖く感じた。上から目線的な話し方をしていた。

(中通り地方女性 東アジア)

大学の研究室にいた。携帯の地震警報が鳴ったが、意味が分からなかった。テーブルの下に隠れた。パソコンや本が飛び出し、長く続いたので怖かった。この世の終わりかと思った。ニュージーランドの地震を思い出した。「やばい！クライストチャーチと同じだ！」と叫んでいる学生がいた。数日前に大きな地震があり、次は福島かと冗談で言っていた矢先の地震だった。ゆれがおさまって、外の避難場所に集合した。テレビで津波の映像を見たとき、みんな言葉を失った。その後、大学から帰宅するように指示が出て、友だちに送ってもらって、家に帰った。家の中がぐちゃぐちゃになって住めなくなった友だちが、アパートに来て、一緒に4日間暮らした。自分の家は水、電気、インターネットが全部大丈夫だった。友達が持ち込んだテレビを見て情報を得た。インターネットが使え、スカイプで

家族に無事を伝えられたので、帰国する必要も気持ちもなかった。また大きな地震が来たらどうしようなどと、余震の心配をしていたくらいだった。

(中通り地方男性 東南アジア)

スーパーマーケットに友達といた。家が壊れたのではないかと心配した。怖かった。電気も水も止まってしまった。中通り地方にも津波が来るのではないかと誤解した母国の家族が、危険だから早く帰国するよう電話して来た。状況がつかめなかったので、心配ないから大丈夫と答えてしまった。

(中通り地方女性 東アジア)

自宅の玄関で子どもと一緒に出掛けるところだった。携帯の緊急地震速報が鳴ったが、初めてのことでわからなかった。駐車場に避難した。ゆれが激しかったので、その後、車のないところに避難した。家が倒れるのではないかと、家の中はどうなるのだろうかと不安だった。コートを取りに家に戻ったが、家の中はめちゃくちゃだった。近所で火災が発生し、電話で消防署に通報しようとしたが通じなかった。この世の終わりのような気がした。近所の人は、みんな避難所に行き始めたようだった。自分は行かずに、車の中にいた。地震の大きさに何も考えられなくなった。職場に行ってみたが、職場も被災し、職員は災害対応でみんな別の場所で働いていたので連絡が取れなかった。避難所に行こうかと思ったが、食料がないことには変わりがないと思い、自宅で服を着たままいつでも逃げられるように玄関を開けて寝た。2日後に職場の人を探し当て、合流できた。避難所の支援に参加し、言葉の問題や習慣の違いでトラブルが発生していた同国人の通訳をした。

(中通り地方女性 東アジア)

就学前の子どもたちと一緒に自宅にいた。外に出て、自宅前の公園に避難した。状況が分からないので、公園にキャンプ用のテントを出して、布団を持ち込み近所の子どもと一緒に避難させた。家の中が割れたガラスなどで危険だった。薪ストーブを使っていたので、消火が心配だった。子どもの世話をすること、どこに寝かせるかを一番に考えた。夫の親が心配して迎えに来てくれたので、夫の自宅に1週間避難した。夫は災害対応で家に帰って来られる状態ではなかったが、町内会の班長をしていたので、自分が行政からの情報を町内の家庭に伝える仕事もした。夫が仕事で車を使うので、ガソリンを確保しておかなければならず、自分は徒歩と自転車で移動した。

(中通り地方女性 東アジア)

自宅アパートに一人でいた。外に出ようとしたが、ゆれが激しく、階段で降りることが心配だったので、部屋にとどまった。ゆれがおさまってから外に出た。同国人の友だちに電話して集まって一緒に行動した。8人が自分の部屋に泊まった。翌日はみんなで別の友だちのところに泊まった。次の日、小学校の避難所に行って2、3日泊まった。自分たちの毛布を持って行った。

(中通り地方女性 東南アジア)

勤めているスーパーマーケットの2階のトイレに一人でいた。トイレから出ることもできず、ゆれがおさまるのを待った。すぐに停電になり真っ暗な中、外に避難した。商品はすべて棚から落ちていた。コートも着ないで外に避難したので寒かった。突然の出来事だったので、何の用意もできなかった。家に電話をしても繋がらず、高齢な義父母の安否が心配だった。子どもは学校にいるので安心だと思った。道路が陥没して、渋

滞し、なかなか家に帰れなかった。その間、夫が子供を学校に迎えに行ってくれた。家は壁が全部落ち、水道も電気もなく、座るところもなかった。地震がいつまで続くのか、どうなるのかが知りたかった。家が半壊したので、近くの学校に2泊避難した。水と食べ物をもらって、炊き出しのボランティアに参加した。

(中通り地方女性 東アジア)

勤務先で会議中だった。机の下に隠れた。電話が通じず、家族の安否が心配だったが、1時間後に帰宅できた。息子と孫は広い駐車場のあるところに避難していて留守だった。テレビで津波の映像を見て、家や車や人がただ流されている映像に、人間の無力さを感じ、ショックで何も手につかず、冷静に受け止められず泣いてばかりいた。今も思い出すと涙が出る。何もせず、家で家族の帰りを待った。通常の帰宅時間に息子たちも帰ってきた。午後4時過ぎに水や食べ物を買に行った。余震がひどくて、駐車場の車の中で家族4人一晩過ごした。翌日は家の片づけをして過ごした。

(中通り地方女性 東アジア)

勤務先で会議中だった。机の下に隠れた。外に飛び出そうとしたスタッフがいたが、危険だからといって止められた。他に大きな混乱はなかった。所長が帰宅するように言ったので、家に帰った。自分の家は大きな被害がなかったので安心した。何が起きたのか訳が分からなかった。どうなるのだろうと心配でテレビから情報を得た。大変なことが起きていることがわかり、まず食べ物の確保と母国の家族に無事を知らせるための国際電話用のテレホンカードのリチャージをしようとコンビニに行った。1度目はうまくリチャージできなかったが、

2度目はリチャージができて、母国の家族にも無事を知らせることができた。2度目にコンビニに行ったときは、お客さんであふれていた。パンを買おうと、近くのスーパーマーケットに行ったが、陳列棚が倒れて営業していなかった。夕食を食べようとレストランに行ったが、そこも営業していなかった。この時、ガソリンを入れておこうという知恵は働かなかった。翌日、ガソリンを入れにスタンドに行ったら、長蛇の列だった。幸い、数量制限がかかる前だったので、長時間並んで満タンにすることができた。

(中通り地方男性 東アジア)

勤務先で会議中だった。日本に来てから机の下に隠れることを学んでいたので実行した。強いゆれで、自宅が壊れるのではないかと心配した。自宅に一人でいる妻の安否が心配だった。すぐに電話をしたら、繋がって安心した。母国にもいち早く自分の無事を知らせるメールを送った。母国の都会に住む妹には、自分の無事を伝えられたが、農村部に住む親戚たちには無事を知らせられなかった。津波に巻き込まれて死んだと思われていた。すぐに帰宅したが、途中、道路が崩壊していて注意して運転した。もともと3月12日に帰国する予定だったが、空港までの移動手段がなかったので帰国できなかった。家の中は家具が散乱し、余震が続いていたので、駐車場の車の中で寝ようとしたが、寒くていられず、アパートに戻り横になった。眠ることはできなかった。

(中通り地方男性 東南アジア)

自宅に一人でいた。停電し、真っ暗で、信号まで止まり、ただ事ではない事態が起きたと感じ、非常に恐怖を感じた。何が起きているのか、車を運転して市内を見て回った。どうしていいかわからず、泣きながら運転

した。一人でアパートで過ごすことに不安を感じ、スーパーマーケットの駐車場に車を停めて、車の中で一晩過ごした。同じように駐車場で過ごす人がたくさんいた。しかし、男性ばかりだったので、トイレを借りにスーパーマーケットに行けなかった。真夜中に家に帰ってトイレを使ったが、懐中電灯がなくて困った。近所の日本人のおばさんに懐中電灯を貸してもらったり、井戸水してもらったり、助けてもらった。消防団の人がトイレの水を配っていたのももらった。母国では、津波の報道ばかり流されていたので、福島県全部が津波で流されたと思われるので、1日中電話が通じず連絡が取れなかった。自分も津波で流されて死亡したと思われていた。

(中通り地方女性 東アジア)

家に一人でいた。トイレに隠れた。家族や友だちの安否が気になったが、電話が全く通じなかった。住んでいたアパートの被害が大きかったので、食べ物と水と寝るところが心配だった。子どもを寝かせて、自分はいつでも避難できるように、その日は眠らないで大きなゆれや避難に備えた。しかし、親が心配している様子を子どもには悟られないようにした。

(中通り地方女性 東南アジア)

会社にいた。機械がみんな倒れた。自主的に外に避難した。退勤の許可を得て、娘を保育所に迎えに行った。電話が通じず、家族と連絡が取れなかった。道路は陥没していたが、自宅に被害はなかった。自宅が人里から離れているので、ガソリンがないとスーパーに買い物にも行けず、食べ物の確保が心配だった。

(中通り地方女性 東アジア)

勤務先のホテルの地下1階にある厨房にいた。大地震に遭遇するのは、生まれて初めての経験で、死ぬかと思い、頭の中が真っ白になった。怖くてパニックになった。家や友だちの安否が心配だった。上司から外に出るように指示があった。2回目の地震で停電になり、会社の上司から帰宅していいと言われた。帰宅途中、道路が崩れていた。

(会津地方女性 東アジア)

職場に同僚と一緒にいた。母国は地震がないので、震災前は地震はExcitingと思っていた。しかし、実際に体験したら非常に怖かった。外に避難するように指示されたが、日本語はわからなかった。ゼスチャーでなんとなく理解した。人的被害は大丈夫か、友達は大丈夫か心配だった。

(会津地方男性 欧米)

会社にいた。会社の上司の指示で、工業用のミシンの下に隠れた。会社は常にラジオがついている。ラジオで「地震です。危ないですから安全な場所に避難してください。」との呼び掛けに応じ、会社の上司の指示に従って、外に避難した。とにかく、みんなと一緒に行動した。外に避難してしゃがんで余震に耐えた。頭の中は真っ白で、早く子どもを迎えに行き家に戻りたいと思った。1時間ぐらい会社で待機した後、上司から家に帰っていいと許可が出た。

(会津地方女性 東南アジア)

勤めている店にいた。びっくりした。ゆれがおさまってから外に出た。外を見たら、みんな外に出て集まっていた。停電して信号もついていなかった。当日は店の予約がいっぱいだったのに営業できなくなった。電話が通じないので、わざわざキャンセルを伝えに来て

くれたお客さんもいた。当日の夕方、家に帰るとき、真っ暗で車が一台も走っていない街は不気味で嫌だった。日本は終わりだと思った。3月いっぱい、すべての予約はキャンセルになった。食事をしに出かける雰囲気ではなかったし、ガソリンも食材もなかったので3月中は店を閉めることになった。

(会津地方女性 東南アジア)

家でパソコンをしていた。戸外に逃げたが、電信柱がゆれて、地面も波打ち、地面が割れて自分の中に落ちるのではないかと心配した。非常に驚き、恐怖とショックを受けた。世界の終りが来たかと思った。翌日は普通通り仕事に出た。店は食料を買い求めるお客さんでいっぱいパニックになっていた。

(会津地方男性 東アジア)

友人の店で友人と昼ご飯を食べていた。びっくりして、駐車場に飛び出した。夫の安否が一番心配だった。友人の店の1階にあった花屋さんの店のガラスが割れて、大変な状況だったので、みんなで片づけを手伝った。自宅も壊れているのではないかと心配だった。生活に何も問題はなかったが、ガソリンがなかったことが一番困った。

(会津地方女性 東アジア)

(2) 原子力発電所事故後の状況

町にはいなかったの、町に入れないこと、町ごと他町に避難したことをテレビで知った。会社の人の親族が役場職員だったので、電話で確認したら、町が避難した先への移動が落ち着いた頃に避難所に入居するように指示を受けた。どうしていいかわからなかった。避難命令が出ていたので3月21日まで東

京の友人宅に避難した。震災時に町にいなかったの、自分の目で町の状況を確認することができなかった。見たかった。3月21日に町が避難している場所に避難した。噂や人の話がみんな違って困った。外国人は避難所に入れないと、補償の対象にならないとか、待遇が違ふとかといった噂が流れて、とても不安だった。役場職員に確認したら、その噂はデマだということがわかったので避難所に行った。避難所では近所の人と一緒に行動したので、困ったことはなかった。仮設住宅はどのようなものか想像もつかず、避難所のようなもので不便だというイメージがあったので、借り上げ住宅を選んだ。近所に住んでいた知り合いの近くに住めるよう借り上げ住宅を選んだ。避難所から他県の借り上げ住宅に移った。母国の家族は日本全部がダメになったと思っていた。関西にいる友人が中継して、家族に自分の無事を知らせてくれた。

(避難対象地域女性 東アジア)

原発事故翌日に他の町に避難するようにと広報車が言っていたが、どうやって避難するかわからず、勤務地の一つである中学校に行った。教頭先生から口頭で避難指示を受け、事務の職員と一緒に、その職員の車で他の町の避難所に避難した。だれかとハグして落ち着いたかった。避難所で町の若い女性職員と再会し、ハグできてほっとした。食べ物や寝る場所など必要な欲求は満たされていた。お風呂に入れなかったり、着替えがなかったり、電池がなくて携帯が使えないといった二次的な欲求は満たされなかったが我慢した。携帯電話と日記とiPadと聖書と財布だけを持って避難した。他町の避難所には1泊し、教会の人と一緒に会津の避難所に行き1泊し、その後、会津の教会に避難した。教会関係者の車で隣接県に送ってもらい、東京に出て、パス

ポートの発行などの手続きを取り3月18日に帰国した。

(避難対象地域女性 欧米)

避難所ではパソコンは使えず、電池が足りなくて携帯も使えず、本国からの情報は得られなかった。3月13日にメールで家族に無事を伝えることができた。震災後仕事が無くなったので帰国したが平成24年4月に再来日した。

(避難対象地域女性 欧米)

3月12日朝6時、防災スピーカーで全町避難の指示が出た。同僚の日本人が日本語を聞いて母語で教えてくれた。13時にバスが来るから待つようにと指示があった。友だちに頼んで、車で自宅にパスポートを取りに連れて行ってもらった。携帯のEmailで情報がリアルタイムに入っていたので、10時頃、バスを待たずに車で避難しようと同僚に提案したが、賛成してもらえなかった。13時までバスを待ったが来なかったのので、同僚の車で中通りに避難した。母国の両親とメールでやり取りができたことが、両親にとっても自分にとっても心を落ち着かせることにつながった。15日に帰国した。ユニクロでスウェットを買い空港で着ている服を全部脱いで捨てて、飛行機に乗った。母国ではマスコミの取材陣が待ち構えていた。父がジャーナリストなので、マスコミの取材に対応することに困惑はなかった。ロータリークラブやライオンズクラブなどで講演をし募金を呼びかけた。講演会で自分の体験を話し、募金を集めることに集中できたことは、自分の心の安定に役立った。母国内では、一部の人から売名行為だとか、自分のためにやっているのではないかとバッシングを受けた。3月から6月の間で700万円の寄付が集まった。ジャーナリストの父は、

記者として町との姉妹都市の担当をしていたので、父の影響力もあって多額の寄付金が集まった。その寄付金を持って町に全額寄付するために、7月1日に日本に帰ってきた。母国に帰るとき、春休みの間2週間だけ休むつもりで帰国したが、職場復帰の連絡が来なかったのので、とりあえず寄付金を届けに避難先の町長を訪ねた。その時、また町で働いてくれないかと要請を受けて感動し、次の日から復帰した。今年の9月に母が日本に来た。避難先の生活を見て、だいぶ安心して帰った。父と姉妹は、まだとても心配している。来年、父が日本に来るので、父の心配も少しは緩和できたらいいと思う。

(避難対象地域女性 欧米)

夫と一緒に行動した。3月13日に関西から弟が迎えに来た。弟のところへ子どもと一緒に1週間避難した。その後、3か月間母国に避難した。実家で楽しく暮らしたが、週に数回は日本の家族と電話で話した。小学1年生の子どもの勉強が心配で、仮設住宅ができたタイミングで日本に帰国した。子どもは、幼稚園が一緒だった友だちとばらばらになり寂しかった。

(避難対象地域女性 東南アジア)

役場の人から避難指示を聞いた。町内の防災スピーカーで避難指示が出された。音による情報は、意味が分からなかった。文字があるとわかるけれど、声だけの情報だったので、何が起きているのかわからず、怖いとも思わなかった。会津地方の避難所に行った。家族と一緒にだったので、情報は夫が得て教えてくれた。おにぎりだけの生活が続いたのはつらかった。夫と義母がパスポートを持っていなかったのので、領事館が用意した飛行機で母国に帰国しなかった。後日、二人のパスポートを取得して、3か月間家族三人で帰った。家

族を置いて自分だけ母国に帰ることはできない。役場から、仮設住宅の準備ができたと連絡をもらい、日本に帰国した。

(避難対象地域女性 東アジア)

3月12日の早朝6時、防災スピーカーが隣の村に避難してくださいと言っていた。とても怖かったので、泊めてくれた人にお礼も言わずに、家族3人で、家を飛び出し、渋滞になる前に村の避難所に向かった。避難所でヨウ素剤をもらった。息子の小学校の先生とそこで会い、事態が深刻であることを教えられた。先生は、放射能の影響を避けるためにどこに避難したらいいか地図を見て調べていた。その先生と一緒に、先生の実家に避難した。周りの日本人はみんな親切でいろいろな情報をくれた。その先生の弟が原発で働いていたので、できるだけ遠くに避難したほうがいいという情報をもらって、県北地方の避難所に1週間いた。その後、退院した夫と合流して、新潟経由で関東にある夫の親せきの家に1週間避難した。迷惑をかけるのであまり長居はできないと思い、避難先を転々とした。中通り地方の老人ホームの避難所に2か月避難した。6月末に中通り地方の仮設住宅に入居した。9月にレストランをオープンさせるために、単身で浜通り地方にアパートを借りて住み始めた。息子は、学校が避難している中通り地方に残した。外国人は、原発が爆発したから日本はダメだと思ってみんな帰国した。自分は日本の情報を信じて日本に残った。去年8月に母国に一時帰ったが、家族は心配して帰ってくるように言っていた。息子は母語ができないので母国に行きたがらない。義母も、孫が母国に行ったら日本に帰って来なくなるのではないかと心配して、行かせたくないと思っている。

(避難対象地域女性 東南アジア)

3月12日の朝、役場の人にバスが来るから乗って避難するように言われた。屋内退避や原発事故のことは教えてもらえなかった。なぜ、避難するかわからなかった。自宅の車で避難した。西に逃げなさいと言われたが、どこに逃げて良いかわからなかった。義母は2、3日で帰れるからと言って、着るものをあまり持たずに避難した。3月12日の午後から4月初めまで、中通り地方の体育館に避難した。寒かった。冷たい食べ物や飲み物しかなく、また栄養も偏っていたので、子どもや老人は体調を崩す人が多かった。1週間後くらいから、みんなでお湯を沸かして、温かいカップ麺が食べられるようになった。避難所で、子どもが遊んでいた時、一緒に遊んでいた子どものおもちゃがなくなった。その子どもの祖母に泥棒呼ばわりをされた。その日は、ずっと、泥棒、泥棒と言われ続けた。結局、そのおもちゃはその子の祖父の布団の中から発見され、全くの濡れ衣であったことがわかったが、泥棒扱いした大人からの謝罪はなかった。謝罪を要求したが、けんもほろろに対応された。最後まで、謝罪がなかったことに、今も心を傷つけられている。

(避難対象地域女性 東アジア)

4日目、津波の心配がなくなり家に戻って片づけをしていたら、テレビで原発事故が報道されていた。ガソリンは入手困難になっていたが、ディーゼル車の軽油は入手できたので、家族一緒に、車で中通り地方に避難した。中通り地方も放射能の数値が高かったので、横浜の友だちの家に2週間避難した。横浜でも、食料や水を買うのに制限があった。その後戻ってきたが、何もなくなって、ゴーストタウンのようだった。一番の問題は、介護が必要な義母のことだった。避難先での介護で疲れ切ってしまい、自宅に戻ることを決意した。母国の大使館が

用意した避難用のバスのことは、避難した後に聞いた。母国に避難するなら、家族一緒にと考えた。義母がパスポートを持っていなかったのでは帰らなかった。今は義母もパスポートを取得し、備えている。子どもたちは、日本の友だちを置いて母国に避難することはできないと言っていた。

(浜通り地方女性 東南アジア)

原発が爆発したことはテレビで知った。大使館からの連絡はなかった。ガソリンがなかったので避難できなかった。避難所にも行けなかった。知り合いから給水のことを聞いて、帽子やマスクをして水をもらいに給水所に行った。トイレの水は川から汲んで使っていた。先に千葉に避難した友だちから、千葉に避難してきてもいいと電話が入った。子どもたちは、夫の姉と一緒に土浦のホテルに避難した。ホテル代を払っての避難だったので、申し訳なくて自分も一緒に行くとは言えなかった。子どもたちと別れ別れになるのはつらかった。2週間後にバスで帰ってきたが、食べるものがなくて大変だと思ったので、カップ麺などを買い出しして帰ってきた。すぐに仕事に復帰した。母国の大使館が用意した避難用のバスのことは、避難した後に聞いた。避難したことに対する周りの人からのプレッシャーは感じなかったが、子どもたちは日本の友だちを置いて自分だけが母国に避難することに対して抵抗があると言っていた。子どもたちは日本と母国の間でプレッシャーを感じていたようだ。お母さんだけ帰れば良いと言われた。

(浜通り地方女性 東南アジア)

近所の日本人に誘われて、隣接県の体育館に1週間、有料マンションに1週間、図書館に2週間避難した。みんな親切だったので、

問題はなかった。避難所のTVやインターネット、新聞で情報を得た。役所の人もいろいろ教えてくれた。4月2日に戻ってきた。食べ物や服の心配はなかったが、精神的な負担が大きかった。人体や食品への放射能の影響などが心配でとても怖かった。震災後友だちがみんな母国に帰ったので、自分も帰国すべきか心が揺れた。しかし、母国の父から、「日本は、今、地震や放射能があって安全ではないけれど、あなたの第二の故郷だから日本の家族が大変なときに一緒に困難を乗り越えるべきだ。あなただけ帰ってきては親の私が申し訳なく思う。」と言われて留まった。

(浜通り地方女性 東アジア)

原発の爆発は、テレビや避難所にいる知らない人から教えてもらった。避難所に同国人はいなかった。ヨウ素剤を配っているという情報は友人や夫からももらった。大使館のバスが迎えに来るらしいということはわかったが、いつ、どこで乗れるのかわからなかった。関西に姉がいるので、家族で関西のアパートに1ヶ月避難した。ガソリンがなかったので、那須塩原まで車で行って、そこからは新幹線で避難した。アパート代が無料だった。食料は自分で買った。関西でバイトをしたが、滞在1か月後に、夫の会社から電話があり、職場復帰しないとクビだと言われたので戻った。その後、母が心配していたので、子どもと二人で母国に帰ったが、家族は一緒にいるのが一番なので戻ってきた。友だちとのコミュニケーションは変わらない。友だちは関東に避難していたので、今度何かあったら関東と一緒に避難しようと言っている。

(浜通り地方女性 東南アジア)

夫に言われて、義姉の家に義母といっしょに避難した。放射能が危ないということは知らなかった。外国人はみんな帰国したと知り、自分も帰国したほうがよいと思った。地震後、電気工事の仕事をしている夫はとても忙しくなり、義姉の家での避難生活は慣れない生活で不便だったのと、夫の仕事が忙しく、日本語ができない自分は日本にいない方が夫の負担にならないと判断し、母国に帰国した。1か月半後、夫がもう大丈夫だと言って呼び戻してくれた。母国の母は自分が日本に戻ることに對して、心配はしていたが、自分の人生だから自分で決めなさいと言って帰国を許してくれた。母国の家族からも、日本の家族からもプレッシャーは受けていない。

(浜通り地方女性 東アジア)

震災後、テレビをつけっぱなしにしていたので、原発の事故のことはテレビで知った。メールで家族や友だちの安否確認をした。母国の地震で親戚が数週間キャンプ生活を強いられたので、水を貯めて断水に備えていた。食料も水も1、2週間の備蓄があったので、原発がなければ、そのまま家に住んで出産する予定だった。母国の母から、電話で避難するように言われたが、母国の地震の経験から、最初は道路が寸断されていると思っていたのであきらめていた。しかし、友だちが東京に行けたと知り、3月14日の朝、夫の会社が1週間休みになったので、車で、夫の実家のある関西を目指し、2日かけて行った。ガソリンは満タンにしてあった。避難の途中、郡山付近で、原発の2回目3回目の爆発があったことを知り、もう帰れないと思った。2週間関西にいて、夫は会社が始まったので自宅に帰り、自分は母国に帰った。震災当初、大使館から電話があり、母国の航空会社が格安チケットを売ったことを知っ

た。しかし、自分が帰った2週間後にはそのチケットはなかった。震災当時、臨月に近かったのでみんな優しく同情的だった。みんな、心配をしてくれた。7月末に赤ちゃんと一緒に帰ってきた。お盆の前に帰らなかった。母国の家族は、日本に帰ったら死ぬと心配し、日本に帰ることを説得するのはちょっと大変だった。でも夫がいるから日本に帰ってきた。

(浜通り地方女性 欧米)

教会のリーダーから原発事故のことを聞いた。教会に4日間避難し、教会の女性と子どもたちで隣接県のペンションに4月上旬まで避難した。日本人と東南アジア人がいた。日本語と英語で会話をした。携帯電話のfacebookやスカイプ、同僚からのアドバイスが役に立った。4月初めの語学教室の再開に合わせて帰ってきた。語学教室、生徒、同僚、生徒の保護者をみんな愛しているからプレッシャーを感じたことはない。母国の両親は、心配して帰国するように言ったが、あなたの選択だと残ることを許してくれた。夏休みに帰国した時に、現地の様子を両親に伝えた。父は理解してくれたが、母はまだ心配している。

(浜通り地方女性 欧米)

みんな忙しくて、だれも詳しいことを教えてくれなかった。なぜ、テレビで枝野官房長官がシリアスな顔で毎日記者会見しているのかわからなかった。「放射能」と言われても、意味が分からなかった。数日後、電気が回復しインターネットで情報を見て、ことの重大さを理解した。春休みに入って、他県の友だちのところに避難した。友だちの家なので問題はなかった。地震直後、母国の母から、すぐに戻るように電話があった。しかし、残ってみんなを手伝いたかった。外国の

ニュースはとてもひどいことを伝えているので、日本国外に住む人はとても神経質になっている。去年8月に母国に一時帰国した時も、母に早く日本の仕事を辞めて帰ってくるように言われた。

(浜通り地方男性 欧米)

原発事故のことは日本のテレビで知った。日本語の字幕の漢字を読んで情報を得た。3月15日に大使館のバスで避難した。バスの情報は同国人の友人から聞いた。3日間、新潟の避難所(体育館)にいたが、母国語が通じるので安心だった。しかし、航空チケット代3万円を持っていなかったので帰国せず、バスで東京に出て、1ヶ月くらい娘のところに行った。

(浜通り地方男性 東アジア)

自家用車を使って仕事をしていたので、ガソリンがなくなり、他県にいる弟のところに行きたかったが、すぐには行けなかった。はじめ、ガソリンがなぜ必要なかわからなかったが、後で身にしみて分かった。大使館の用意したバスには乗らずに、早めに他県に避難した。子どもがパスポートを持っていなかったの、パスポートを取って春休みに母国に帰った。夫を一人置いて帰国するのは心配だった。帰国してから、夫は帰ってきて欲しいと言ってくるし、子どもは日本に帰りたいたいと言う。しかし、母国の両親は日本に帰らないでほしいと言う。とても迷った。学校再開を聞いて、日本に戻ってきた。

(浜通り地方女性 東アジア)

夫が携帯のワンセグテレビで見せて教えてくれた。何が危ないかわからなかった。原発から遠いし、大丈夫だと思った。だんだん日が経つにつれて、危ないと言われるようになった。母語で説明してもらえれば良かった。母

国に帰りたかったが、3月中は子どもの学校があるし、帰国できなかった。夏休みに子どもの避難を兼ねて帰った。母国の両親は心配はしていたが、原発から遠いし海からも遠いので、心配はそれほどではなかった。

(中通り地方女性 東南アジア)

放射能のことが一番不安だった。隣の友人宅に一週間避難した。その後、1か月半家族で母国に避難した。日本人はやさしく送り出してくれたし、帰ってきたときもやさしく迎えてくれた。それは日頃の人間関係が良好だったからだと思う。

(中通り地方男性 東南アジア)

テレビや日本の友人からの情報で屋外に出ない方がいいことを知った。母国の家族・友人から電話やメールでも情報を得た。母国からの情報と比べて、日本人が受け取れる情報が少なすぎると感じた。何も知らずに屋外に出て活動している日本人を見て、考えが足りないと思った。舅、姑の世話をしなければならぬので、帰国することはできなかったが、できることなら子どもだけでも母国に避難させたいと今でも思っている。インターネットで母国でも余震の情報が流れていたの、家族が心配して、余震のたびに夜中でも、帰国を促す電話がかかってきて落ち着かなかった。4月に1週間、家族を安心させるために帰国した。

(中通り地方女性 東アジア)

テレビで外に出ない方がいいということを知った。避難については、職場からの指示はなかった。友だちから教えてもらった。父が、放射能について専門的な知識を持っていたので、アドバイスをもらうことができた。そのアドバイスを参考に自分の判断で行動し

た。発災1週間後に3日間、兵庫県に避難した。
(中通り地方男性 欧米)

3月12日に避難対象区域の町から避難してきた4人の女性からの話で原発事故のことを知った。彼女たちが泊まる場所がないので、自分の部屋に泊めることにした。夜、テレビで原子力発電所の爆発を見て、全員パニックになった。深夜、消防団の友人(日本人)から、ここも避難したほうがいいという情報を得て、急きょ、会津地方に車で避難した。あるアメリカ人が、放射能対策について非常にヒステリックな情報(窓を開けてはいけない、濡れタオルで口を覆わなければならないなど)をメールで友達全員に送った。そのメールに反論する人も現れ、メール上でたくさんの人が参加してディベートになった。会津地方に住む複数の友人宅に、1週間くらい15人が分散して避難した。その後東京に出て、2週間後帰国した。

(中通り地方男性 欧米)

震災3日後から約1ヶ月東京の友人宅に避難した。たまたま、東京行き的高速バスのチケットを持っていた。東京も物資が不足し、交通も渋滞し、おかしい状態だった。大学から、はやく戻るよう言われたが、同僚と一緒に拒否した。余震が頻発する中、大学がいつ再開されるかわからなかった。前期の授業が全部なくなるという噂が流れ、仕事がなくなって給料がもらえなくなるのではないかと心配した。

(中通り地方男性 欧米)

テレビで避難が必要らしいことを知った。主人は、町が原発から遠く離れているので大丈夫だと言った。地震のことで頭がいっぱいだった。どこに原発があるのかわからなかつ

たし、放射能のこともわからないので不安だった。日本のテレビからの情報だけで判断して、大丈夫だと思っていた。母国の母と電話で話したら、早く避難するように言われた。その時初めて、放射能が危険だと教えられ、インターネットを見るように言われた。親戚も知り合いも県外にいなかったため、どこに避難していいかわからなかった。主人と相談したが、避難しなくても大丈夫と言っていた。母国の大使館から安否確認の電話をもらい、郡山市に迎えのバスが来ることを知らされた。避難したかったが、主人を置いていくわけにはいかないし、ガソリンがなくて集合場所までもいけない。とても迷ったが、大使館の人から今は状況が不透明だからと強く避難を勧められた。主人がガソリンを集めてくれたので、集合場所まで行き、子どもと一緒に東京に避難した。東京で出迎えた人は、防護服のような服を着て、スクリーニングをしないとバスを降りてはいけないと言われた。服を着替えて、着ていた服は全部捨てるようにと言われた。東京にある母国人学校に避難した。10万円弱しか持っていなかったため、無理して帰ったら家族に心配や迷惑をかけると思い、帰国しないことにした。一般の避難所に移ることを勧められ、ホテルの避難所の準備ができるまで学校に滞在しようとしたが、他の人が全員帰国してしまった後は、大使館の人が毎日、様子を見に来てくれることがかえって負担になり、福島に一度帰り主人と相談することにした。今福島に帰ったら、大使館では責任をとれないと言われ、自分の責任で行動するという書類にサインして帰ってきた。母国への飛行機代は、日本人と結婚しているし、通訳の仕事もしている(ボランティアなのに)ので、お金持ちだと思われ、チケット代を当然払うものだと言われた。また、日本国籍の子どもも有料だった。

(中通り地方女性 東南アジア)

高校生の子どもの学校がいつ再開されるかわからず、義母や大学生、専門学校生の子どものもいるので避難しなかった。家も被災しなかったので問題はなかった。母国からたくさん電話をもらった。

(中通り地方女性 東アジア)

屋内退避のことはテレビで知った。放射能の数値や放射能がどのくらい体に影響があるのかを知りたかった。母国の両親は、心配のあまり泣きながら帰ってきて欲しいと言った。でも、最後は私の決心を尊重してくれた。

(中通り地方女性 東南アジア)

町の有線放送で、屋内退避の情報を知った。ヨウ素剤も子どもと妊婦に配られた。町は対応がとても速かった。11日夜、緊急避難。12日、自宅退避。13日、完全防護の服装をして外出するように指示が出た。自宅退避を数日続けたら、精米した米がなくなった。食べ物がなくなったら困ると思い、車で精米所とスーパーに出かけた。スーパーには何もなかった。その後、東京に行き、そこから帰国した。3月27日には戻る予定だったが、両親が心配し、日本に戻ることを許してくれなかった。両親に謝罪して、4月5日に日本に帰ってきた。東京でタクシーに乗った時、福島県から来たと言ったら、タクシーの窓を全開にされた。泊まったホテルでも、ばい菌扱いをされた。地域の人たちとみんなで町づくりをしてきたので、外国人は逃げると後ろ指を指されるようで逃げられなかった。しかし、母国の母は電話で泣きながら帰国を勧める。葛藤が大きかった。最終的には、子どものためを思い、主人が後押しをしてくれたので、帰国を決意した。母国では、母国の人が日本のために一生懸命募金活動をして

いた。その一生懸命さに、母国にいた日本人は申し訳ない気持ちで一杯になり(帰るべき国が困難な状況にあり、外国人がこんなに一生懸命に自分たちのために頑張ってくれているのに、自分は何をしているのだろうと自分を責める気持ち)、ひっそりと日本人であることを隠して、黙って募金に協力する日々だった。生きている気がしないつらい日々だった。日本に戻ってきたら、あの時逃げたと今も陰口を言われている。もう二度と逃げたくない。

(中通り地方女性 東アジア)

屋内退避の情報は行政からはなかった。インターネットで調べて、放射線に対する対策を職場の職員に一斉配信した。16日、2回目に原発が爆発した時、職員に、職場を一旦閉めること、自分の安全を第一に考えて行動するようにとのメールを一斉配信した。家族の安否を確認したくても、国内の携帯電話は繋がらなかった。母国やアメリカからの電話は時々繋がった。他県に住む子どもたちは、事態の深刻さに気付いていなかった。海外では、一番ひどいことしか報道していなかったので、海外にいる家族はとても心配していた。東京に2週間避難した。職場も再開させなければならぬし、職員もいることなので3月末に福島に戻ってきた。

(中通り地方女性 東アジア)

14日の首相の会見をテレビを見て、原発事故のことを知った。とても不安だった。地震だけだったら何とかかなと思ったが、放射能からは避難しなければならないと思った。国外にいる友人や家族からは、夜中まで国外に避難することを勧める電話が来て、落ち着かなかった。ガソリンも食料もなくなった。80km以内は危ないという情報、たくさんの避難者が家の前の国道を通って避

難している状況を見て、主人と一緒に避難することを決意した。屋内退避になったので、もう店を続けられないし店を片づけてもしょうがないと思った。お客さんからガソリンやスーパーの食料品がなくなっていることを聞いた。母国の研修生から、郡山に避難用のバスが来ることを聞いた。インターネットで大使館の情報を見たがあいまいでわからない。市に確認したが、日本の行政は知らなかった。そこで、領事館の連絡ミスではないか、この情報は嘘ではないかと疑った。どうしていいかわからなかった。

(中通り地方女性 東アジア)

3月16日、屋内退避で店も開けられない状況だったので、とりあえず日本人の主人と一緒に市役所に行った。朝9時に市役所に着いて、夕方の4時半に避難用のバスが来た。日本人の夫もバスに乗せてもらえるかと心配したが、席があれば乗せられると言われ、新潟市の体育館に避難した。避難所ではスクリーニングを受けた。避難所は大パニックになっていた。避難地域の町に来たばかりの研修生の通訳をしたり、パスポートを持ってこなかった人も大勢いたので、避難者のリストづくりや通訳をボランティアで2日間休みなく続けた。夫と一緒に母国の実家に避難した。店もあるのでなるべく早く帰りたかったが、実家が帰国を許してくれず、5月15日まで2か月間滞在した。滞在中、家族親戚からたくさんのもてなしを受けたが、心から楽しむ気にはなれなかった。しかし、日本に帰国する日が近づくと、母国の家族と別れがたい気分にもなって複雑な心境だった。店を閉めることに関して、取引先やお客さんに連絡をして、きちんとけじめをつけての避難ではなかったので、その点が一番気がかりだった。母国から主人が、わかる範囲で取引先に電話をして対応した。帰国後、店の片づけと取引先へ

のお詫びの電話をした。長年のお付き合いで、人間関係を強固に築いてきたので、信頼関係は壊れなかった。

(中通り地方女性 東アジア)

夫から外に出ないように教えられた。生まれてくる赤ちゃんのことが一番心配だった。病院で出産したが、普段通りだった。出産後、紙おむつやミルクは県外にいる夫の兄弟が宅配便で送ってくれたので不自由はなかった。震災がなかったら、お産の手伝いに母国の母を呼ぶつもりだったが、放射線が心配だったので呼ばなかった。日本に住むのが怖くなった。しばらく母国に住みたかったが、子どもを出産したばかりだったのでできなかった。昨年11月に一時帰国したが、母一人子一人なので、母はとても心配していた。泣いてばかりいた。今は、9歳の長男を母国の母に預けている。いずれ、息子と母を日本に呼んで一緒に暮らしたい。夫がかわいそうだから、夫を一人置いて、母国に避難しては行けない。

(中通り地方女性 東南アジア)

屋内退避はテレビで知った。健康のこと、子どものことが心配だった。最初は避難したほうが良いと思ったが、月に1度通院しなければならない病気の子どもを連れて母国に帰るわけにはいかなかった。また、夫をおいて避難することもできなかった。母国の家族はとても心配した。

(中通り地方女性 東南アジア)

屋内退避のことはテレビで聞いた。大使館からの避難指示は同国人の友人から聞いた。地震で住んでいたアパートが住めなくなったので、民間のアパートを借りた。家賃が高くて大変だった。自分が経営するお店に来るお

客さんは、みんな優しくかった。心配して、いろいろな情報をくれた。自分の国に帰らなかったことはすごいねと褒められた。

(中通り地方女性 東南アジア)

日本語がわかる家族(息子)がテレビで見せて教えてくれた。3月15日、家族全員で東京に車で避難した。新潟県から母国に避難する人のための飛行機が出ていることを友人から電話をもらって知ったので、2台の車に分乗して家族7人で新潟県の避難所に行った。もう一人の息子は東京在住だったので、成田から飛行機で帰った。新潟県の避難所での食事は問題なかったが、生後1か月の新生児がいたので、集団感染を恐れて、避難所には入らず、駐車場の車の中で寝泊まりした。1か月の乳児はパスポートを持っていなかったなので、パスポートが発行されるまで4日間車の中で生活して待った。空港の駐車場に約2週間車を置いたまま避難していたので、日本に戻ってきたとき、駐車料金の支払いが大変だった。避難して、車の中で生活していたので、お金が一杯かかった。4月初めに夫と二人で日本に帰ってきた。子どもとお嫁さんは今も母国に住んでいる。息子も日本に戻り、仕事をしている。もう一人の息子は、仕事を辞めて、家族で母国に住んでいる。

(中通り地方女性 東アジア)

余震が怖かったので、13日に高速バスのチケットを取り、東京に移動した。大学院生の仲間8人で行った。大使館が、東北に住む同国人に向けて避難のための航空チケットを安く販売していることを、友だちから教えられた。しかし、実際に何が起きて何が危険なのかわからず、漠然と何かあったらしくしかわからなかったの

で、緊張していた。東京に住む友人は、13日にはすでに帰国していた。帰国した友人のアパートに1週間住んでいた。東京で、テレビを見て初めて何が起きたかを理解した。日本の新聞は、母国のメディアより情報が遅かったし信頼性が薄かった。母国の情報を信じた。政府の情報の発表の問題だと思う。パスポートを大学に置いてきてしまったので、新しいパスポートを発行してもらうまで時間がかかり、3月中頃に成田から母国に帰国した。東京では、普段通り食料を買うことができた。5月、学校の再開と同時に日本に帰ってきた。父は母国に留まることを希望した。8月に埼玉県に引っ越しし、夜行バスで週に1回大学に通う日々を1年間過ごした。生活費、交通費がかさみ、アルバイトの毎日だった。23時までアルバイトをし、そのまま夜行バスで来て、1日授業を受けて、また、夜行バスで埼玉に帰る生活だった。

(中通り地方男性 東アジア)

心細いので、友だちの部屋で一緒に泊まっていたら、その友だちに電話が来て、原発が爆発したから危険だと知らされた。その友達の恋人の実家に一緒に避難することになった。男女5人で避難した。13日は隣接県の友だちの実家に、14日から4日間はその友達の家族が所有する別荘に5人で避難した。電気も水道もなかったので、近くのスーパーで必要なものを買おうとしたが、十分には売っていなかった。別荘の隣にある体育館の管理人さんが親切にしてくれた。トイレを借りて、携帯を充電させてもらっていた。母国に帰るのが一番安全だと思ったが、成田も関空もチケットはすべて売り切れで手に入らなかった。大使館にも問い合わせたが、大使館も混乱していて電話が途中で切れ、必要な情報は手に入らなかった。父の知り合いに航空会社の機長がいたの

で、帰国の便宜を図ってもらうために友だち2人と関空に行くことにした。ガソリンがなかったので、車が動かせず、タクシーで別荘から駅に行った。朝4時ごろにもかかわらず、長距離バスは長蛇の列ができており、乗れるかどうか心配だった。幸運なことに、この日からバスが増便されたので乗ることができた。地震の前に大きな出費をしたので、口座にお金がなく、母国からの送金を待ったが、震災の影響で送金が滞ってお金がおろせなくなった。友だちのクレジットカードも操作ミスで使えなくなり、飛行機の座席を予約できてもチケットが買えなかったので人に譲らざるを得なかった。テレビで津波の映像を見て、母国では中通り地方にも津波の被害があったと思われていた。原発事故があったので、すぐに帰国するように母に言われた。領事館が用意した新潟空港からのチャーター便の情報は全く知らなかった。知り合いはみんな関西空港に向かった。日本へ戻ることを親戚はみんな反対したが、自分と両親は戻ることに決めた。

(中通り地方女性 東アジア)

地震の翌日、友だちと合流し自宅に戻った。テレビをつけっぱなしにしていた。日本の政府を信じていたので、日本のニュースしか見なかった。インターネットで母国のニュースも見ようとは思いつかなかった。今考えるとなぜだかわからないが、IP電話で母から、「大変なことが起きているから、早く帰国するように」と言われたが、それをインターネットで自分で確認しようとは全く思わなかった。里帰りして帰ってきたばかりだったので、食べ物と水は家にたくさんあった。母国での報道は、放射能のことばかりだった。母国の母が心配して、早く帰るように説得してきたので、帰国することにしたが、避難にあたって、領事館は安否の確認をして、あとは直接空港に行くように指示しただけだっ

た。空港に行くために、ガソリンを4時間待ちで満タン購入し空港に向かった。航空券を入手することが日本では難しかったので、航空会社と直接交渉して入手した。今考えると、母の忠告に従って迅速に行動して帰国したことは本当によかったと思う。また、避難のとき、現金があったのが良かった。逃げるための最低限のお金は準備しておくべきだと思う。また、懐中電灯も用意しておくようになった。母国の空港に降りたら、報道陣の取材を受けた。日本の状況を伝える証人として扱われたが、報道陣が求めることは話せなかった。母国では、被曝者扱いをされたので、より詳しい検査をしようかとも思ったが、研究材料にされるようではいやなので検査は止めた。

(中通り地方女性 東アジア)

原発事故はテレビのニュースで知った。3月11日の夜、原発が不安定だというニュースを見たが、情報不足でよくわからなかった。それまでは、2、3日の休暇を楽しむ気分だったが、寝て起きたら、水素爆発のニュースをやっていたので、避難することになった。近くのスーパーマーケットは営業していたが、日に日に商品がなくなっていった怖くなった。母国大使館のバスが来ると聞いていたので、他国の人たちとは行動を共にしなかった。しかし、母国の父から、母国大使館は無策だから、頼らず避難するようにアドバイスされ、日本人の友だちの家族と一緒に避難した。途中、新潟で降りてもらい、新幹線で成田に向かって帰国した。

(中通り地方男性 東南アジア)

同国人の友人から、新潟行の避難用のバスが出ることを聞き、急いでバスに乗って新潟に行った。夫は仕事に行っていて連絡で

きなかったので、新潟についてから「これから母国に行きます」と連絡をした。夫に相談せず、友だちと二人で帰国し、自分の姉のところへ避難したが、姉の家も狭いので、居づらくなって早めに日本に帰った。

(中通り地方女性 東アジア)

大使館から避難のバスの情報を受けて、周辺の同国人に連絡をした。電話をしたが、電話がつながらず、同国人が多く住む団地の近くの避難所に向いて、直接知らせた。バスに乗車を希望する同国人が殺到し、パニックになった。大使館職員が到着するまで、自分が人の整理をした。子どもと一緒に避難用のバスで新潟に避難したが、同国人用の避難所では、マナーが日本では受け入れられないものも多く、問題があったと思う。子どもと相談して、帰国せず戻ってきた。

(中通り地方女性 東アジア)

IV

テレビ、インターネットで事故を知った。健康のことが一番心配。娘の健康が心配。大使館に避難用のバスを出してほしいとお願いの電話をした。バスが来ることになって、近所の同国人に電話で知らせた。3月14日、バスに乗って東京の教会に娘と2週間避難して教会や大使館の人から支援を受けた。夫と息子は残って働いていたので、家族がバラバラになってしまった。早く戻りたかった。避難生活は不安で疲れた。母国には帰らず、東京で食べ物を買って戻ってきた。帰っても母国では仕事がない。震災後、嫌なことはなかったが、不安でとても疲れた。

(中通り地方女性 東南アジア)

事故のことはテレビで知った。ママ友からチェーンメールがたくさん来た。正しい情報かどうかの判断がつかなかった。母国の

家族からも早く避難するように何度も夜中にも電話があった。母国の方が情報がたくさんあった。情報がたくさんあって判断が難しかった。不安と恐怖があって、そのプレッシャーは尋常ではなかった。大使館が用意したバスが白河からであることを教えてもらったが、最初は避難しないと判断した。理由は幼い子どもが避難所での生活に耐えられないと判断したから。何があっても家族と一緒に状況を受け止めようと覚悟をした。また、自分からはバスの情報を発信しなかった。理由はバスに乗って避難することが、本当にその人にとって良いことか判断できなかったから。不安を煽り混乱をもたらすのではないかと心配した。しかし、同国人を引率して避難してほしいと大使館の人に言われ、1週間後に、最後のバスに乗って避難した。夫からも避難を勧められ、母国にいる自分の両親を安心させるため、子どもの将来の健康のため、夫が家族の心配をせずに仕事に専念できるようにするため避難することを決意した。自分たちだけ避難することは、残る家族に申し訳ないと思った。二度と戻れないかもしれないという覚悟で家を出た。母国の実家に半年間避難した。小学校入学の時期だった子どもは現地の小学校に入れることは難しかった。日本から限られた情報しか入らず、夫が迎えに来てくれるのを待っていたら、長期の避難になった。結果として、子どもたちにとっては母国の文化を体験する機会となり、その点は良かったが、日本に帰国して、日本の学校になじむのに1年以上かかった。

(中通り地方女性 東アジア)

携帯のワンセグテレビを見たり友だちの日本人から聞いて事故のことを知った。放射線は見えない。わからない怖さがある。将来のことも心配。東京に避難しようと思ったが、みんな一緒に関西の友だちのところ

に避難した。福島空港から最後の大阪行に乗って避難したが、他県に住む年配の同国人がチケットを譲ってくれてお金も貸してくれた。福島が落ち着くのを待っていたが、なかなか好転しないので、1週間後帰国した。帰国のチケットを取るのも難しかった。母国ではインターネットテレビで日本の状況をチェックしていた。日本にも電話して情報を集めた。5月になって日本に帰ってきた。

(中通り地方女性 東南アジア)

爆発の意味が分からなかった。母国の家族から、国際電話で状況を詳しく教えてもらった。母国の家族から、電話で郡山から避難用のバスが出ていることを知らされた。遅ればせながら日本のニュースでも、放射能の危険性を伝えるようになったので、夫と相談し、子どもが心配だから避難することにした。娘と3か月、母国に避難した。母国の幼稚園にも入り、習慣にもなじんだ。自分は正社員なので、会社に迷惑をかけないためにも、バスを1日遅らせて、社長に避難のための休暇を申し出た。社長は快く許可してくれた。許可をもらわずに行ってしまうことは失礼だし、人間関係に悪い影響を及ぼす。会社に正式な手続きを取って避難したので、日本に帰っても温かく迎えられ、仕事を続けられている。周りの日本人はみんな優しい。

(中通り地方女性 東アジア)

家族の健康が一番心配だった。3月15日に帰国予定だったので、3月13日の朝、早めに成田に向かって出発した。原発の爆発については移動中のラジオで知った。途中、ホテルに1泊して3月15日予定通り帰国した。一人母国に帰ることに罪悪感を感じながら帰国した。息子の家族はそのまま母国に避

難し続けることになり、生活設計が狂ってしまった。自分の勤務地が関西になったので、一人日本に戻ってきた。慣れない関西での暮らしや、家族と離れての一人暮らしにとっても疲れた。

(中通り地方女性 東アジア)

3月13日、成田から帰国予定だった。高速道路が閉鎖され、一般道もかなり壊れていた。車で成田まで行けるのかわからず出発を躊躇していた。しかし、家で待っていてもしょうがないので、車の中で寝泊まりができるように毛布をたくさん積んで13日に成田に向かって出発した。空港はどうなっているのか、飛行機は飛ぶのか、成田までの一般道は通行できるのかななどの情報が欲しかったが、何も得られないまま、カーナビを頼りに9時間かけて成田に着いた。予約していた飛行機には乗り遅れたが、帰国パニックが始まる前だったので、航空会社と交渉して、飛行機の便を変更してもらい翌日帰国した。もう一日行動が遅かったら、帰国はもっと困難になっていた。早く行動してよかった。自分は、チケットを購入していたので、容易に帰国できたが、福島県外に住む同国人の帰国パニックが始まってからは、航空券の値段が跳ね上がって通常の2倍以上になり、中には100万円という値もついた。

(中通り地方男性 東アジア)

原発事故の恐ろしさ、健康への影響がわからなかった。その情報が手に入るまでは、屋外に出ていた。放射能の恐ろしさを知りようになり、怖くなった。大家さんから避難したほうが良いとアドバイスを受け、大家さんと一緒に避難した。隣接県で2日間過ごし、妻の実家のある北海道に行こうとしたがチケットが取れず、自分の姪の嫁ぎ先の九州に

行った。大使館からは、東京に避難するように指示を受けたが、自力で避難したので行かなかった。勤め先から連絡があり、勤務地が大阪になったことを知らされ、6か月間、大阪で勤務した。仕事が無くなったら、人生が変わってしまうので、将来への不安が大きかった。九州に住む妹には、早く帰国してと言われていたが、最近はあまり言われなくなった。少し大丈夫だと納得したらしい。戻ってきて、なるべく放射能の低いところのアパートに住むことにした。この辺に住んでいる人はみんなストレスを感じていると思う。以前と比べて顔の表情が硬い。新しいアパートに引っ越した時、あいさつをして回ったが、そういった挨拶もしないで引っ越していってしまう日本人もいて悲しい。

(中通り地方男性 東南アジア)

看護師なので、放射能に対する基本的な知識は持っていた。日本語がわからない人は、災害時に言葉のわかる人以上に不安を感じる。また、母国には避難所というシステムがないので、同国人は避難所の利用方法を知らない人も多かったのではないかな。

(中通り地方女性 東アジア)

避難したほうがよいということは、教会関係者の方から聞いた。家から出ない方がいいことは、ラジオで聞いた。とにかく、ガソリンがなくて動きが取れなくて困った。地震で窓ガラスが壊れたので、窓を閉め切ることができず、放射性物質が室内に入ってくるのが心配だった。

(中通り地方男性 東アジア)

屋内退避はテレビ、車のラジオで聞いた。3月17日の最後のバスで新潟の避難所に行った。避難所の体育館では、食べ物は配ら

れたが少なかった。毛布をもらったので寒くはなかった。娘も帰国させたかったが、本人が行かないと言ったので日本に残した。自分は日本国籍を取っているのでも、帰国するのはいちばん後回しになった。娘の高校の入学式があったので、4月10日には日本に帰ってきた。母国は人も多し、うるさいし、早く日本に帰って来たかった。日本人は、帰ってきたとき「よく帰ってきたね」とやさしく迎えてくれた。

(中通り地方女性 東アジア)

屋内退避はテレビで知った。外国の情報と日本の情報が違っていて混乱した。妹は外国の情報を信じなさいと言ったが、自分は、日本政府は日本国民を守るために正確な情報を流していると信じていた。今となっては、妹の言うことの方が正しかったと思う。学校の生徒の数が少ないので、自分の子どもだけ避難すると、卒業式も満足にできなくなってしまう。卒業する子どもたちをみんなで祝ってあげたかったので、避難せずに学校の指示を待った。居場所を学校に知らせて、各自の判断で避難するようにと学校の指示が出たので、隣接県の親せきの家に避難した。卒業式は4月に行った。

(中通り地方女性 東アジア)

母国に帰るという選択もできる自分は幸せだ。でも、日本人はどこにも行けず不幸だと思った。だから、彼らを助けるために、自分も日本に残りたいと思った。家族から帰国するように促されたが、家族を説得して日本に残った。

(中通り地方男性 欧米)

事故のことはテレビのニュースで知った。爆発はわかったが、放射線は見えないし、ど

うということかわからなかった。その後、日本のニュースを見たり、本を読んだりして放射能のことが分かるようになり怖さが増し心配が増えた。領事館のバスで、息子と二人で隣接県の避難所に避難した。避難所で小さい子どもの面倒を見たり、ボランティア活動に参加した。3月15日に息子と二人で帰国した。他の家族は、日本に残ることを選択した。40日間避難し日本に帰ってきたが、避難中は息子の学校のことが心配だった。2週間、母国の学校に通わせた。一体どこにいれば良いのかわからなくて悩んだ。

(中通り地方女性 東アジア)

市役所の車が、屋内退避のアナウンスをしていたので、原発事故がわかった。水や食べ物が確保できるか心配だった。3日後、他県に住む夫の兄のところに車で避難したが、ガソリンがぎりぎりだった。1週間避難して、戻ってきた。家族一緒がいい。義母はパスポートを持っていなかったで、母国にみんなで避難することは考えなかった。今は義母の分もパスポートをつくった。母国の家族はなるべく帰ってきてほしいと思っているが、日本の家族もあるから日本を離れられない。

(中通り地方女性 東アジア)

海外メディアは、数字を挙げて事態を日本メディアより深刻に伝えていた。80km圏内の人は早く避難するように言っていた。会津地方は100km離れているので、微妙な距離で不安だった。自分は会津を早く出たかったが、妻は会津に住む家族を置いて自分一人が避難することはできないと考え、会津を出ないと言っていた。それで自分も会津に残った。避難する人々で49号線は非常に混んでいた。中通りの人が避難し、本当に避難しなければならぬ状況になったら、自分たちも避難し

ようと思ったが、そうなった場合、どこにも逃げ場所はないと思った。外国にいる家族や友人は、みんな早く避難するように言ってきた。日本政府はパニックを恐れて、中通りは安全だと言っていた。それを信じて私は会津に残った。日本政府が安全だと言っていたことを信じた。

(会津地方男性 欧米)

屋内退避のことはテレビで見た。原発事故のことは、息子がインターネットの日本のサイトで調べて、教えてくれた。外に出ないようにした。帰国しようかと思ったが、子どもは行きたくないと言ったので行かなかった。海外に単身赴任中の夫からは、赴任先に避難してくるようにと連絡が入ったが行きたくなかった。お店のお客さんとの人間関係は恵まれている。会津では、外国人が「逃げた」といって非難されることはなかった。

(会津地方女性 東南アジア)

母国の大使館に電話で問い合わせたが詳しいことはわからなかった。市国際交流協会や友だちから、避難用のバスに乗れることを教えてもらった。避難用のバスに乗って新潟まで行ったが、帰国する順番が子どもがいる人やお年寄り優先だったので、子どももいないし日本国籍の自分はいちばん最後になるとわかり、避難所に1泊だけして戻ってきた。避難所は母国人用の避難所だったが、人が一杯で、ストレスが一杯で、みんなパニックになり大騒ぎになっていた。母国人同士、泣いたり喧嘩したりで避難所にいるのが嫌になった。主人は母国に避難することを理解してくれたが、そうすることは日本の家族を捨てることになると感じて帰国しなかった。母国に住む両親は、風評でパニックになっていた。心配のあまり、一度でいいから帰ってきて、顔を見せて

ほしいと言われた。4月になってから、甥の結婚式に参加するためと、国の家族に無事な姿を見せるために帰った。平成24年に母国から父が来て、暮らしぶりを見て安心して帰った。

(会津地方女性 東アジア)

地震発生翌日、職場に片付けの手伝いを申し出たが、必要ないといわれ、自宅の片づけをしていた。日本語ができないので、近所の人と話をすることもなく家にいたが、一人でいることは寂しかったので、より安全な会津地方の友人の家に避難した。インターネットで原発事故の情報はたくさん入ったが、日本のメディアの報道と、外国からの情報が違っていて混乱した。その後新潟経由で東京に出て帰国した。春休みで仕事もなかったので、何も考えずに移動した。帰国中も職場とメールで連絡を取っていた。1ヵ月後に職場が始まるのにあわせて、再来日した。仕事もあるし日本が好きだから日本に戻ってきた。その話をするとみんなからは感謝される。帰国したことを直接非難されたことはないが、日本人や福島にとどまった外国人の中には、帰国した外国人を「Flyjin (飛んでいく人)」と呼び、悪口を言う人もいる。

(会津地方男性 欧米)

原発の事故のことはテレビで知った。翌日も普通に会社に出勤したが、道路が壊れて通れないのと、ガソリンがなくて材料が入って来ないので、以後2、3週間会社が休みになった。60%の休業補償をもらった。当初は、原発が何か、何が危ないのか、どのくらい危ないのか全く分からなかった。何かを知りたいと思い、人に聞くほど状況がわからなくなった。これからどうしたらいいのか悩んだが、その後テレビを見てだん

だん状況がわかるようになり、子どものこと食事や水のことが心配になった。ガソリンがなく学校に連れていけなかったので、1週間子どもは学校を休んだ。子どもと二人、家にじっとしているしかなかった。地震直後、母国の家族と連絡が取れなくなった。家族は心配していたが、ガソリンがなく、国際電話用のテレホンカードを買いに行くこともできず、4月になってやっと家族に連絡をすることができた。

(会津地方女性 東南アジア)

3月15日、母国の全国放送のテレビで、福島からの避難勧告が出されたことが報道された。同僚が領事館に確認し、避難用のバスが来ることを知らされた。15日、バスで新潟の避難所に避難し、数日後帰国した。避難所では同国人がまとまっていたので、大きなトラブルはなかった。家族の反対もあって、日本に帰ってくるのが5月13日になってしまった。仕事があったので、早く帰ってきたかった。母国では、原発事故の様子をテレビでリアルタイムに放送していた。店を再開したとき、「逃げた」と非難する日本人もいた。

(会津地方男性 東アジア)

原発の爆発のことはテレビや夫から聞いた。夫の仕事があるので避難できなかった。3月14日福島空港から里帰りする予定だったが、空港が閉鎖され帰れなくなった。母国の家族は、心配して帰ってくるようにと言った。知り合いの同国人は、ほとんど帰った。完全に日本を引き払って戻ってこない人もいる。

(会津地方女性 東アジア)

大使館から避難指示を受けた。自分が住む町と東京など他の都市の放射線レベルが知

りたかった。ここは安全だと思ったので避難しなかった。プレッシャーを感じた。

(会津地方男性 東南アジア)

(3) 将来への不安

地震にナーバスになっている。少しの揺れや物音に敏感に反応してしまう。一緒に働く人も、冷静さを保っているが内心は穏やかではないと思う。抑えている心が抑えきれなくなる時が心配。

(避難対象地域女性 欧米)

経営していた店舗が避難区域内にあるため休業中。将来どこに住むのか見通しがたたないので、時間が無駄に過ぎていくと感じられてしょうがない。仕事を休業しているので不安。一人でも生きていくしかない。しょうがないと思って乗り越えたいが、何に対しても意欲が持てない。

(避難対象地域女性 東アジア)

家に戻れるかが心配です。東電からの賠償金が終わってしまうことが心配です。仮設住宅に住める期間が終了してしまったらどうしよう。

(避難対象地域女性 東アジア)

アパートが古いので、アパートの耐震性がとても心配。引っ越したいが、ここではアパートの需要が高く、適当なアパートを見つけて引っ越すことが困難。飲み水が心配。東電の賠償請求の手続きを夫がしてくれない。

(浜通り地方女性 東南アジア)

原発の爆発後何の情報も得られなかった。本当に避難したほうがいいときにどうやって避難するのかわからない。

(浜通り地方女性 東南アジア)

いちばんの心配は、日常生活における放射能の影響(食べ物や飲み物)。震災後、たくさんあった原発のニュースが、今はまったく見られない。原発に関する情報がない。将来原発は大丈夫なのか心配だ。また、日本政府は真実を発表しているのかも疑わしく気になる。被災した人は今後どうなるのか心配。子どもたちの様子も震災前と微妙に違う。子どもたちの心が心配だ。

(浜通り地方女性 欧米)

いつでも避難できるように心とお金の準備をしている。環境放射線は今までもあったし、遠いところの野菜をたまに食べて調整している。子どもの健康が心配。来年留学させる予定。

(浜通り地方女性 東南アジア)

余震がいちばん不安。原発も不安。パスポートを常に持ち歩いている。

(浜通り地方女性 欧米)

将来、自分や子どもの健康がどうなるのかわからないことがいちばんの心配。ずっとここで暮らしていることが正しいことなのかかわからなく、不安。子どもに責任を感じる。ここから出ることもできるのに、どうして出なかったのか責められるのではないかと思う。

(中通り地方女性 東南アジア)

家のローンをどうしよう。ローンがあるので避難もできない。物が売れないし人が来ない。仕事にならない。政府が情報を隠すことが不安。母国のニュースをいつも見ているが、日本は情報を隠す。ネットのニュースが本当なのか、テレビのニュースも本当のことを言ってくれない。母国のニュースと日本のニュースが違う。原発の爆発の情報も日本より10分早かった。緊急事態に間に合わない。情報を正直に早く出してほしい。

(中通り地方女性 東アジア)

福島県に住んでいるが、このままで本当に大丈夫かと心配している。その理由は、放射線の情報はあるが放射線の線量計が本当に正確な数値を示しているのか、流れてくる情報が正確なのかどうか分からないからだ。マスコミでいろいろな情報が流れているが、どれが正確でどれが間違っているのかわからないので不安だ。小さい孫たちがいるので福島に戻ってきて大丈夫なのか知りたい。

(中通り地方女性 東アジア)

自分がどのくらい被曝しているのか、健康への影響、将来妊娠した時の子どもへの影響などが心配。

(中通り地方女性 東南アジア)

地震の揺れに敏感になった。大きな揺れがまた来るのではないかと心配。原発があるし、安心できないが、祈るしかない。福島での生活に慣れてしまっているので、今後なるべく福島で生活したい。去年は仕事が減ってどうしようかと思ったが、今は回復した。会社の人たち(日本人の社長や友達)が相談相手になってくれる。周りの日本人は親切にしてくれる。

(中通り地方女性 東アジア)

スーパーの食品に含まれている放射能の数値を明記してほしい。より安心して食べられるようにしてほしい。東電の杜撰な管理体制を見ていると、原発事故が再び起きるのではないかという危惧がある。二度と元の空気や環境に戻れないことを思うと残念でならない。

(中通り地方女性 東アジア)

震災直後、母国の家族と連絡が取れなくなったのがつらかった。また地震が起きるのではないかと心配している。

(中通り地方女性 東アジア)

景気が良くなってお店にお客さんが来るようになってほしい。日本は社会保障が充実しているので、万が一仕事が無くなったとしてもそれほどは心配していない。原発のことが心配。娘の健康のことが心配。

(中通り地方女性 東アジア)

日本語のできる家族(子ども)と一緒にないと何も情報を得ることができない。日本語ができないと、周りの社会と接点がない。万が一の時、家族がいなかったりすると非常に困難な状態になる。情報発信がとても重要だと思う。また、顔を合わせて生活相談ができる場が欲しい。そのような拠点と人の配置が必要だと思う。

(中通り地方女性 東アジア)

大きな地震がまた来るのではないかと心配している。

(中通り地方女性 東アジア)

放射線のことが気になる。食べ物のことも気になる。スーパーで売っているものが安全なのか、福島産の食べ物が気になり、大丈夫かどうかわからない。一方、福島県の農業者がかわいそうにもなる。

(中通り地方女性 東南アジア)

県の人口が減ることが心配。特に若い人の流出が止まらない。人が減ると商売が成り立たなくなる。政府の施策に期待する。放射能の問題は、福島県で買った車を輸出するときのリスクが高くなり、商売に大きなダメージを与えている。

(中通り地方男性 東南アジア)

子どもの健康への影響が心配。WBC(ホール・ボディ・カウンター)を定期的に継続してやってほしい。自分たちがどのくらい被曝しているかわからないこと、食べ物が安心か、ずっと食べ続けても大丈夫なのかわからないことが一番の不安。県内産は食べないようにしている。

(中通り地方女性 東アジア)

放射能のことが心配。子どもが学校で勉強についていけないのか、母が外国出身だからと言っていじめられないか心配。

(中通り地方女性 東アジア)

子どもたちの将来が心配。健康や学校生活が心配。

(中通り地方女性 東アジア)

地震の後、ドキドキして眠れなくなり、1か月ほど心臓の動悸を抑える薬を服用していた。揺れていないのに、常に揺れているよ

うな感覚があった。大きな物音に過敏に反応するようになった。食べ物のことが心配だった。

(中通り地方女性 東アジア)

日本の国家が不安定に感じる。首相の任期が短すぎ。外国人に対する行政からの通知が不足している。消費税が高くなるにつれて、ますます不安定になる雇用状態。最近アルバイトなのにサービス残業が存在するあり様。福祉の充実とは理想ばかりで、現実から遠のくばかり。不況が犯罪を招くのではないかという将来に対しての不安がある。

(中通り地方女性 東アジア)

放射能の危険について専門家の見解が違う。どの意見が信じられるのか知りたい。むしろ将来の健康について心配している。食べ物(野菜や魚)が安全なのかが心配。日本にいれば、放射能の影響で病気になったとき先進の治療を受けられるが、帰国したらそうはいかないので、帰国後が心配。

(中通り地方男性 東南アジア)

緊急地震速報を充実させてほしい。夜寝る時が心配。心臓に持病がある子供の将来が心配。健康になって欲しい。地震と放射線と仕事(お金)がないことがストレス。医療費が無料でよかった。

(中通り地方女性 東南アジア)

子どもの健康が心配。赤ちゃんと家族の健康が一番心配。ものすごいホームシックを感じている。今も帰って暮らしたいと思っている。ストレスですごいアレルギーが出た。赤ちゃんがいるし、日本語がわからないし、車も運転できないのでどこにも出かけ

られないストレスは大きい。子どもが小さいので、子どもと二人、毎日家にいるだけ。

(中通り地方女性 東南アジア)

今住んでいるところの放射線が高いことを知らずに、娘と車の中で3月16日まで過ごした。母国から避難を勧める電話が何十回とかかってきて、娘も避難しようと言っていた。しかし、私が日本国を信じて、避難することを強く反対したので娘もあきらめて日本と一緒にいることになった。今、当時を振り返ると娘に申し訳ない気持ちで心が苦しい。18歳未満だけじゃなくこれから結婚する若い人たちの健康のことも考えて(医療費の)補償をしてほしい。

(中通り地方女性 東アジア)

食べ物は安全ですか？体の健康は大丈夫ですか？放射線はどのくらいあって安全でしょうか？空間線量の数字が発表され続けるので、かえって心配。放射線の知識が少ないので、何が心配なのかもわからない。

(会津地方女性 東南アジア)

自分の食べるものについて少し心配している。購入して利用できる福島の食べ物が、すべて食べて安全なのか、食品の放射能値が普通のレベルなのか、それとも法的に認められている限度まで上昇しているのか、食品中の放射能にはそれぞれ種類ごとに制限値があるのか、そして、この制限値は3.11以降に変わったのか、どれくらいの人が現在避難所で生活し、それはどこにあるのか。

(会津地方男性 欧米)

放射線の最低限の数字ではなく、正確な測定値を教えてください。放射線に被曝したら

どのような病気になるのか(甲状腺の問題など)詳しく教えてください。

(会津地方男性 欧米)

日本での暮らしは大好きだが、地震だけはいやだ。地震がまた来るのではないかと心配している。

(会津地方女性 東アジア)

自分の町の放射能値については心配していないが、他の高レベルの場所については心配している。

(会津地方男性 欧米)

(4) 情報収集の状況

12日、勤務地である中学校に行く途中、避難している人から情報を得ようと聞いてみたが、「どこに避難しているのですか」という質問に対して、「あっち」という答えしか返って来なかったため、途方に暮れた。

(避難対象地域女性 欧米)

携帯電話で母国の家族から情報をもたらした。地震直後、みんな混乱していて、何も教えてもらえなかった。原発の被災情報が欲しかった。

(避難対象地域女性 欧米)

車のラジオを聞いた。原発のことは考えてもいなかった。余震で家が壊れるのではないかとだけ心配していた。停電していたので、何の情報も入らず、夜、子どもの携帯でテレビを見て初めて津波のことを知った。

(避難対象地域女性 東南アジア)

facebookは家族間で使用した。震災時、facebookで友達が外国に住む家族に自分の安否を知らせてくれた。ワンセグテレビを見た。自分は日本人だと思っているから、外国人よりも地元の人から情報を得て行動した。

(浜通り地方男性 東南アジア)

日本語が分からなかったので日本のメディアは見なかった。日本語が分からなかったので、何の情報も得られなかった。原発事故の映像はテレビで見たが、何の事だかわからなかった。母国の友だちから携帯電話で情報もらった。母国語での情報が欲しかった。何も情報が得られないので、仙台の領事館に電話をして問い合わせた。原発事故があって、危険だということは、母国からの電話で知った。日本語ができないからラジオは聞かない。

(浜通り地方女性 東アジア)

水と電気は大丈夫だったがインターネットはつながらなかった。ラジオは持っていない。ラジオは映像がないので、わからない。普段から聞かない。

(浜通り地方女性 欧米)

何が起きているのか、何が危険なのか、全く分からなかった。テレビからは、日本語がわからないので情報は得られなかった。電気が回復して、インターネットで自分で情報が取れるようになって、初めて原子力発電所の爆発など深刻な事態になっていることを知り、驚愕した。日本語がわからないのでラジオは聞かない。

(浜通り地方男性 欧米)

ラジオは日本語がわからないので聞かない。生活に必要な情報、水はどこでもらえるか、どこに避難すればいいのかなどが知りたかった。

(浜通り地方男性 東アジア)

多言語の情報が少なく、テレビやラジオ等全ての情報は日本語だったので、よく分からなかった。外国出身者のため、多言語の最新情報ももらいたかった。近所の人でもテレビからの限られた情報しか得ておらず、あまり情報が伝わらなかった。また、地震後電話とインターネットが繋がらなかったので、友人と同僚と連絡を取れなかった。近所に住んでいる人に聞いてみたが、原発について何も情報を得られなかった。主人の同僚と友人から情報が入ってきて、やっと原発のことが分かった。近所の人に何か新しい情報が入ったら、是非教えてもらいたいと伝えたが、彼らは何も言わずに避難してしまった。

(浜通り地方女性 東南アジア)

ラジオは聞かない。この先何が起きるのか、どうすればいいのかわかりたかった。日本人の友人から、避難所の場所などたくさんの情報をもらいありがたかったが、母国に帰ることで精一杯だった。チケットが取れるのか、福島空港までたどり着けるのか、飛行機が飛ぶのかなど。空港で1泊した。空港はキャンセル待ちの人で一杯だった。そこにいる多くの日本人と情報交換をした。サバイバル状態だった。

(中通り地方女性 東アジア)

以前、福島県国際交流協会のGyroもらったことがあるが、協会のホームページを知らなかった。知っていたら、震災時、アクセスして情報を取れたろう。同国人同士お互

いに連絡を取ろうとしたが、電話が繋がらず、うまくいかなかった。もっと早く、政府から情報を提供してほしいかった。アパートの大家さんがいろいろなことを教えてくれた。ラジオも聞いた。テレビとラジオを聞いたが、必要な情報はあまり手に入らなかった。原発の事故で屋外に出ない方がいいという情報はキャッチできなかった。

(中通り地方男性 東南アジア)

ラジオは聞かない。当時、津波の報道ばかりで、空港の情報(空港が使えるのか、飛行機は飛ぶのか)、道路情報(どの高速は使えて、一般道は通行可能か)を手に入れることが困難だった。空港や航空会社に電話をしても通じなかった。災害時に交通情報を伝えることも重要だと思う。道路情報が何も無いとき、カーナビはとても有効だった。友人にもカーナビの購入を勧めた。

(中通り地方男性 東アジア)

テレビやラジオをつけていたが、有効な情報は得られなかった。戸外に出ないようにという情報は知らなかった。ただし、自分の判断でなるべく外に出ないようにした。

(中通り地方女性 東アジア)

テレビを見ていた。安全な場所がどこか知りたかった。普段ラジオを聞く習慣はないが、車の中にいるときはずっとラジオを聞いていてそこからの情報は役に立った。

(中通り地方女性 東アジア)

テレビから情報を得た。ラジオを聞くチャンスがあまりない。領事館のバスの情報は、母国に住む兄が国際電話で知らせてくれた。避難用のバスのことは、日本のニュー

スでは報道していなかった。日本のニュースだけを見ていた人はわからなかった。これは大きな問題だと思う。バスの情報は、自分から同国人に伝えた。

(中通り地方女性 東アジア)

原発からの避難を呼びかけるチェーンメールが流れていたがあまり開かなかった。ラジオは毎日つけっぱなしで聞いた。

(中通り地方女性 東アジア)

大使館に放射能からの避難で何をしてくれるのかを問い合わせた。日本のメディアと外国のメディアでどちらの報道が正しいのかわからなくて困った。近所の人たち、職場の仲間、宗教関係の人は役に立つ情報を持っていなかった。

(中通り地方男性 東南アジア)

同国人コミュニティに情報が来たが、そこから先、情報を得られた人と得られなかった人がいた。支援物資をもらえたか、もらえなかったかだけが話題になっていて、有効な情報はなかった。給水情報は広報車から、その他はテレビから情報を得た。ラジオを聞いて情報を得る習慣がない。ラジオは車で音楽を聞くくらいしか利用しなかった。同居の舅がラジオを聞いてそこからの情報を教えてくれた。主人の安否や自分の家のことが一番心配だった。何が起きたのか、地震の詳しい状況を知りたかった。自分の恐怖を抑えることで精いっぱいだった。

(中通り地方女性 東アジア)

震災当時、もっと英語での情報提供が欲しかった。テレビで1日1回、英語での情報が流れたが、リアルタイムで常に更新される

情報が欲しかった。職場の人は自分のことで忙しいので聞けなかった。自分で必要な情報を調べるしかなかった。ホームページに、毎日の新聞の見出しやダイジェストを多言語で表示して欲しい。ラジオは聞けなかった。日本語が理解できないから、映像がないと日本語が理解しにくい。

(中通り地方男性 欧米)

震災当時、facebookや繋がる携帯で情報交換をして、自分たちで判断をして行動した。本国からの情報と友人が本国から得た情報を行動の指針にした。日本のニュースと本国のニュースが違って、混乱した。日本のマスコミからの情報は信じられないと思った。ラジオは避難所で聞いたが、日本語ばかりなので、あまり役に立たなかった。

(中通り地方男性 欧米)

英語での詳しい情報が欲しかった。ラジオは聞けなかった。聞きたいとは思いますが、日本語なので内容がわからない。

(中通り地方男性 欧米)

何が起きたのか、インターネットで調べた。自分の安全を知らせるメールを家族・友人に送った。Skypeはずっと繋がっていたので、情報交換、安否確認に役立った。発災後約30分で、CNNのニュースを見たアメリカの友人から安否を確認する電話が携帯に入った。日本語がわからないので、日本語のラジオは聞けなかった。日本のラジオで多言語による災害情報が流れたとしても、日本語による放送のごく一部、ほんの一瞬でしかないと思う。インターネットでアメリカのラジオは聞いた。日本政府の発表、アメリカ政府の発表、フランス政府の発表、同僚の意見、みんな違って

て、誰を信じていいかわからなかった。

(中通り地方男性 欧米)

インターネットは不安が大きくなるから見なかった。facebookで友達と相談した。車の中でテレビを見た。ラジオは聞かない。食べ物が買える店の情報が欲しかった。

(中通り地方女性 東南アジア)

テレビで言っていた津波の避難の呼びかけの意味が分からなかった。テレビで津波の映像を見て、映画で見た景色が現実にも起きたと理解した。

(中通り地方女性 東アジア)

テレビとインターネットを毎日見ていた。主人が読んでいる日本の新聞の情報も教えてもらった。ラジオは聞かない。スカパーを含めてテレビのみ。映像はあるし、英語の放送もあるから。日本人はとても注意深いから、その人たちと同じ行動をとってれば大丈夫だと思った。日本のメディアと外国のメディアで情報が違って、自分で選択した。80%は日本のメディアから情報を取った。

(中通り地方女性 東南アジア)

役場には電話が繋がらなかった。大使館にも電話が繋がらなかった。母国出身者には、大使館からのサポートがなかった。留学生だけを避難のために迎えに来た。町の有線放送で、原子力発電所が危険な状況にあるので、食料と水を備蓄するように呼びかけがあったので、3月12日早朝から、畑に出て野菜を収穫した。国内の携帯電話は繋がらず、国外からの電話は繋がった。

(中通り地方女性 東アジア)

同国人のキーパーソンのところに情報が入ったが、そこから、私たちのところに情報がまわって来なかった。仙台から母国向けの避難の飛行機が出たそうだが、全く知らなかった。今後は私たちも情報を得られるようにしたい。

(中通り地方女性 東アジア)

ラジオは聞かない。テレビやパソコンから情報を得る。日本語教室の人とは電話が繋がらず連絡できなかった。市役所から避難用のバスが出るらしいと教えてもらった。緊急地震警報が欲しい。

(中通り地方女性 東アジア)

給水車の情報は何も知らなかった。近所の日本人とのつきあいはない。友だちの家の井戸水ももらっていた。車のラジオを聞いて、放射能の対策を知った。

(中通り地方女性 東アジア)

インターネットで母国のニュースを聞いた。日本語がわからないので、日本のテレビからは情報が得られなかった。ラジオは聞かない。津波のことは全く分からなかった。夫からの情報に頼っている。他の誰に聞いたら良いかもわからない。

(中通り地方女性 東南アジア)

携帯電話が繋がらなかったのも、何の情報も得られなかった。ラジオは聞いた。しかし、情報はテレビだけから得ていた。テレビもわからないことが多く、詳しいことは何もわからなかった。食べ物がどこに行けば手に入るか、どこに避難したらよいのかといったことを知りたかった。

(中通り地方女性 東南アジア)

テレビしか見なかった。インターネットはやっていなかった。震災後始めた。ラジオを聞く習慣がない。食べ物と水と寝るところの情報が欲しかった。テレビでは放射能の影響について、何も伝えなかった。これは大きな問題だと思う。

(中通り地方女性 東南アジア)

震災後、どこで水がもらえるのかという情報が欲しかった。情報が入るのが遅かった。ラジオもテレビも一度聞き逃すと(見逃す)とその情報が流れるまでずっと待たなければならない。何かしながらだと、なかなか情報が得られない。知りたい情報をすぐにキャッチしたかった。

(中通り地方女性 東アジア)

ラジオは聞かない。震災後、母国に帰国した息子のパソコンを使ってQQをするようになった。

(中通り地方女性 東アジア)

情報を隠したり、情報が遅かったり、日本政府の対応が問題だった。ラジオは聞かない。友だち、家族と連絡を取りたかった。ライフラインがいつ回復するのか、避難所がどこにあるのか知りたかった。隣に住む年配の日本人に聞いてもわからなかった。

(中通り地方男性 東アジア)

国際電話で情報を得た。東京の大使館からも情報を得た。東京の大使館が準備した避難のバスに乗って東京に行った人もいる。バスの情報も支援物資の情報もコミュニティのキーパーソンのところに入り、そこから情報が非常に早く拡散されていった。日本政府は情報の発表が遅い。原発のメル

トダウンの情報は政府発表の2時間前にはもうカナダに住む妹から情報を得て知っていた。日本語の勉強にもなるので、震災前からラジオを毎日聞いている。震災後は24時間ラジオをつけていた。

(中通り地方女性 東アジア)

スマートフォンを持っていたがあまり繋がらなかった。E-mailで情報発信をした。

(中通り地方男性 東アジア)

テレビと町内の有線放送を聞いていたが、どんな情報だったのか覚えていない。ラジオは会社では聞くが、家では全く聞かない。

(会津地方女性 東南アジア)

英語の新聞は取っていない。あの状況(アドバイスが頻繁に変わった)で何が役に立ったのかわからない。ラジオも持っていなかった。携帯電話を使おうとしたがよく通じなかった。地震後、facebookは驚くべき資源だった。facebookで友達の無事を確認することができたし、状況について他の人と討論することができた。いつもテレビを見ていたが、英語での情報が欲しかった。ラジオを持っていなかったので聞かなかった。これからは災害時には聞くつもり。初期の段階で原発事故の説明が欲しかった。

(会津地方男性 欧米)

テレビをずっと見ていた。ラジオは聞かない。みんなの生活がどうなるのか、子どもの将来のこと、食べ物が入るか、特に赤ちゃんがいる人のことが心配だった。

(会津地方女性 東南アジア)

BBCとCNN(海外メディア)から情報を得た。食料やガソリンがいつ補給されるのかについての情報の欠如により、私を含めて買い物でひどいパニックが発生した。より多くの情報があれば、人々の気持ちを落ち着かせたり、避難する必要があるか人々が判断するのに役立つはずだ。テレビのニュースで基本的な情報は得られた。しかし、自分の日本語レベルは中級なので、詳しい情報はテレビでもラジオでも得ることは難しい。ラジオはテレビが見られたので、聞かなかった。もし、テレビが見られない場合はラジオの用意はある。

(会津地方男性 欧米)

(5) 震災を経験して

避難所生活で、人の嫌な面もたくさん見た。一人で不安で病気になりそうだった。困ったときに相談できる行政の窓口があるといい。日本語の先生は個人なので、遠慮があって聞きにくい。災害に対する事前の知識があればよかった。そうすればもっとあわてず焦らず行動できた。

(避難対象地域女性 東アジア)

震災によって、今まで見えなかったことが見えた。物は簡単になくなってしまおうのだとわかったので、物に執着しなくなった。物がなくても生活できると思った。

(避難対象地域女性 欧米)

避難所で、日本語が不自由なばかりに濡れ衣を着せられても思うように反論ができなかったし、謝罪もしてもらえなかったのが悔しくて、日本語で喧嘩ができるように日本語を勉強している。

(避難対象地域女性 東アジア)

有事のときは日本語ができることがとても必要なので、日本語を勉強しようと思い、現在日本語教室に通い勉強している。

(避難対象地域女性 東アジア)

被災外国人として、何回か取材を受けた経験がある。匿名を条件に新聞の取材に応じたのに、名前を出されて、とても嫌な思いをした。

(避難対象地域女性 東南アジア)

18歳のとき、すべてを捨てて避難した経験がある。震災後、健康に気をつけるようになった。日本人は、目の前にある大切なことに気付かない人が多いと前から思っていた。市役所もパニックになって、情報の発信がなかった。放射線量の情報をしっかり発信してほしい。

(浜通り地方男性 東南アジア)

いつ死んでもいいと思って暮らしている。あまり心配しないで、積極的に元気に生きている。放射能の影響で病気になることは心配していない。今を一生懸命生きることが大切だと思う。

(浜通り地方女性 東アジア)

震災前、私は原子力発電所がどこにあって、住んでいる所からどのくらい離れているか知らなかった。避難所についても何も知らなかった。英語による情報提供は非常に遅く、日本のウェブサイトでは、いったい何が起きているのか何も伝えなかった。今回の経験から、政府も地方行政も情報提供を考えるうえで外国出身住民のことも考慮に入れるようになっていくことを願う。

(浜通り地方女性 欧米)

震災は非常に恐ろしい出来事だったが、日本人は我慢強いと思った。他の国からの協力や国内の人々の協力に感動した。西洋文化は、徹底的にディスカッションする文化なのに対して、日本人は政府の言うことに従順で我慢強く従っている。みんな一緒に行動をする。とてもユニークな文化だと思う。しかし、それだからこそ、こんなに復旧が早く進んだのだと思う。

(浜通り地方男性 欧米)

今回の震災はとても衝撃的で、こんな大きな地震に遭うとは想像したことがなかった。地震の後でも、眠れない夜が続いていて、またこんな大きな地震が起こるのではないかと心配している。私達は今生きていることと、家族全員の安否を確認できたことを神様に感謝している。現在まだいろいろなことで心配しているが、お互いを支え合いながら、地震の悪夢を忘れようと思っている。

(浜通り地方女性 東南アジア)

震災後、福島県内の避難所や宮城県でボランティア活動をしてきた。日本で何が必要とされているかを聞き取り、海外から送ってもらい避難所等に提供した。市役所と連絡を取り、災害支援センターの指示のもと炊き出し等をした。避難所に物資を提供するに当たり、外国人からの支援物資を日本人は快くもらってくれるか心配だった。炊き出しも支援物資も、日本人は快くもらってくれた。それは日本人の優しさから来ていると思う。イギリス人やフランス人だったら、プライドが高く、貧しい国からの援助は拒否したかもしれない。私たちは、何も持たず、ゼロから日本で商売をして今の財産と地位を築いた。外国から来た人を温かく受け入れて、商売をさせてくれた日本人に、私は大きな恩を感じている。震災で日

本人が困っている今、恩を返す時だと思って、支援活動を熱心に行った。日本に住む外国出身者は日本にも外国にもネットワークを持っている。その外国出身者のコミュニティの潜在的な能力を活用するアプローチが国際交流協会からあってもよかったのではないだろうか。どんな団体があって、どんなことができ、どんなところとつながっていて、キーパーソンは誰か、といったことを、普段から把握しておいた方がいい。国際交流協会が行っている日本語支援は、話すことだけでなく読み書きもしっかりと教える場を提供してほしい。高いレベルの日本語を身につけた外国出身者は長い目で見ると、経済や文化の面で日本社会にいい影響を与える。

(中通り地方男性 東南アジア)

食料は常備食があったので、困ることはなかった。2日間断水したが、飲料水の備蓄があった。トイレの水は川の水を使った。公民館で給水があるという知らせは広報車から聞いた。一番困ったことは、ガソリンが手に入らなかったこと。常にガソリンを満タンにしておくようにしている。

(中通り地方女性 東アジア)

災害時、弱者となる日本語ができない外国人をどうサポートするかが今後の大きな課題だと思う。年配で日本語の習得が困難であるが日本に住み続けなければならない外国人もいる。言葉もわからず災害が起きている場所にいるということは、どうしようもない恐怖を感じパニックを引き起こす。ストレスから脳出血を発病した家族もいる。母国の家族から帰国を促されたが、職場を離れることができないことを家族に伝えた。半年後に震災で延期していた里帰りができた。放射能の問題に関しては、日本政府から多言語による

メッセージが欲しかった。

(中通り地方女性 東アジア)

1か月後に避難先から戻ってきたとき、ゴーストタウンのようだった。ゆっくりだったが人が戻ってきて、大学に新入生も入ってよかった。日本人は、災害時にもパニックにならず素晴らしい。発災2か月後ごろ、居酒屋で飲んでいたら、見ず知らずの日本人から、「残ってくれてありがとう」といった言葉をかけられた。お互い泣きそうになった。災害から生き残った者として、日本人外国人関係なく福島県人として、福島の復興を望んでいる。自分は被災者(victim)だとは思われたくない。自分は生存者(survivor)である。災害時、日本の中小の組織ではリーダーが素晴らしいリーダーシップをとって災害に対処していた。

(中通り地方男性 欧米)

震災2、3日後に商品を卸に行ったが、汚染地域から避難している人がたくさんいる町で作ったものは、放射線がうつるからと言って断られた。寂しかった。外国人が福島に来ないという前に、福島の人が戻ればいいと思う。福島県の復興のためにいつか戻りたいと言うのではなくて、今すぐ戻ってきてほしい。避難している人の行動が正しいとしたら、福島に残っている人はどうなるのか。福島の人が福島を大変にしている。日本人は、よくルールを守る。ガソリンを買うための行列を見てそう思った。近所の人とはとても親切だった。目に見える景色は何一つ変わっていないのに、日常生活はとんでもないことになっている。食べ物のやり取りができなくなって、人間関係が分断されたように感じる。震災後、何もやる気がなくなった。心と体が元気ではなくなった。

(中通り地方女性 東アジア)

地震は本当に怖かった。人生で出遭ったことがないような経験だった。家は停電しなかったが、水は1週間でなかった。放射能は今もその影響が続いている。

(中通り地方女性 東南アジア)

震災後の苦しいときに、周りの人々の本音や人間性が見えた。今後は、自分のしたいことをしようと思う。同国人のコミュニティがあって本当によかった。苦しいときに支えあい、情報交換することができた。日頃からたまに集まって、母国の料理を食べたり、おしゃべりをする中で、お互いの心の支えになっている。知り合いに、3月18日、仙台から子どもを連れてヒッチハイクで東京まで行った人がいる。日本語ができなかったため、情報がまったく取れなかったようだ。航空会社に国際電話で母国の実家から電話をし、実家の両親が料金を支払うから飛行機に乗せてくれと交渉し、帰国することができた。

(中通り地方女性 東アジア)

母国政府の機関は福島にいる私たちのために何もしてくれなかった。当時、同国人同士であっても、住むところや家族構成によって、それぞれ状況が全く違っていった。私の場合、近所のコミュニティは高齢者が多く、自分が支援者として助ける立場だった。

(中通り地方女性 東アジア)

当時、何の情報も入って来ないため、どうすれば良いかわからなくて右往左往し、不安が一杯だった。日本政府の広報体制に問題がある。それから、東電が情報の隠ぺいや公表を遅らせたことなどで県民に必要な以上の被曝をさせた責任を自覚し反省してほしい。そして事故の教訓をどう活かすか、真剣

に考えてもらいたい。安全神話が崩れたので、原発をなくしてほしい。

(中通り地方女性 東アジア)

よく仙台の海岸近くに遊びに行くので、土日だったら津波の被害にあっていたかもしれない。震災を経験して、小6の息子が母国で僧侶の修業をする気になった。昨年2週間、お寺で修行してきた。家をリフォームした直後の地震だったのでリフォームした部分は無事だったが、他の部分が大きく壊れて、またリフォームしなければならなくなった。

(中通り地方女性 東南アジア)

家族一緒が一番いい。みんな一緒だと大丈夫だと思う。人と人とのつながり、そのためのコミュニケーションが何より大事だと思う。自分の周りにはいい人がたくさんいて幸せだ。夫もやさしく、自分は幸せだ。

(中通り地方女性 東南アジア)

今の日本人は親切で、親身になってくれる。関東大震災のときのことはそれを体験した祖父母から話を聞いていたが、日本人から差別されたり身の危険が及ぶかもしれないという危機感はなかった。ただ、外国人登録という制度上の問題で東京電力の補償申請の書類が届くのが遅れたときに、日本人との違いを感じた瞬間だった。しかし、外国人登録の制度が変わり、住民基本台帳に一元化されたことで、それも解消されると思う。

(中通り地方女性 東アジア)

学生寮に住んでいる留学生よりも、アパートに一人で住んでいる学生が災害弱者になりやすいので問題が大きい。学生は、何かあったら留学生会館に集まるとか、事前に

決めておくといい。今回、領事館が用意した新潟行きの避難者用のバスが出ていたことを知らなかった。情報から漏れてしまう人を失くすために、キーステーションの役割を果たす場所があるといい。

(中通り地方男性 東アジア)

地震に備えて、食料や水を備蓄しておくことが重要だとわかった。また、家でパジャマでくつろぐ習慣を改めたい。

(中通り地方女性 東アジア)

地元福島復興を願っている。そのためにできることを何でもしたい。活躍のチャンスが欲しい。こんな事故は二度と起きないようにして欲しい。日本人だけじゃなく、福島を選んで福島に来た外国出身者の人生も変えられてしまった。福島が悲しい現実で世界中で有名になるのではなく、別ないいことで有名になって欲しい。土地も家もない。とにかく、現金が大切だと思った。お金があれば、自由に避難することもできる。平成23年は、メンタル崩壊状態で、落ち着かず、何も考えられず、何もやる気が起こらなかった。人生の選択の危機だった。友人の中には、アパートが全壊し、大学を辞めて帰国した人もいる。それぞれの人生において厳しい選択を強いられた1年だったと思う。母は早く帰国し、結婚するように進めるが、私はまだ、福島に留まり自分の可能性を追求したい。そのために、ボランティアや仕事、いろいろなことに挑戦したい。自分の語学力を活かした活動がしたい。

(中通り地方女性 東アジア)

生存と避難のために食料と貴重品をバッグに入れて準備すること、避難のために十分なガソリンを車に入れておくことが大切だと

思った。東京電力と政府からの国民への情報がうまく流れていないように思う。人々を混乱させている。当時、多くの関係機関が有効に機能していなかった。

(中通り地方男性 東南アジア)

福島原発事故のとき、妊娠中の娘と幼い孫たちも一緒に住んでいたのだが、その子たちは放射線を浴びたのではないかと心配している。将来、孫たちにどんな影響が表れるかわからない。そのようなことがあったとして、東京電力と日本国がどんな助け(つまり、医療関係とか賠償のこと)をしてくれるのか、今、私はどんな準備をしておくべきかなど、心配することがたくさんある。福島に住んで、地元の人たちにたくさん助けられて心から感謝している。震災のときはもちろん自分の家族のことを心配したが、日本人の友だち、日本の皆さんのことも心配で涙が止まらないときもあった。震災後、仕事の都合によって関西地方で半年過ごしたが、福島に残っている友人たちのことを思うと罪悪感も感じていた。これからも福島に住みたいと思っている。地震があるとゆれは怖いし福島原子力発電所は大丈夫かなと心配することもある。事故後、復興のためにたくさんの方たちが命を懸けて働いているが、正直なところ復興が遅いと感じている。福島の復興のために日本政府は、もっとたくさんスピーディーな対策をして欲しいと思う。福島県民は一生懸命に頑張っているのを毎日見ているが、時間が経つと政府や東電の方が福島のことを忘れてしまいそうで心配だ。福島県民は自分たちの家族や子どもたち、孫たちのために政府など関係のあるところに強く訴えたほうがよさそうに思う。将来、福島と東アジアのつながりをもっと作っていききたい。

(中通り地方女性 東アジア)

日本語や日本の習慣を学ぶ場が欲しい。外国出身者も日本の文化や習慣を学ばなければならないと思う。今回の震災で、外国出身者は情報が取りにくかった。テレビで母国語の情報(字幕など)が少しでもあればよいと思う。領事館が用意したバスの情報は母国にいる兄からの電話で知ったし、無料でかけられる国際電話の情報も入らなかった。同国人がつくった団体をキーステーションにし、またはキーパーソンとなる人にまず情報を流して、そこから、多くの人に情報が流れるようにすることが重要だと思う。これからのグローバルな社会で生きていく子どもたちが、2つの言葉を取得することは必要なことで、日本生まれの子どもに母語を教える活動は、非常に重要な活動だと思う。

(中通り地方女性 東アジア)

福島は人が住めないところになっているという情報が世界に出回っていることが問題。学生なので、外国人のネットワークに詳しくなかった。今後は同国人のコミュニティに参加したい。原発に関する情報は母国から取ろうとした。

(中通り地方男性 東南アジア)

震災時、大使館からの情報を迅速に広範囲に伝える手段の確立が必要。大使館と日本の行政の連携があればもっとスムーズに伝達することができた。外国人がなるべく同じ避難所に避難できるよう誘導できれば、もっと有効に情報を伝えることができたと思う。一つの避難所に外国人が集まってくれば、通訳もそこに重点的に配置することができるし有効に支援できると思う。

(中通り地方女性 東アジア)

IV

人それぞれ、状況や強さが違う。避難する人も避難せずに残る人も、それぞれだと思う。夫もそう理解してくれている。

(中通り地方女性 東アジア)

原発は国策のはずなのに、国が東京電力に責任を押し付けている気がする。本当の情報が入って来ない。今回の震災の経験を将来に役立つように活かしてほしい。過去に起きた関東大震災を思い出し、風評による迫害がまた起きるのではないかと緊張した。しかし、そのようなことは起きなかったので、時代は変わったと思った。今までは、自分から積極的に情報を収集し、自分を守らなければならなかった。お互いカバーしあって、不利益を被らないようにできるといい。

(中通り地方女性 東アジア)

自然災害の前では、人間というのは無力だなと思った。災害によってもたらされた現実を受け入れるしかない。国や国籍など関係なく、たくさんの人の人生が一転したと思う。それを受け入れるのは本人も社会全体も時間が必要だ。放射能問題については全世界の問題。いつ、どこで何が起きるかは予測不可能なので、国際的に助け合い協力し合い理解し合う必要がある。

(中通り地方女性 東アジア)

今回の地震で、日本人の冷静さを実感した。私たちのようにパニックに陥ることがなかった。助け合いの精神も素晴らしかった。

(中通り地方女性 東アジア)

食べ物、水、懐中電灯、防寒着、ガソリン、情報を得るための物の準備が必要。思い出し

たくない苦しいことが多いので、話したくない。でも、日本人はみんな親切だった。とても感謝している。

(中通り地方女性 東アジア)

福島に来て6年目になった。震災が起きてすごく心配だったが、住民があわてないで落ち着いて行動している姿を見て感動した。家族と連絡がつかなくなるので、何か起きたときどこで待っているとかといった約束が必要だと思った。常に水と食べ物を準備しようと思った。ガソリンが半分になったら、車にガソリンを入れようと思っている。

(中通り地方女性 東アジア)

震災直後、日本人は大騒ぎしないで冷静だった。しかし、今も政府に対して何も発言しないで、100%政府を信じていていいのかと思う。政府に対してメッセージを出していかないと政府は変わらない。国民が何も言わないから、政治家は国民をなめるのだと思う。良いことも悪いことも口に出して言わない日本人の心の中は誰もわからない。私はそんな日本人は嫌だ。日本人は変わった方が良いと思う。

(会津地方女性 東アジア)

東京電力や原子力関連産業の完全な準備不足である。震災の前、放射能を含む物質が放射されることを一般の市民は知らなかっただろう。私はこういうことが起きるとは想像できなかった。前もって知っていたら、原子力発電所の近くに住まなかったし、建設される前に必死に止めただろう。震災について、正確で誠実な情報が欲しかった。原発の爆発後数日は、生命の安全を一番に考え、避難の準備をしていた。私は2週間の間に5キロも痩せてしまったが、食べ物のこ

とはあまり心配していなかった。放射線を逃れて、安全に避難する方法のほうがはるかに重要であった。お金持ちの人は自由に移動ができる。しかし中間層以下は、自由に避難することは難しい。

(会津地方男性 欧米)

自然災害はいつでもどこでも起こりうる。だから、私たちができることは困難な状況になる前に安全対策を取ることである。特に、原子力発電所のような重要な建物の建設にあたっては。個人的に私は、福島に原子力発電所を建設した時、関係者はそのことを真剣に受け止めていなかったと思う。原子力は必要であるが、あのような状況でそれがどれほど危険かを理解する必要がある。日本のような先進国でもその現場では無力だった。だから、安全対策を取る余裕がない発展途上国は、原子力を使用する前によく考えるべきである。

(会津地方男性 東南アジア)

今回の地震を経験して、身をもって日本人の国民性の素晴らしさを体験できた。秩序よく災害に向き合い、一丸となったところが、私たちにとっては見習うべきものであった。

(会津地方女性 東アジア)

(6) 今後、行政に期待すること

海外への福島からの情報発信については、福島が日本のどこにあるか知らない人が多いので効果的ではないと思う。

(浜通り地方女性 東アジア)

インターネットはみんなが使っているので、有効な情報伝達手段だと思うが、使え

なくなったときのことを考えて、携帯メールによる情報の発信も考えたほうが良いと思う。テレビの字幕に英語版もあった方がいい。

(浜通り地方女性 欧米)

カウンセリングをしてもらえるのなら市役所等で実施のお知らせがあるといい。放射線情報については、政府のホームページで見られることができるが、簡易版を県国際交流協会で発信してもらってもいい。

(浜通り地方男性 東南アジア)

津波から辛うじて救い出された同国人がいた。怖い思いをした人や母子家庭の人などを対象にカウンセリングや相談できる場所が必要。

(浜通り地方女性 東南アジア)

テレビとラジオの情報は日本語以外の言語がなく、少なくとも英語で情報を提供して欲しかった。避難所のリストの情報を提供して欲しい。外国出身者は日本で親戚もいないので、彼らのため避難所の機能もちゃんと説明して欲しい。

(浜通り地方女性 東南アジア)

大きな音が聞こえると地震の前兆かと思いきドキドキする。カウンセリングをして欲しい。日本人も同じではないか。多言語による防災のパンフレット作成、テレビの緊急地震速報の多言語化も必要である。外国人コミュニティの潜在的な能力を活かすための情報収集もしてはどうか。

(中通り地方男性 東南アジア)

外国人のお嫁さんを持つ日本人男性の多文化共生教育をして欲しい。とても重要なことだと思う。

(中通り地方女性 東アジア)

すべての情報を公開してもらうのが一番重要。市に防災に強い街を作りたい。例えば、避難訓練の充実や耐震性の強いビルの建設など。

(中通り地方女性 東南アジア)

行政や県(各市町村)の国際交流協会と関係する大使館あるいは領事館のネットワーク作りに取り組めば良いのではないか。情報をもっと早めに発信してもらえれば、外国出身者にとって非常に助かる。

(中通り地方女性 東アジア)

学生向けの情報発信のキーステーションがあるといい。

(中通り地方男性 東アジア)

来日間もない外国出身者は、ホームシックにかかりやすく精神的なサポートが必要。ボランティアの日本語教室があることを周知することが大事。日本語を学ぶ場を知らない外国出身者がまだ多くいる。放射線情報があると安心できる。

(中通り地方女性 東アジア)

やさしい日本語で放射線の情報が欲しい。日本語で相談できるところが欲しい。

(中通り地方女性 東アジア)

震災時、大学では留学生のケアができなかった。大学から情報を発信することができなかった。来日間もない留学生は、頼る人もなくとても困ったと思う。県国際交流協会が大使館と留学生をつないで、ケアをしてくれたらありがたい。

(中通り地方男性 欧米)

(7) 支援活動

自分の教会が避難所の役割を果たした。教会の役目は、困っている人の役に立つこと、助けとなること。そのためには人と人とのつながりを持つことが大切だと考える。そこで、震災後、教会としてボランティア活動を積極的に行ってきた。

(中通り地方男性 東アジア)

教会から車で7分のところに仮設住宅がある。ボランティア活動を通して、新しい隣人とのつながりを作っている。被災された方は、今までより狭い空間で暮らし、思いもよらない人間関係を作らざるを得ない。それは、価値基準がない新しい人間関係である。また、今までいかに要らないものに囲まれて暮らしていたかに気づかれた人も多い。ボランティア活動で話を聞くと、自分は何のために生きるのかを考える刺激となるよう心がけている。これからもいろいろな奉仕活動をしたいのだが、どうやってしたらいいのか、他の団体とどうやって繋がったらいいのかその方法がわからなくて困っている。

(中通り地方女性 東アジア)

瓦礫撤去や写真洗浄のボランティアをした。老人だけの家庭の掃除の手伝いをした。どんなボランティアでもいいので、ボラ

ンティアがしたい。でも情報がない。1か月、避難所に住んで、子どもに英語を教えたり、子どもと遊んだりをボランティアでした。ラジオもテレビもない避難所で子どもたちのストレスを和らげるために。

(中通り地方男性 欧米)

ボランティアがしたかった。2万円近いお金を払って、東京から石巻でのボランティアツアーに参加した。現在も、もっとボランティアがしたい。地震から生き残った者として(Survivor)として罪の意識を感じる。英語でのボランティアのインフォメーションが少ない。

(中通り地方男性 欧米)

避難してきた子どもたちにも英語を教えた。日本語ができなくてもできるボランティアの情報が欲しかった。避難所のことを知っていたら、ボランティアに行っていたのに、いけなくて残念だ。

(会津地方男性 欧米)

やりたいことはあるが日本の法律や制度がわからないので自信がない。どうしていいかわからない。

(浜通り地方女性 東アジア)

自分にできるボランティア活動があったら参加したい。

(中通り地方女性 東アジア)



V 資料編

1 震災復興版ジャイロ「がんばろう福島」創刊号・第2号

Gyro ジャイロ がんばろう 福島

(財) 福島県国際交流協会 創刊号

※本紙の英語版・中国語版は、当協会HPでダウンロードできます。
平成23年5月1日発行



この度の東日本大地震により被災された方々に、心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。

福島県国際交流協会は、震災及び原子力災害後の福島県の現状や、がんばっている国際交流団体や外国出身県民の様子などを県内外、国内外に発信していきます。



(写真左) 桜が満開の福島市内の風景

(写真右) いわき市小名浜災害ボランティアセンターに届けられた救援物資



理事長あいさつ

この度の東北地方太平洋沖地震と津波で多くの尊い命や財産を失い、さらに原発の事故による甚大な被害を被りました皆様に心よりお見舞い申し上げます。被災された方々をはじめ県民の皆さんの思いを考えると、一刻も早い原発事故の収束と被災地域の復興を願うばかりです。

福島県国際交流協会では、災害発生直後から県国際課とともに、「外国語による地震情報センター」を立ち上げ、外国出身県民への英語や中国語などによる情報提供と相談に務めてまいりました。

これからも、日本語の理解が不十分なことなどから、より大きな不安を感じている外国出身県民にできる限りの安心を届けるため、行政や民間国際交流団体等とも手を携えて、様々な支援に取り組むとともに、当協会の新しいキャッチフレーズ『心と心でつながる、世界に開かれたふくしま』の実現を目指してまいります。

県民の皆さん、そして国際交流のために様々な活動を行っている皆さん、この未曾有の災害、原発事故から福島県を必ず復興させましょう。

平成23年4月 理事長 山川充夫



原子力被害、放射能に関する知識

福島県HP（福島県国際交流協会HPへリンク）では、「環境放射能測定結果(暫定値)」や「飲料水(水道水)環境放射能測定結果(暫定値)」を日本語、英語、中国語で、県国際交流協会HPでは、それらに加え、タガログ語、韓国語、ポルトガル語で随時更新しています。 <http://www.worldvillage.org/>

以下、放射能に関する主な質問について福島県HPから抜粋して掲載します。 <http://bit.ly/hsYy1a>

【Q1】 飲み水も味噌汁にまでもミネラルウォーターを使っています。野菜を洗うのも怖いのですが、どう対応するべきでしょうか？

(A1) 基準値以上の放射性ヨウ素が検出された水は飲まない、飲ませない、というのは賢明な選択でしょう。ただし、それでも、数回飲んでしまったからといって心配する必要は、今の放射線レベルならまったくありません。野菜を洗ったり、顔を洗ったり、お風呂に入ったり、と生活用水に使うのはなんら心配いりません。

【Q2】 小学生の子供がいる。外で遊ばせても大丈夫なのでしょう？洗濯物も外で干していいのでしょうか？家には24時間換気システムがついているのですが、切ったほうがいいのでしょうか？

(A2) 1時間当たりの環境線量が10マイクロシーベルト以下であれば、もう外で遊ばせて大丈夫です。ただし、指についた土をよく洗わせたり、来ていた上着のホコリを払わせたりしたほうがよいかもしれません。洗濯物についても、取り込むときに少し丁寧にホコリを払う程度で問題ありません。布団干しも同様に大丈夫です。換気についてもシステムを切ったりサーバスになる必要はありません。

※1 ミリシーベルト=1,000 マイクロシーベルト

(発行者追加記載)※胃のX線集団検診1回当たりの放射線量は、600 マイクロシーベルト/回

がんばる Fukushima

手塚玲子さん(福島市)

当協会多文化共生サポーターである中国出身の手塚さんは、ご自身も福島市内に家族とお住まいで、断水などで何かと大変な中、震災後にオープンした「外国語による地震情報センター」で、県災害対策本部から出される様々な情報を中国語に翻訳するとともに、中国語による相談に応じてくれました。

誰も体験したことのない大地震と津波、原発、そして度重なる余震という誰でも不安で仕方がない時に、手塚さんの前向きな姿勢と笑顔には相談者も助けられました。



在日本大韓国民団福島県地方支部 (郡山市)

福島県内に在住する韓国出身者や韓国人旅行者のサポート及び韓日交流等を行っている当本部は、いち早く県内の団員の安否確認をするとともに、24時間の韓国語による相談窓口を開設しました。また、東京の同組織から届いたペットボトルの水やレトルトごはん、韓国のりなどの支援物資を、いわき市と福島市の役場そして、ビッグパレットふくしまに届けました。

特になかなか食べられない韓国のりは、入所者の皆さんにさぞかし喜ばれることでしょう。

<http://www.mindan.org/>



NPO 法人ザ・ピープル(いわき市)

いわき市を拠点に古着リサイクルを通して、環境、障がい者自立支援、国際協力など多角的に市民活動を展開しているザ・ピープル。震災後から、水が出ない、ガソリンがないなどのないないづくしの環境の中でも、古着や生活用品を避難所に配ったり、風評被害にあっている農家と避難所での野菜不足の現状をマッチングさせたりと、日頃の国際協力活動で培ったボランティア精神とバイタリティ、機動力が集結した活動を、いつもお世話になっているいわき市民のために展開してきています。会のキャッチフレーズ『元気な街には、元気な主張を続け、元気に行動する 市民がいる』を文字通り実行しています。なお、4月19日には「いわき市小名浜地区災害ボランティアセンター」を立ち上げました。 <http://www.iwaki-j.com/people/>



V

お知らせ

『外国語による地震相談センター』

福島県国際交流協会では、英語と中国語で、震災に伴う様々な相談に応じています。その他の言語は、他の相談機関をご紹介しますので、お気軽にお問い合わせください。

- 時間：毎日9時～16時
- 電話：024-524-1316(専用)、024-524-1315
- URL：<http://www.worldvillage.org/>
- E-mail：info@worldvillage.org



当協会のメッセージ



台湾から届けられた応援メッセージ



在福フィリピンの方からの応援メッセージ

発行者

(財) 福島県国際交流協会

〒960-8103 福島県福島市舟場町2-1 福島県庁舟場町分館2階

☎024-524-1315 FAX 024-521-8308

E-mail info@worldvillage.org URL <http://www.worldvillage.org>

Gyro

がんばろう 福島

(財)福島県国際交流協会

第2号

※本紙の英語版・中国語版は、当協会HPからダウンロードできます。

平成23年5月20日発行号

この度の東日本大震災により被災された方々に、心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。福島県の現状や、県内の国際交流団体や外国出身県民の様子などをお伝えします。



福島の今



津波で大きな被害を被った相馬港1号ふ頭付近(相馬市 2011.4.12撮影)



観光客で賑わう会津鶴ヶ城(会津若松市 2011.4.26撮影)



通勤通学客で混雑する福島駅前(福島市 2011.5.9撮影)

東日本大震災から2カ月が経ち、広大な福島県は様々な姿を見せている。日常の生活を取り戻した福島市。第一原子力発電所から20~30km圏内にあるため住民とともに役場機能も移転し、新たな土地で懸命に生活再建に取り組む大熊町や双葉町他6町村。大津波で壊滅的に破壊されながらも、復興に動き出している相馬市。原発事故が障壁となり、復旧、復興がままならない南相馬市。今回新たに避難を指示された飯館村。風評被害で観光客数が落ち込んでいる会津若松市。そしてこの風評被害は、観光地会津だけでなく全県に向けられ、様相をさらに複雑にしている。

一方で、明るいニュースも次々と入っている。東北新幹線の全線運転再開、満開の桜に賑わう会津鶴ヶ城、全国に広がる福島産品の応援店、避難所から自宅に戻る人

たち、母国への一時帰国から福島に戻りつつある外国人など、県民に「福島は負けない」という復興への希望を届けてくれる。そして日本中、世界中からの支援の手は、「福島は一人でない」という安心感を届けてくれる。

私たちは、立ち止まってははいられない。日常を取り戻した地域から元気になり、その元気を復旧、復興が必要な地域に届けよう。「Fukushima Crisis」のイメージを「元気なふくしま」に置き換え、日本中、世界中からの支援に伝えていこう。当協会は、外国語での災害対策に力を注ぎながら、各地で再開しつつある国際交流活動を支援していく。

平成23年5月9日 専務理事 渡辺幸吉

V



福島県内各地の環境放射能測定値(暫定値)の推移

(福島県のホームページから抜粋)

福島県HP(福島県国際交流協会HPにリンク)では、「環境放射線測定結果(暫定値)」や「飲料水(水道水)環境放射能測定結果(暫定値)」、「農産物被害等関連情報」など様々な被害状況即報を日本語、英語、中国語で随時更新しています。(県国際交流協会HPでは、その一部を、タガログ語、韓国語、ポルトガル語で更新しています)

<http://www.worldvillage.org/>



※平常値は、平成21年度放射線レベル調査結果です。

単位：マイクロシーベルト/時間

日時	福島市	郡山市	白河市	会津若松市	南会津町	南相馬市	いわき市平
(平常値)	0.04	0.04-0.06	0.04-0.05	0.04-0.05	0.02-0.04	0.05	0.05-0.06
2011.4.1 9:00	2.44	2.24	0.73	0.24	0.08	0.92	0.58
2011.4.15 9:00	1.92	1.75	0.73	0.19	0.08	0.62	0.35
2011.5.1 9:00	1.61	1.51	0.61	0.18	0.08	0.52	0.26
2011.5.13 9:00	1.46	1.36	0.60	0.17	0.08	0.49	0.22
福島第一原発からの方向及び距離	北西 約63km	西 約58km	西南西 約81km	西 約98km	西南西 約115km	北 約24km	南南西 約43km

※測定地点は、福島市は県北保健福祉事務所、その他の市町は県合同庁舎敷地内です。

がんばる福島

後藤キャサリンさん(福島市、フィリピン出身)

当協会タガログ語通訳員である後藤さんは、震災直後から自主的にフェイスブックを通じて、福島県の被災状況や当協会の地震情報センターの情報などを国内外に流したり、ボランティアでフィリピン大使館と県内にいるフィリピンの方々との連絡調整役を担ったりしていました。後藤さんは、一人でも多くの人たちがデマに惑わされず正しい情報を得て、冷静に行動してほしいと思ったそうです。



船と翼の会ふくしま(福島市)

内閣府青年海外派遣事業で派遣された福島県出身者で組織するこの会は、震災後いち早く様々な団体と連携して、避難所に物資を運んだり炊き出しを行っています。また、文部科学省ポータルサイトを活用して学校で必要な物資調達のサポートを行うなど、ボランティア精神をベースに、これまでの活動の中で培ってきたネットワークを生かして、きめの細かい支援活動をしています。



<http://www.iyeo.or.jp/fukushima/>

会津若松市国際交流協会(会津若松市)

震災当時は会津若松市も大きなゆれがありました、幸いにもガス、水道、電気といったインフラに支障はありませんでした。そこで、いち早く地元のFMラジオ放送局と協力して英語での情報発信を行う一方、被災した当協会から県内の市町村国際交流協会への情報の送信を代って行っていただきました。

観光地である会津は、震災で直接的被害は少なかったのですが、風評被害で観光客数が大きく落ち込んでいます。元気の会津を取り戻すため、地元の外国出身者に、今の会津の姿をそれぞれの母国に発信してもらっています。



<http://awia.jp/>

お知らせ

『外国語による地震情報センター』

当協会では、英語と中国語で、震災に関わる様々な相談に応じています。その他の言語については、他の相談機関をご紹介しますので、お気軽にお問い合わせください。

- 時間：毎日9時～16時
- 電話：024-524-1316(専用)、024-524-1315
- FAX：024-521-8308
- E-mail：info@worldvillage.org
- URL：http://www.worldvillage.org/

『国際交流・協力団体災害支援助成金』

当協会に登録している県内の国際交流・協力団体等の皆さんが行う支援活動に対して、上限10万円の助成を行っています。

詳しくは当協会HPをご覧ください。

- 第二次締切 5月20日
- 第三次締切 6月15日

応援プレゼントが届けられました



台湾は、1999年9月21日に発生した地震で、死者3千人を超える大きな被害を被りました。今回、

この台湾地震で大きな被害があった南投県にある明潭国民中学校の生徒さん一人ひとりからメッセージとプレゼントが福島県に寄せられました。当協会ではさっそく中国語で書かれたメッセージを中国語サポーターの方々に翻訳していただき、この中学校と同規模校である福島市立立子山小学校に届けました。立子山小学校では、国境を越えた台湾のお友達からの心温まるメッセージとプレゼントに感謝していました。

発行者

(財) 福島県国際交流協会

〒960-8103 福島県福島市舟場町 2-1

福島県庁舟場町分館 2階

☎024-524-1315 FAX 024-521-8308

E-mail info@worldvillage.org

URL <http://www.worldvillage.org>

2 「平成24年度東日本大震災及び東京電力第一原子力発電所事故に関わる外国出身等県民アンケート」調査票

① 現在の居住市町村名

② 震災時の居住市町村名

③ 出身国(国籍)

④ 在福年数(在日年数)

該当する答えにしてください。

⑤ 性別 男 女

⑥ 年代 ～10才代 20才代 30才代 40才代 50才代 60才代 70才代～

⑦ 日常使用する言葉(複数回答可)

日本語 英語 中国語 その他()

⑧ 職業

現在 主婦(主夫) 農林水産業 会社員 学生 自営業 その他()

震災前 主婦(主夫) 農林水産業 会社員 学生 自営業 その他()

⑨ 誰と住んでいますか

現在 一人で住んでいる

誰かと住んでいる (日本人 日本人はいない)

⇒ 誰ですか 家族 職場の同僚 友人知人 その他()

震災前 一人で住んでいた

誰かと住んでいた (日本人 日本人はいない)

⇒ 誰ですか 家族 職場の同僚 友人知人 その他()

⑩ 県(または市町村)の国際交流協会を知っていますか？

現在 はい いいえ 震災前 はい いいえ

⑪ 県(または市町村)の国際交流協会が、外国人支援を行っている事を知っていますか？

現在 はい いいえ 震災前 はい いいえ

⑫ 次の日本語の言葉を知っていますか？(震災時知っていましたか？)

知っている言葉すべてにしてください。

現在 地震 津波 避難 原発事故 放射線 防災訓練 避難所

震災前 地震 津波 避難 原発事故 放射線 防災訓練 避難所

⑬ 震災前、地震が起きたらどんなことをするか、どんなことが起こるか知っていましたか？

知っていたものに✓をつけてください。

	✓		✓
机の下などに隠れて身の安全を確保すること		津波が来る前に高台に避難しなければならないこと	
水・電気・ガスがストップすること		福島県には原子力発電所があること	
学校や公民館が避難所になること		原子力発電所で事故が起きたら、放射線が出る可能性があること	
自宅の近くの避難所に行くこと		一定以上の放射線量は人体に危険であること	
避難所には、外国人も入れること		国際交流協会が英語や中国語などで情報発信や相談に応じていること	
避難所では、水、食料、情報がもらえること		その他、防災対策について、ご意見を自由にお書きください。	
余震があること			
沿岸部では津波が起きること			

⑭ 震災発生後3月中はどのようにして必要な情報を得ましたか？

該当する項目すべてに☑をつけてください。

何か特記事項がある場合には、「特記事項」に記載してください。

(1) 使っていたメディア(ハード面)

新聞 テレビ ラジオ パソコン 携帯電話

スマートフォン その他()

「特記事項」

(2) 使っていたメディア(ソフト面)

インターネットで検索 E-mail Facebook Twitter

QQ スカイプ その他()

「特記事項」

(3) 連絡を取った組織

市役所・役場 国際交流協会 大使館 教会

その他()

「特記事項」

(4) 情報をくれた人は誰か

(国別)

母国の人・同国出身の人 同国外の外国出身の人 日本人

(コミュニティ別)

家族・親戚 近所の人たち 日本語教室 大学や職場の仲間

PTAやサークルの仲間 宗教関係のコミュニティ 同国出身者のコミュニティ

その他()

「特記事項」

⑮ 震災前後での具体的行動の変化がありましたか？

震災前にしていた項目と現在している項目に✓を付けてください。

	震災前	現在	
緊急持ち出し袋の準備			
避難経路・避難所の確認			
食糧や水の備蓄			
家族等の安否確認方法の確認			
⇒どんな方法で安否確認をしますか⇒			
	震災前	現在	当てはまる場合は✓に
避難(防災)訓練への参加			<input type="checkbox"/> 参加してみたい
日本語の学習			<input type="checkbox"/> 機会があれば参加したい
町内会や同国人などの団体への参加			<input type="checkbox"/> 減った <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらず
その他()			

⑯ 放射線に関わることで、現在どのくらい不安ですか？(該当する欄に✓をつけてください)

	不安	少し不安	あまり不安ではない	不安はない
健康への影響はどうか				
賠償は今後どうなるのか				
避難すべきか				
原発事故の再発はあるのか				
水や食料は安全か				
環境放射線はどのくらいあるのか				
その他()				
その他()				

⑰ 今後、行政(県協会)に取り組んでほしいことは何ですか？(該当する欄に✓をつけてください)

	必要	少し必要	あまり必要ではない	必要ではない
避難(防災)訓練				
英語・中国語での災害情報発信				
やさしい日本語での災害情報発信				
英語・中国語での相談窓口				
AEDなど救急講習会				
英語・中国語での県外海外に向けた福島の実況の発信				
英語・中国語でのカウンセリング				
やさしい日本語でのカウンセリング				
参加できる災害ボランティアの情報				
日本語が勉強できる場所				
英語・中国語での放射線情報発信				
同国出身者による団体を支援すること				
その他()				
その他()				

7. 現在、一番知りたい情報や困っていること、将来への不安があれば、自由に書いてください。

8. 今回の震災で思ったことがあれば、自由に書いてください。

アンケートへのご協力ありがとうございました。

もっと詳しく話をしてもいいとお考えの方へ

当協会スタッフがインタビューに伺いますので、インタビューに応じてくださる方は下記に名前と連絡先(携帯番号等)を書いてください。ご協力お願いいたします。

インタビューに協力する

お名前

ご連絡先(携帯電話番号)

インタビューに協力しない

3 各国・地域における日本渡航に関する勧告状況および在留自国民への注意勧告

平成23年4月14日現在

国・地域名	月日	内容(上段:訪日渡航注意勧告/下段:在留自国民への注意勧告)	発出先
韓国	4月13日	渡航勧告(4段階評価)の上から2段階目にあたる「渡航制限」地域に、福島県飯舘村、川俣村、田村市、南相馬市を追加指定。「渡航自粛」地域から青森県をはずす。 ○渡航禁止地域:対象地域なし ○渡航制限地域:福島第一原発から半径30キロ以内+4/13新規追加指定の地域 ○渡航自粛地域:岩手、宮城、福島、茨城県 ○渡航注意地域:東京都と千葉県	韓国外交 通商省
	3月17日	福島原発から半径80キロ内に滞在する自国民に対して退避勧告。	
中国	3月15日	被災地への渡航延期を勧告。	中国国家 旅遊局
	3月16日	被災地域から退避するように勧告。	中国外交部
台湾	3月15日	東北地区、関東地区の全域(東京を含む)および北海道東部および南部沿岸地区を「退避勧告」地域とし、沖縄を除く「退避勧告」地域以外の日本各地方については「渡航注意」地域に指定。	台湾外交部
	3月15日	被災地域(青森県、岩手県、宮城県、福島県、北海道、山形県、茨城県)からの退避を勧告。	
香港	3月15日	福島県に次いで、宮城県、岩手県、茨城県を渡航延期勧告地域に追加。その他の地域は、不要不急の渡航延期を勧告。	香港政府
	3月17日	「原発事故は非常に深刻で、さらに状況が悪化すれば脱出が困難になる」として東京からの退避勧告。	
タイ	3月15日	被災地への渡航自粛を勧告。	タイ外務省
	3月21日	●福島原発から80km圏内に居住する自国民に対し、もし居住する必要が無いのであれば当該圏内から移動を検討するよう勧告。 ●岩手県、宮城県、福島県に居住する自国民に対し、タイへの帰国を望まない者については日本の南の地方に移動するよう勧告	
シンガポール	3月22日	(勧告レベルが緩和され)不要不急の渡航の延期を勧告。	シンガポール 政府外務省
	3月17日	福島第一原発から半径100km以内からの待避を勧告。特に福島、宮城からの即時退避を指示すると同時に、近接する山形、新潟、東京、千葉、神奈川、埼玉、群馬、茨城、栃木からも、不要不急の場合以外は退避を検討するように呼びかけ。	
豪州	3月18日	東京、その周辺および本州の東京以北の地域について必要不可欠な場合を除き「旅行回避(5段階中最高)」とし、それ以外の地域を、「高レベルの注意(5段階中3つ目)」に設定。	オーストラリア 外務省
	3月18日	福島原発から半径80キロ内に滞在する自国民に対して退避勧告。	
米国	4月14日	福島第一原発の半径80キロ以外への渡航自粛勧告を解除。	米国内務省
	3月17日	福島第一原発の半径80キロ以内に住む自国民に対して避難勧告を行っていることを受け、日本在住の自国民に対しては国外退去について検討するよう呼びかけ。	在京米国 大使館
カナダ	4月6日	・渡航自粛対象地域から東京とその近郊ならびに千葉県を除外。 ・不要不急の渡航自粛対象地域に栃木県と群馬県を追加し、青森県を対象外。 (対象地域:茨城県、宮城県、岩手県、福島県、栃木県、群馬県)	カナダ政府
	3月17日	福島原発から半径80キロ内に滞在する自国民に対して退避勧告	
英国	4月7日	(勧告レベルが緩和され)、渡航自粛対象地域から東京を除外(東北地方については引き続きすべての不要不急渡航自粛を勧告)。	英国外務省
	4月7日	福島原発から半径80キロ内に滞在する自国民に対して退避勧告。 東京及び東京より東に在住する自国民へは福島原発の動向に注意するよう勧告。	
フランス	4月7日	(勧告レベルが緩和され)「職業上や家族上の」必要に迫られるのでない限り、日本へは渡航しないよう勧告。	フランス外務省
	4月7日	宮城県・福島県・茨城県・栃木県への訪問は延期することを強く勧告。	
ドイツ	4月7日	(対象地域限定に緩和) ●本州東北部・福島にある原発周辺地域へは訪問しないよう警告する。 ●関東地域への不要不急の旅行は差し控えるよう警告する。	ドイツ外務省
	4月7日	●本州東北部・福島にある原発周辺70km圏の地域には滞在しないよう警告する。 ●放射線の見地からは、東京・横浜地域への滞在は目下のところ無害であるが、子供と若年層は放射線耐性の低さから、この地区への滞在は避けるべきである。 ●東京・横浜地域滞中に際しては、福島の原発の不安定さに鑑み、日本の当局の行動の指針及び勧告に絶対従うこと。また、事態悪化には備えておくこと。	
マレーシア	4月1日	日本への渡航延期を再度勧告。特に東北地方への渡航を延期と同地域からの退避を強調。それ以外の地域についても、「原発問題に注意して」旅行をするように勧告。	マレーシア 外務省
	4月1日	原発から半径80km以内からの退避を勧告。	
ロシア	3月12日	当面、観光や私用の渡航自粛を勧告。	ロシア外務省
	3月23日	被災地域への訪問は控えるように注意勧告。	
インド	3月17日	不要不急の渡航自粛を勧告。	インド外務省
	3月11日	在日インド大使館内に、24時間ヘルプホットラインを開設。	在日インド 大使館

上段:訪日渡航注意勧告

下段:在留自国民への注意勧告

(出典:各国外交当局HP)

4 東日本大震災の被災地3県における 主な在留資格別在留外国人数

(参考：各月末現在の外国人登録者数)

		平成22年	平成23年	平成23年	平成23年	平成23年	対前年末 増減率(%)	在留外国人数 (年末現在)			
		12月	3月	6月	9月	12月		平成24年 12月	外国人登録者数との増減率 対前々年末 (%)	対前年末 (%)	
中 長 期 在 留 者 に 該 当 し 得 る 在 留 資 格 ・ 特 別 永 住 者	総 数	外国人登録者数	2,087,261	2,053,782	2,056,664	2,053,558	2,047,349	-1.9	2,038,159	-2.4	-0.4
		うち 永住者	565,089	574,145	580,748	590,077	598,440	5.9	628,396	11.2	5.0
		日本人の 配偶者等	196,248	192,800	190,478	185,495	181,617	-7.5	162,291	-17.3	-10.6
		定住者	194,602	189,811	186,486	181,528	177,983	-8.5	164,945	-15.2	-7.3
		留学	201,511	161,317	185,298	186,272	188,605	-6.4	180,953	-10.2	-4.1
		技能実習	100,008	123,082	142,505	144,718	141,994	42.0	151,540	51.5	6.7
		家族滞在	118,865	119,508	120,633	120,032	119,359	0.4	120,799	1.6	1.2
		人文知識・ 国際業務	68,467	70,129	70,589	68,926	67,854	-0.9	69,793	1.9	2.9
		その他	642,471	622,990	579,927	576,510	571,497	-11.0	559,442	-12.9	-2.1
	岩 手 県	外国人登録者数	6,147	5,217	5,170	5,126	5,210	-15.2	5,374	-12.6	3.1
		うち 永住者	1,561	1,587	1,601	1,629	1,659	6.3	1,753	12.3	5.7
		日本人の 配偶者等	778	736	715	681	658	-15.4	542	-30.3	-17.6
		定住者	256	240	232	220	212	-17.2	185	-27.7	-12.7
		留学	425	339	358	356	365	-14.1	320	-24.7	-12.3
		技能実習	1,124	696	916	999	1,060	-5.7	1,306	16.2	23.2
		家族滞在	129	136	132	131	135	4.7	163	26.4	20.7
		人文知識・ 国際業務	72	71	72	70	71	-1.4	74	2.8	4.2
		その他	1,802	1,412	1,144	1,040	1,050	-41.7	1,031	-42.8	-1.8
	宮 城 県	外国人登録者数	15,942	14,409	13,910	13,910	13,865	-13.0	14,221	-10.8	2.6
		うち 永住者	3,983	4,060	4,066	4,137	4,219	5.9	4,418	10.9	4.7
		日本人の 配偶者等	1,507	1,450	1,411	1,337	1,283	-14.9	1,219	-19.1	-5.0
		定住者	413	399	390	388	387	-6.3	366	-11.4	-5.4
		留学	3,376	2,611	2,720	2,697	2,669	-20.9	2,497	-26.0	-6.4
		技能実習	865	347	278	341	380	-56.1	749	-13.4	97.1
		家族滞在	1,183	1,097	1,089	1,060	1,034	-12.6	1,021	-13.7	-1.3
		人文知識・ 国際業務	360	377	363	362	365	1.4	415	15.3	13.7
		その他	4,255	4,068	3,593	3,588	3,528	-17.1	3,536	-16.9	0.2
	福 島 県	外国人登録者数	11,190	10,222	9,835	9,623	9,569	-14.5	9,260	-17.2	-3.2
うち 永住者		3,889	3,952	3,880	3,888	3,906	0.4	4,125	6.1	5.6	
日本人の 配偶者等		1,662	1,580	1,508	1,396	1,336	-19.6	1,095	-34.1	-18.0	
定住者		703	664	647	595	584	-16.9	505	-28.2	-13.5	
留学		583	491	467	421	416	-28.6	332	-43.1	-20.2	
技能実習		1,072	847	866	909	900	-16.0	1,053	-1.8	17.0	
家族滞在		270	264	260	245	234	-13.3	215	-20.4	-8.1	
人文知識・ 国際業務		221	220	201	185	184	-16.7	174	-21.3	-5.4	
その他		2,790	2,204	2,006	1,984	2,009	-28.0	1,761	-36.9	-12.3	

注) 1 平成23年までは外国人登録者数のうち中長期在留者に該当し得る在留資格及び特別永住者の数。平成24年は中長期在留者に特別永住者を加えた在留外国人の数である。
2 留学は、「留学」と「就学」の合計。技能実習は、「技能実習1号イ」、「技能実習1号ロ」、「技能実習2号イ」及び「技能実習2号ロ」の合計である。

(出典：法務省入国管理局HP)



終わりの言葉にかえて

終わりの言葉にかえて

東日本大震災から3年目を迎え、改めて外国出身住民にとっての震災を振り返って整理すると、以下のとおりとなる。

震災時の外国出身住民の状況

- ・平時と比較して、地域に暮らす外国出身住民が直面する「言葉の壁」「心(文化)の壁」、そして「制度の壁」がさらに高くなり、様々な厳しい状況に置かれていた。
- ・原子力災害による母国等への避難に関わり、2つの母国の間で大きな葛藤があった。
- ・被災者(地)を「支援する」という側面も持っていた。

震災時の当協会の取り組みの問題点

- ・災害発生直後においては、人的・時間的な制約や通信インフラの途絶等により、多言語による災害情報の提供を十分に行うことができなかった。
- ・孤立した日本語が分からない外国出身住民に対し、効果的な対応ができなかった。
- ・各国の大使館等が自国民の避難のためのバスを手配するなど様々な活動を行ったが、その状況を把握できず支援することができなかった。

現在の外国出身住民の状況

- ・日本語で書かれた賠償問題等手続き書類の煩雑さと複雑さに不安を抱えている。
- ・住み慣れた土地を離れ、再度慣れない土地で避難生活を強いられストレスを抱えている。
- ・放射線に関わる夫婦、親子、母国の家族の間の価値観の違いによる軋轢に悩んでいる。

今回の震災から見た5つの想定外

- 1 発災時における「情報提供＝多言語」には、人的・時間的な問題から限界があったこと
- 2 発災時における「情報提供＝インターネットや携帯電話」は、停電や繋がりにくさから限界があったこと
- 3 発災時における「支援場所＝避難所での支援」には、避難所に行かない(行けない)外国人もいることから限界があったこと
- 4 災害時においては、支援者と位置づけられている組織や人材そのものが被災し、支援活動に限界が生じたこと
- 5 「地震＝建物の崩壊や津波」だけでなく、「原発事故に伴う放射線被害、そして風評被害」が発生し、しかもそれが長期化していること

今回の災害において、当協会は様々な活動を行ったが、それらは決して十分と言えるものではなかった。しかしながら、今回の災害の支援活動を通じて、外国出身住民の拠点(キーパーソン)を事前に把握し、接触を絶やさないようにしておき、いざという時に、その拠点を通じて一人一人への情報の伝達・拡散を図ることや、常日頃から大使館等との連携を取っておくことが重要であることを学ぶことができた。

また、当協会そのものが被災し、支援活動に限界が生じるという想定外のことが起こったことも指摘しなければならない。

当協会は、震災により事務所への立ち入りが制限され、外国人相談窓口として周知していた固定電話番号、ファックス、メールが使えなくなった他、外国人相談窓口として対応していたスタッフが、原発事故による一時避難のため不在となった。さらに、交通・通信インフラの麻痺及びガソリン不足により、県内の状況把握が十分にできなくなった。

このように、想定をはるかに超えることが起こるのが災害である。だからこそ、支援に携わる私たちは、想定外のことが起こった時に、迅速かつ的確に対応できるように、平時から柔軟な発想力と的確な判断力の醸成、そして顔の見える人的ネットワークの構築に努めなければならないのではないだろうか。

また、今回の災害で、外国出身住民と地域住民がともに困難な体験をし、復興への道を一緒に歩いていく中で、多くの人が外国人・日本人の枠を超えた連帯感を肌で感じているのではないだろうか。この機運を今後どのように生かしていくか、これも大きな課題である。

以上、これらのことを今回の震災及び原発事故から得られた知見として、この記録のまとめとしたい。

外国出身住民にとっての東日本大震災・原発事故
FIA活動の記録
～FIAの取り組みと外国出身住民100人の証言～



発行年月:平成25年7月

発行者:公益財団法人福島県国際交流協会

〒960-8103 福島県福島市舟場町2-1 福島県庁舟場町分館2階

TEL 024-524-1315 FAX 024-521-8308

E-mail info@worldvillage.org

URL <http://www.worldvillage.org>



当冊子は、(財)自治体国際化協会の助成事業により作成したものです。

Voices
From Fukushima,
Future
From Fukushima